第Ⅳ章　人工遺物

今帰仁城跡で出土する人工遺物は主郭（俗称本丸）第Ⅰ～Ⅳ期までに伴う遺物とこれ以降の時代のものも多く含んでいる。本報告では第Ⅰ～Ⅳ期までの遺物を主に扱う。出土遺物は多岐にわたりそれらをまず材質と用途を中心に分類した。人工遺物は陶磁器（土器・カムィヤキ須恵器など含む）、瓦、玉類、煙管、遊具、銭貨、金属製品、石器、骨製品、貝製品の 10 の分類項目を設定した。また、特に多量に出土した陶磁器については、前章にも述べたとおり第Ⅸ～Ⅰ層の良好な堆積状況を確認することができ、これを整理しⅨ・Ⅶ・Ⅵ・Ⅴ層及びⅠ～Ⅳ層の陶磁器として細節を設け記載する。陶磁器以外の遺物に関してはⅠ～Ⅸ層をまとめ各分類ごとに紹介した。

第 1 節　陶磁器

①　分類

出土した土器・カムィヤキ須恵器・瓦質土器・陶器・磁器（以下陶磁器）は産地によって在来（南西諸島）品と外来品に大別分類され、後者は日本・中国・タイ・ベトナムの各産地ごと（更に、竜泉窯・同安窯等窯産地の細分も含む）に分類、これを青磁・白磁・陶器などの種別に分類することができる。また、各陶磁器は器種や胎土（素地）・施釉方法・器形等によって細分可能である。分類についてはこれまでの研究を参考に志慶真門郭の報告書[註3]を基準としながら、補足修正を行い分類した。分類に際しては矢部良明、長谷部樂爾、亀井明徳、楢崎彰一、脇田晴子、小野正敏、森田勉、出川哲郎、金城亀信、島袋春美、森本朝子、間壁忠彦の各氏からご教示を得これを参考にした。

南西諸島在地産土器陶磁器

1.　土器（第 3 表）

土器は野焼きで製作されることから、今帰仁城跡及び当該地を中心とした近隣の地域で生産されたものと考えられる。Ⅰ群の貝塚時代の土器群とⅡ群のグスク時代の土器群に大別される[註4]。Ⅰ群土器は破片で少数出土するのみで器形は判然としない。胎土は砂質で精製され器表面の手触りがザラっとする。Ⅱ群土器の器種は浅鉢形（鍋形）・壺形・甕形を主体として碗形・ミニチュア等が散見される。いわゆるグスク（系）土器と呼称され、当該期の搬入文物の影響を強く受けた土器群として認識される[註5]。壺形は口頸部の形状からａ・ｂに分類、甕形は口頸部の形状からａ・ｂ・ｃに、碗形は陶磁器の白磁口禿皿（ｃ）・白磁ビロースクタイプ碗（ａ）・青磁の直口手の碗類例えば鎬蓮弁文碗等（ｂ）の模倣と考え、口唇部の形状から３つに分類した。ミニチュア土器の出土は希少で主郭（俗称本丸）からは１点出土している。

2. カムィヤキ須恵器（第４表）

近年徳之島のカムィヤキで古窯跡が発見され、その産地が確認された須恵器である[註6・7]。志慶真門郭の報告では「中世須恵器」と報告したもの[註8]がこれにあたる。鉢・壺の２器種が確認されている。壺は口縁部の形状からａ～ｄに分類した。胎土は精製された素地で白色の鉱物粒を僅かに含む。灰色で堅緻なものと赤褐色で軟質なものがみられるが、焼成による相違と判断される。

3. 沖縄産陶器

幅広の底部で高台脇から外に開く直口口縁の灰釉碗、高台脇まで施釉し見込みは露胎となる、いわゆるフィガキー（釉薬に浸して掛け、見込みと高台を露胎させる）といわれる手法による。胴部には鉄絵による文様を描く。

4. 瓦質土器

近年湧田古窯跡の発掘調査[註9]で検出された資料に類例が見られる。志慶真門郭の調査でも少量検出されている。泥質の胎土で石英微細粒と赤色粒が混和材として用いられる。

本土産陶磁器

5. 瓦質土器

瓦質の鉢で前述した瓦質土器とは胎土が異なり、南九州産と推定される[註10]。瓦質焼成され灰色で外面にはタタキを、内面には荒い刷毛目と浅い擂目が確認される。

6. 備前擂鉢

備前の擂鉢で、素地は粗砂粒を含み還元焼成された灰色のものと、酸化焼成で赤色のものがみられる。志慶真門郭で報告したとおり古式のものはに備前編年Ⅲ末からⅤ期のものまで出土、14 世紀中頃～ 16 世紀の製品とされる[註11・12]。

6. 瓦器

瓦質焼成の鉢で口縁に菊花が押印される。在地産の瓦質土器、前述の瓦質土器の鉢とは異なり、胎土が砂質で精製される。透明鉱物微細粒が混和材として用いられる、いずれも器高の低い火鉢と考える[註13・14]。

中国産陶磁器

7. 青磁（第５～ 10 表）

検出された陶磁器類の中で最も多かったのは中国産の陶磁器で、中でも青磁が多数を占める。青磁の器種は碗・皿・盤・鉢（浅鉢・擂鉢）・杯（馬上杯・小杯・浅杯）・壺（酒会壺・小壺）・水注・瓶（環耳瓶・方瓶）・香炉・器台・燭台・置物・合子・托（たく）などが確認されている。特にバリエーションに富み出土量の多い碗・皿・盤・杯・香炉については第５～ 10 表のように分類した。各分類については志慶真門郭の分類[註15]（以下志慶真分類）、及び大宰府分類[註16]、金武分類[註17・18]、上田分類[註19]、亀井分類[註20]を参照に行った。

碗（第５・６表） 劃花文碗は小破片で出土、碗で大宰府分類Ⅰ-4 類に該当する。鎬蓮弁文碗とした資料は志慶真分類蓮弁文碗Ⅰ群に該当、大宰府分類Ⅰ-5 に該当する。輪花碗と砧系の鎬蓮弁文碗とした資料は大宰府分類Ⅲ類。ラマ式蓮弁文碗は県内でも類品を見ない

龍泉窯系の優品とみられる（志慶真分類Ａ窯系）。日本出土品と新安沈船を比較検討（以下これも含み大宰府分類し追加[註21]）されたⅢ’とされている資料に近似すると考えるが、底部を失い分類には詳細な検討を要する。蓮弁文碗は一般的には「片切彫の鎬蓮弁文をもつものからヘラ先による細線蓮弁文へと変遷していく」とされる（上田分類）。無鎬蓮弁文碗は志慶真分類ではⅡ類に該当するａ～ｄの４種分類を、上田分類Ｂ－Ⅱ類を参考にａ・ｂの２種分類、大宰府ではこの一部をⅣ類とする。志慶真分類ａは大宰府Ⅳ類に該当し、同ｂ・ｃ・ｄは上田分類Ｂ－Ⅱａに、同ｅは上田分類Ｂ－Ⅱｂに該当する。分類基準は底部の特徴、器形、文様、施釉方法などに求めるが、各系譜関係などが複雑で精粗などの差があり分類は細分を避けた形で無鎬蓮弁文碗を４種に分類した。剣先蓮弁文碗とした資料は線刻蓮弁文碗の小野分類Ｂ及び上田分類Ｂ－Ⅲ・Ⅳで蓮弁文碗でも新しい時期に位置付けられる。同資料を含む一括として紀淡海峡の友ガ島沖の資料が知られる[註22]。線刻蓮弁文碗は志慶真分類Ⅲａ・ｂ・ｃを該当させ、線刻蓮弁文碗ａ・ｂ・ｃとした。小野は前者剣先蓮弁文碗をＢ-1、後者線刻蓮弁文碗をＢ-2 とし、上田分類では前者をⅢａとする。線刻蓮弁文碗ａは山梨県東八代郡一宮町荒巻本村出土品にて類品を多出し[註23]、上田分類ではＢ-Ⅲ- ｂ及びＢ-Ⅳ- ｂなどが近似すると考える。同碗ｂ・ｃは上田分類Ｂ-Ⅳ- ａ・ｂ・Ｂ-Ⅳ’などがあてられると考える。弦文帯碗は大宰府分類のⅣ類に該当すると判断されるが、完形の資料に乏しく全体的には不明である。口縁部は内湾、外反の資料があり、内外面の文様により数種に分類可能である。本調査出土資料の完形資料から底部は見込みが凹み高台は高く、高台の外側はほぼ直になり、高台端部の面取りはない。体部には張りがあり大振りになる資料が多い。雷文帯碗は小野分類Ａに該当。当該資料については箆彫りと型押しの２分類にとどめるが器のサイズ、小野氏の指摘する文様などバリエーションも認められる。しかし他の資料に比して全形をうかがえる資料に乏しく今回は大別分類にとどめている。波濤文碗は器形的には線刻蓮弁文碗ｃ、無文直口碗に類似する。櫛描きで口縁部外面に波状文を施す。無文外反碗は体部無文のものを指し、内面に文様を施すものも一部含まれる。無文碗は３大別し外反する外反口縁碗、直口になる直口碗、そして逆ハの字に外開きになる無文碗である。外開きの無文碗は青磁とも白磁とも判断し難いが本分類に含めた。これは宇茂佐古島遺跡[註24]で近似する資料が白磁に分類され、志慶真門郭の資料にも近似する資料がある。高台は広く腰部から逆ハの字形に外開きになり、見込みは露胎となる。無文外反碗は上田分類のＤ類、直口口縁碗はＥ類に概ね該当するが、上田分類に含まれないものも多分に含んでいると考えられる。特に灰色の素地に薄手の釉を施釉し、口径はやや広く志慶真分類でＢ窯系とした無文外反碗ｂや、玉縁口縁碗とした見込みを釉剥ぎする特徴を持つ資料で佐敷グスク ST02 一括資料に近似する玉縁口縁碗の無文外反碗ｃは一時期を画するものとして今回も前分類に引き続き設けている。

皿（第 7･9 表）は同安窯系の櫛描文、無文の皿があり大宰府分類の同安窯系皿Ⅰに該当すると考える。見込みを露胎をさせるものも当分類に含めたが窯系統などが別とも判断される。無文平底小皿は大宰府分類の青磁龍泉窯系皿Ⅰ類に該当する思われる。内面有段皿は口縁内面に線彫りで唐草を描く、県内でも類品の少ない資料である。口径の広い直口口縁皿は口唇部にやや丸みを持ち弦文が外体面を廻る。口折皿は金武分類に従いⅠ・Ⅱに大

別分類した。口折皿Ⅰ類は内体面から鍔面へ折れる部分が比較的明瞭な稜を有する資料で内・外面の文様を中心に４つに細分した。いずれとも、高台は畳付だけ掻き取って露胎とする。口折皿Ⅱ類はⅠ類に比して鍔面へ折れる部分が丸みを持つ資料で底部は広く厚みがある。竹節状高台で高台内の釉を掻き取る。直口口縁の皿は蓮弁文を施す皿と無文の皿がある。蓮弁文を施す皿は蓮弁の形態から数種に分類可能で、無文皿は玉縁になるものとならないもの、見込みは文様と釉剥ぎの有無などによって数種に分類可能である。器形サイズから大振りになる直口皿と小振りになる直口皿に大別される。腰折れの外反皿は文様の有無と口縁部を稜花とするか否かによって概略６種に分類した。内外面に蓮弁文を配し口唇部を刻む菊花皿は前述した小振りの直口皿と器形では近似する。器壁は薄く見込みは凹む、高台は細く逆三角形で高台端部を釉剥ぎし露胎する資料を景徳鎮窯系とした。これは２種確認されており、菊花皿は口縁部を刻み、高台内に字款を施す。腰折れ皿は口唇部を刻む資料で輪花とする。後者は刻んだ箇所から白い釉垂れが認められる特徴がある。

盤（第９表）は口縁部の形態から折縁の盤と摘み上げのない鍔縁盤Ⅰと摘み上げのある鍔縁盤Ⅱ、口縁部が外に開きながら直口する直口口縁Ⅰ、同様の器形に口唇部を肥厚する玉縁口縁盤の直口口縁Ⅱと、やや内側に直口する直口口縁Ⅲの概ね６類に分類できる。各分類は内外面の文様などから数種に分類可能である。文様は折縁盤では外面に蓮弁を施す例が認められる。内面の文様は鍔縁盤Ⅰでは片切彫り、箆彫りによる草花文を施すものと幅広の箆彫り蓮弁とやや密な箆彫り蓮弁が認められる。幅広の蓮弁文を施す資料には鍔縁端部を稜花とする資料も多く見られる。鍔縁盤Ⅱは内体面の文様が草花、幅広の箆彫り蓮弁、幅の狭い密な箆彫り蓮弁、櫛による蓮弁及び無文の資料も認められる。草花文、無文のものは資料に乏しく図化については行っていない、資料の増加をもって追加分類したい。直口口縁の盤は外開きの口縁で内面に劃花文を施す直口口縁盤Ⅰと玉縁を呈するの直口口縁Ⅱ、及び内湾気味の直口口縁となる直口口縁盤Ⅲの３大別が可能である。直口口縁Ⅰは内体面に劃花文を施す資料で新安沈船資料にも確認できる比較的古式の資料である。玉縁口縁盤は箆彫りの蓮弁を施すか、または無文とする。直口口縁盤Ⅱは内体面に箆彫りで比較的密に蓮弁文を描く。本資料には口唇部を刻む資料もあるが完形資料に乏しく、これについては資料の増加を待ち検討したい。

杯（第 10 表）は高足杯、百合口杯、べっ甲口縁杯、蓮弁文杯、碁笥底の小杯がある。高足杯はいわゆる馬上杯で脚部と杯部からなり、外反する口縁に深手の杯部と底部内面を円錐状に中空とする資料。百合口杯は内外面を幅広の蓮弁文が廻り口縁は上面がゆるやかに波状となる。べっ甲口縁杯・蓮弁文杯ａ・ｂの３種はいずれも外体面に蓮弁文を施す資料で底部は碁笥底となる。べっ甲口縁杯は箆彫りにより弁先の尖る蓮弁文を描く、同様の口縁部文様を有する資料にべっ甲口縁鉢とした底部高台を有する資料がある。蓮弁文杯Ⅰは外体には間隔をもって細い箆彫り、内面には幅広の蓮弁文が廻る資料で口唇部を刻む。同Ⅱは外体面中央を上下に区画する陽圏線文を施し蓮弁文を配する。

香炉（第 10 表）は志慶真分類ａ・ｂに大型の三足香炉を追加した。

8. 白磁（第 11 ～ 12 表）

白磁は碗・皿・杯・壺・梅瓶・灯明皿・鉢・水注などの器種が確認された。特に碗・皿・杯については器形・文様・素地・釉調・施釉方法などによって第 11 ～ 12 表のよう分類した。各分類については志慶真分類、大宰府分類、金武分類、森田分類[註25]を参照に分類を行った。

碗（第 11 表） 白磁口禿碗は大宰府分類白磁Ⅸ類、森田分類ではＡ群に該当する。概略ａ・ｂの２種に分類される、ａは器高が低く直口するタイプ、ｂは器高が高く外反する。施釉は腰下部から高台脇までとするのが多いのも特徴である。枢府手の碗は志慶真門郭で報告する資料で、森田分類Ｂ群に該当する。ビロースクタイプ碗とした資料は内湾する口縁部に特徴がある一群で、金武によって県内遺跡の類例を紹介し型式設定された一群で[註26]、森田分類のＣ群の一部に該当するとされる[註27]。金武はビロースクタイプをⅠ・Ⅱに分類、前者の特徴として内体面口縁直下の陰圏線と櫛描き、後者の特徴として内外面無文で、口縁部が内彎することを特徴としてあげている。これに準じて大別、前者をビロースクタイプａ、後者を同ｂとして分類した。無文外反碗は森田分類Ｃ群に該当、素地・施釉・釉調などの特徴はビロースクタイプと近似するが高台、口縁部の形状が異なる。今帰仁タイプ碗は本遺跡Ⅶ層を主体に出土した特徴的な資料でこれまで慶田崎遺跡[註28]、ビロースク遺跡[註29]などで出土､金武は白磁薄手直口碗として沖縄で出土する白磁碗として１つのタイプを示すとして一型式を設定する。本調査によってその様相の一端がつかめたことは有意である。概して高台は幅広で低く、見込み腰下部は露胎、釉は淡緑灰色で薄く施釉。口縁部は直口し上端を平坦にするもの、丸みを有するもの、やや内湾気味のものなどバリエーションが認められる、造りは粗造な印象を受ける。内底無釉の浅碗は志慶真分類Ⅶ・Ⅷを同一分類としａに、志慶真分類Ⅸ類をｂにした。後者は金武分類の厚手直口碗で見込みに印花を施す例が多く見られる。ｃは前二者とは高台、口縁の形が異なり別分類とするのが好ましいと考える｡資料の増加を待って再検討するが暫定的に内底無釉碗ｃ類とする。口縁部は内面に段を有し外反するのが特徴で志慶真分類に追加した。ｄは志慶真Ⅴ類をあてた。尚、志慶真分類でⅥ類とした資料にも近似する。内底無釉浅碗は灰色・淡黄灰色の釉を薄く施釉するもの、白色・灰白色の釉を施釉するものがありａは両者、ｂは前者、ｃは後者の釉調を主体とする。内底無釉浅碗の本土での類品を知らないがａ・ｂなどの資料には森田Ｄ群と素地、釉調の近似するものもある。無文外反碗ｂは森田分類Ｅ類に該当、後述する青花碗のⅢ類に近似し見込みは凹み蓮子型となる。無文外反碗ｃ類は後述する白磁外反口縁杯に近似する資料で、サイズが異なるため碗に分類した森田分類ではＤ類に該当すると考える。

皿（第 12 表）は、大宰府分類Ⅸ類、森田分類Ａ類に該当する口禿皿があり、志慶真分類ではⅠ・Ⅱ類としたものを口禿皿ａ・ｂとして整理した。前者は器高が低く、後者は高いものをあてる。外反口縁皿ａは志慶真分類のⅣ類で見込みを蛇の目状に釉を掻き取るものもあるが概ね森田分類Ｄ群に該当すると考える｡直口口縁皿ａを志慶真分類に追加した。高台は幅広で厚くやや内湾気味に直口するタイプの口縁で、釉調・素地などは外反口縁皿ａなどと近似、森田分類Ｄに該当すると考える。直口浅皿、抉入り高台皿は概ね同一群と

して捉えられる。口縁部は直口し器高の低い浅手の資料で、高台を抉らないものを前者、抉るものを後者と分類、これも森田分類Ｄ群に該当する。外反皿ｂは森田分類のＥ群、金武分類の薄手外反皿に相当し後述する染付皿Ⅰ類などに器形は近似する。直口皿ｂは志慶真分類に類例のない資料で追加した、素地、釉調などは次の菊花皿などに近似する。菊花皿は口縁部を刻みいずれも菊花状とする、内外面の蓮弁文によって数種に分類されるが少量の出土で一括して扱った。碁笥底皿は碁笥底の底部に直口口縁、見込み体部の境に蓮弁文を配する硬質磁胎に白色の釉を施釉する資料である。この直口口縁皿ｂ、菊花皿、碁笥底皿はいずれも硬質磁胎、白色釉を高台際まで施釉され、器壁は薄手のつくりで口径の小さい一群であり特徴を一つにする。

杯（第 12 表）は志慶真分類を踏襲した。素地、釉調、高台作りで共通する特徴を持つ。これは白磁無文外反ｃ（志慶真分類なし）、同直口浅皿（志慶真分類Ⅴ）、同抉入り高台皿（志慶真分類Ⅵ）と同様の特徴で、素地は淡い灰色で硬くしまるものと、黄白色で比較的軟質のものがあり、腰部または高台脇から下は露胎となり、黄味を帯び細かな貫入を伴う釉調となる。高台のつくりはいずれも若干開きながらつくるものが多く畳付外端は斜めに削り、面取りをする。分類は体部のつくりと口縁により４種に分類、高台抉りの有無よりａ・ｂにそれぞれ二大別した。腰折杯（志慶真分類Ⅰ）は腰部上半は直線的に開く腰折れの杯。八角杯（志慶真分類Ⅱ）は体部を八つに面取りする。外反口縁杯は腰部は張りがあり外反する口縁部の付く杯。直口口縁杯は丸みを持った体部中央から直口口縁になる杯である。以上の杯は森田分類のＤ群に該当すると考えられる。

9. 青花（第 13 ～ 14 表）

青花は器種や釉調、呉須の発色、文様などから元代の青花と明代の青花に大別。元（様）青花は壺や杯が、明青花は碗、皿、杯、壺、玉壺春瓶、合子など多数の器種が確認された。特に多数出土した後者碗、皿、杯については第 13 ～ 14 表のように分類した。

碗（第 13 表）はⅠ類からⅦ類に分類、志慶真分類を一部整理し２分類を追加した。青花碗Ⅰ類は小野分類[註30]のＡ群に該当するもので、呉須の発色は良く素地は白色堅緻で、底部は見込みの平坦な中間タイプで高台内刳りは深い。腰部にはラマ式蓮弁文が描かれ、いわゆる元様式青花と呼称される一群である。Ⅱ類は小野分類Ｂ群に該当、中間タイプの底部に端反り口縁で、器形的にはⅠ類に近似する。Ⅲ類は小野分類Ｃ群に該当する、器形は３種に大別される。Ⅳ類は小野分類に類例を見ない標品で、志慶真分類Ⅱ類に該当の東南アジアなどの遺品に類例があり[註31]日本本土で類品をあまりみない。Ⅴ類は腰折れの器形で小野分類Ｄ群に該当する。Ⅵ類は小野分類Ｅ群に該当する資料で、見込みが饅頭状に盛り上がるいわゆる「饅頭心タイプ」の資料である。Ⅶ類は上田分類[註32]Ａ- Ⅳ類に該当する資料と思われる。Ⅶ- ａは志慶真分類Ⅵに近似、Ⅶ- ｂは追加分類とした。

皿（第 14 表）は志慶真分類Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとに準じた。Ⅰ類は小野分類Ｂ群に、Ⅱ類が同Ｃ群、Ⅲ類が同Ｅ群にほぼ該当する。Ⅰ類の資料は断面逆三角形の高台に端反り口縁の資料で、文様は内外面唐草の資料と外面唐草見込み玉取り獅子の資料の２種見られる。Ⅱ類は碁笥底の資料で直線的に外に開く口縁部となる。見込み文様は花文、外面文様は波濤文

と芭蕉文、界線と梵字文、無文のものが見られる。Ⅲ類は低い底部に高台断面は丸くやや内湾する体部に口縁部が付く資料で外体面は唐草文を見込みには人物図、草花文を施す。描画にダミ技法を用いる特徴を持つ。

大皿（盤）（第 14 表）は３分類した、Ⅰ類はⅢⅠ類の玉取り獅子を描くものに器形文様が近似しサイズが大きく異なり、口縁部は折縁とすることから当分類とした。Ⅱ類はコバルトの発色はややにぶいが筆で勢い良く鳳凰や唐草を描く明代（宣徳年間あたりか）の民窯系の青花と目される。Ⅲ類は鍔付きの皿で口縁端を刻み稜花とする。内外面体部には箆彫りによる蓮弁文が廻り、見込みに獅子、鍔縁状面には字款が書かれる。

杯（第 14 表）は小杯と杯に大別され、小杯はⅠ・Ⅱ類に、杯はⅠ～Ⅲ類に大別される。小杯Ⅰ類は薄手でやや丸みのある体部に直口口縁が付く。Ⅱ類は外反口縁の小杯で広い見込みに図柄を描く。杯Ⅰ類は短筒型を呈する腰折れ杯で描画技法はダミ技法による。文様は碗Ⅴ類と共通するものも見られる。杯Ⅱ類は体部は短筒型だがやや外開きでⅠ類に比べ文様などにも崩れが認められる。Ⅲ類は外反する口縁の杯で小杯Ⅱに文様、器形が近似する。

10. 褐釉陶器・黒釉陶器

いわゆる茶道具の天目茶碗や茶入れの小壺類及び褐釉陶器（壺、甕、鉢、擂鉢）が確認される[註33]。なかでも褐釉陶器の壺は青磁に次いで出土量が多い、今回は出土した主なものを報告することにとどめる。天目茶碗は約 100 個体程度出土する、形態はべっ甲口で底部は内刳りが浅く高台脇に明瞭な段を持つのが特徴で素地灰黒色、灰白色、灰黄色でいずれも粗粒子となる。釉は薄い茶渋釉をかけ厚い黒釉または褐色釉をかけ、禾目や褐錆斑を有するものが多いが、数点は灰黒色の素地に厚い黒釉をかける資料もありこれは建盞天目とも近似し注目される[註34]。

11. 無釉陶器

産地は不明だが暫定的に中国産に含めた無釉の陶器が数点得られている。擂鉢、香炉等が確認されている。

12. その他の陶磁器

三彩、緑釉、翡翠釉はいわゆる「華南彩釉陶[註35･36]」とされる資料で、三彩は破片で数点出土、志慶真門郭の調査ではでは魚形水滴と推定される魚の尾びれ部分の小破片、瓶の胴部片が出土、今回の調査でも袋物を中心に出土する。特に、器形を知ることができる鶴形水注が得られ注目される。類品は豊見城でも確認されている[註37]。緑釉は破片で出土、玉壺春瓶・小壺等が出土する。翡翠釉は志慶真門郭の調査同様皿・壺・瓶類が主体で磁胎と陶胎の両者が得られている。色絵、瑠璃釉などの磁器類は少数だが前者低火度軟質陶器が袋物を主体としたのに対し、碗・瓶類が主体となる。色絵は赤を主調とする資料を指し、志慶真分類で五彩とした彩色の資料も本分類に含めている。碗・皿・鉢・瓶などが出土する。瑠璃釉は玉壺春瓶と碗が出土、志慶真門郭の調査では小破片のため詳細は不明な点も多

かったが、本調査で図上復元できる資料を得た。

韓国陶磁

13. 青磁

いずれも象嵌青磁で碗、梅瓶（？）、杯などの器種が確認される。灰色の素地に灰青色・緑色の釉を施釉、白土と黒土で象嵌し文様を描く。

タイ陶磁

14. 土器

タイ産陶磁器は半練（土器）の蓋が出土している。身は確認されておらず、これも志慶真門郭の状況と一致する。

15. 鉄絵

合子、壺、水注が確認される。

16. 黄青釉陶器

浅い碗もしくは大振りの皿が確認される。当資料は類品も少なく判然としないが素地や混和材からタイ産として取り扱った。あるいは華南あたりの民窯系の雑器とも考えられる。

17. 褐釉陶器

壺が確認される。特に褐釉四耳壺が多出する。

ベトナム陶磁

18. 青磁

ベトナム産の陶磁器は青磁碗が出土する。鎬蓮弁文を外体に廻らせ内底部は茶褐色のいわゆるチョコレートボトムとなり、見込みには目跡が残る。類品は県内では越来城[註38]などが知られる。

19. 染付

染付碗、同瓶、同壺などが確認される。

20. 色絵

色絵碗、同合子などが確認される。

21. 白磁

碗が確認される。多くの資料が白色でやや粗粒子で陶胎と磁胎がある、白化粧後施釉される。内面に型押しの青海波文が特徴。

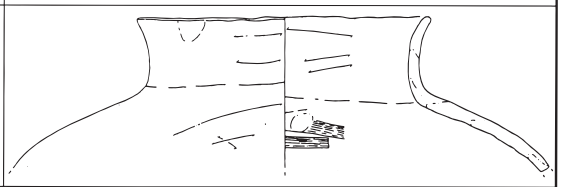
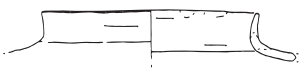
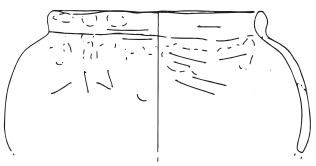
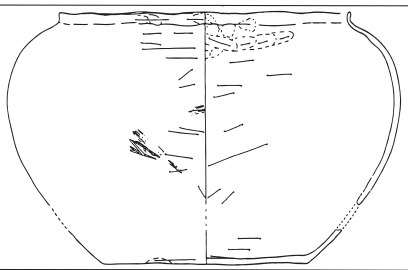
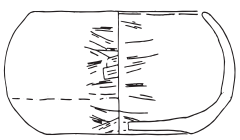
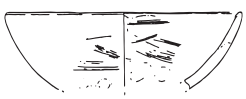
註文献

3．今帰仁村教育委員会　1983 年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第 9 集　今帰仁村教育委員会
4．友寄英一郎・嵩元政秀　1969 年「フェンサ城貝塚発掘調査概要」『琉球大学文学部紀要社会篇』12　琉球大学法文学部
5．金城亀信　1990 年「グスク土器の出現」『考古学ジャーナル』no.320　ニューサイエンス社
6．伊仙町教育委員会編　1985 年『カムィヤキ窯跡群Ⅰ』伊仙町文化財発掘調査報告書第 4 集
7．伊仙町教育委員会編　1985 年『カムィヤキ窯跡群Ⅱ』伊仙町文化財発掘調査報告書第 5 集
8．註 3 に同じ

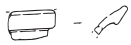
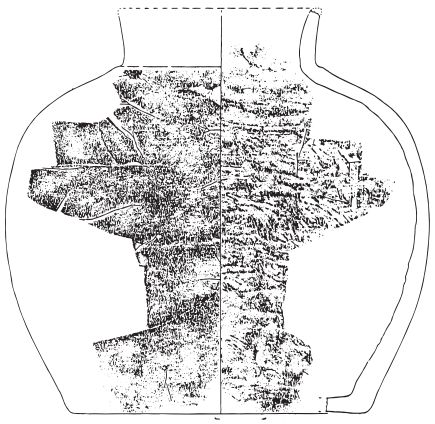
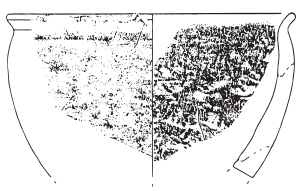
9．1986 ～ 87 年に県文化課が県庁舎行政棟の建設に伴い発掘調査を実施、当該調査の出土品に類品を知る。
10．楢崎彰一氏のご教示による。
11．間壁忠彦　1977 年「備前」『世界陶磁全集』3（日本中世）　小学館
12．間壁忠彦氏のご教示による。
13．菅原正明　1989 年「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 19 集　国立歴史民俗博物館
14．坪之内徹　1990 年「中世南都の瓦器・瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　中世土器研究会
15．註文献 3 に同じ。
16．横田賢次郎・森田勉　1978 年「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
17．金武正紀　1989 年「沖縄における 12･13 世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第 15 号　沖縄県立博物館
18．金武正紀　1990 年「沖縄の中国陶磁」『考古学ジャーナル』No.320　ニューサイエンス社
19．上田秀夫　1982 年「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
20．亀井明徳　1980 年「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』
21．横田賢次郎・森本朝子・山本信夫　1989 年「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』№.9 日本貿易陶磁研究会
22．西山要一　1975 年「紀淡海峡海底採集の中国陶磁」『古代研究』5　北村文庫会
23．小野正敏　1981 年「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁器研究』№.1 日本貿易陶磁研究会
24．島福善弘ほか　1992 年『宇茂佐古島遺跡』名護市教育委員会
25．森田勉　1982 年「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
26．金武正紀　1988 年「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』№.8　日本貿易陶磁研究会
27．註文献 25 に同じ。
28．金武正紀ほか　1986 年『慶田崎遺跡』与那国町文化財調査報告書第 1 集　与那国町教育委員会
29．金武正紀ほか　1983 年『ビロースク遺跡』石垣市文化財調査報告書第 6 号　石垣市教育委員会
30．小野正敏　1982 年「14 ～ 16 世紀の染付椀・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
31．鎌倉芳太郎　1976 年『セレベス沖縄発掘古陶磁』国書刊行会
32．上田秀夫　1991 年「16 世紀から 17 世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究』Ⅰ　関西近世考古学会
33．杉山洋　1987 年　「褐釉系陶器の受容と展開」『東アジアの考古と歴史　下』　同朋社
34．折尾学・森本朝子　1987 年「天目茶碗再考－出土遺物からみたその変遷－」岡崎敬先生退官記念論集　『東アジアの考古と歴史』下　同朋社
35．亀井明徳　1985 年「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」『三上次男博士喜寿記念論集　陶磁篇』平凡社
36．亀井明徳　1985 年「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題・補遺」『九州歴史資料館研究論集』10　九州歴史資料館
37．金城亀信　1990 年「豊見城村内確認の明代三彩鶴型水注」『県文化課紀要』第 6 号　沖縄県教育委員会文化課
38．宮城利旭・宮里信勇ほか　1988 年『越来城』　沖縄市教育委員会

参考文献

日本貿易陶磁研究会編　1981 年『貿易陶磁研究』NO. 1　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1982 年『貿易陶磁研究』NO. 2　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1983 年『貿易陶磁研究』NO. 3　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1984 年『貿易陶磁研究』NO. 4　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1985 年『貿易陶磁研究』NO. 5　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1986 年『貿易陶磁研究』NO. 6　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1987 年『貿易陶磁研究』NO. 7　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1988 年『貿易陶磁研究』NO. 8　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1989 年『貿易陶磁研究』NO. 9　日本貿易陶磁研究会
日本貿易陶磁研究会編　1990 年『貿易陶磁研究』NO.10　日本貿易陶磁研究会
佐藤雅彦　1975 年『白磁』陶磁大系 37 巻　平凡社
小山富士夫　1974 年『天目』陶磁大系 38 巻　平凡社
矢部良明　1974 年『元の染付』陶磁大系 41 巻　平凡社
藤岡了一　1975 年『明の染付』陶磁大系 42 巻　平凡社
長谷部楽爾　1974 年『高麗の青磁』陶磁大系 29 巻　平凡社
矢部良明　1978 年『タイ・ベトナムの陶磁』陶磁大系 47 巻　平凡社
長谷部楽爾・藤岡了一編　1976 年『世界陶磁全集』14（明）　小学館
矢部良明編　1978 年『世界陶磁全集』47（南海）　小学館
間壁忠彦　1977 年「備前」『世界陶磁全集』3（日本中世）　小学館
三上次男編　1981 年『世界陶磁全集』13（遼・金・元）　小学館
東京国立博物館編　1978 年『日本出土の中国陶磁』東京美術
日本経済新聞社編　1980 年『デヴィッド・コレクション　中国陶磁展』日本経済新聞社
熊本県立美術館編　1980 年『中国陶磁の美』熊本出土の中国陶磁　熊本日日新聞社・熊本県立美術館
文化公報部文化財管理局編　1983 年『新安海底遺物』同和出版公社
東京国立博物館・中日新聞社　1983 年『新安海底引き揚げ文物』中日新聞社
東京国立博物館編　1990 年『東京国立博物館図版目録　中国陶磁編Ⅱ』東京国立博物館
亀井明徳　1983 年「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第 11 号
沖縄県立博物館編　1982 年『沖縄出土の中国陶磁（上)』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館編　1983 年『沖縄出土の中国陶磁（下)』沖縄県立博物館
読谷村教育委員会編　1978 年『座喜味城跡第 3・4 次遺構発掘調査』読谷村文化財調査報告書第 4 集　読谷村教育委員会
読谷村教育委員会編　1980 年『座喜味城跡第 5・6 次遺構発掘調査』読谷村文化財調査報告書第 4 集　読谷村教育委員会
當眞嗣一編　1980 年『佐敷グスク』佐敷グスク発掘調査報告書　佐敷町教育委員会

本報告 分類			特徴 器形	特徴 調整・その他	図
Ⅱ群	壺形	a	比較的長頸で大きく外反するもの。	内外面ともナデ・工具を用いるナデ調整を行い比較的丁寧に仕上げる。	
		b	比較的短頸で直口になるもの。	内外面ともナデ・工具を用いる比較的指頭痕を残す。	
	甕形	a	口縁部が肥厚、ナデ肩で胴の張りが小さい。	口縁～胴上半はややナデが雑で器壁は厚手になる。	
		b	口縁部を小さく直立させ肩部が張り薄手。	胴上半は横方向ナデ、指頭がならび、完形資料に乏しいが胴下半を一部ヘラ磨き。	
		c	胴の張りは小さく口唇を外に小さく肥厚させる。	内面には工具による刷毛目が明瞭に残る口唇上面は丁寧に整形。	
	鍋形（浅鉢）		内湾する口縁、胴中央に最大径。	指頭と横方向のナデ・工具ナデにより整形。	
	碗形	a	口唇部をまるくつくる。	内面はナデ・工具ナデを斜め方向に、外面は横方向のナデを施すが胴下半はやや雑になる。完形の資料に乏しいが底部には葉痕を残すと考えられる。	
		b	口唇上端を平坦につくる。		
		c	口唇が舌状を成す。		
	ミニチュア		用途不明の小型の資料。	手捏ねで指頭が並ぶ。	

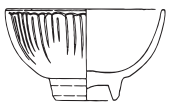
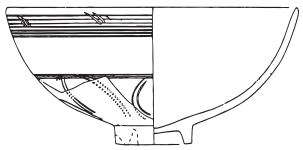
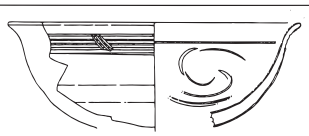
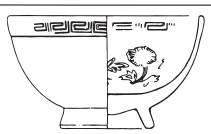
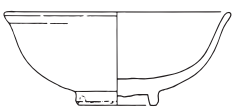
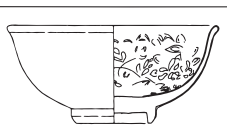
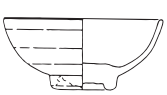
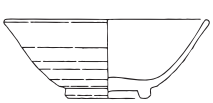
第３表　土器分類表　　（S＝1／5）

本報告 分類			特徴 器形	特徴 調整・その他の特徴	図
カムィヤキ須恵器	壺形	a	大きく外反する口縁部、口唇外面を肥厚させる。	調整・その他の内外面ともナデ調整により丁寧に仕上げる。	
		b	直立する口縁部で肩は張りが弱い。	内面はナデ調整で平滑に、外面は比較的雑に仕上げる。	
		c	直立する口縁部b類に比べやや強く外に反る。	内面はナデ調整で平滑に、外面は比較的雑に仕上げる。	
		d	短頸の小壺肩部はナデ肩になる。	内外面ともナデ調整で平滑にするがロクロ痕を残す。	
	鉢形		口縁部を小さく外反させ、胴は小さく張る。	外面はナデが比較的丁寧に施されるが内面はあて具の痕が残る。	

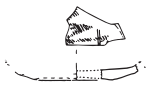
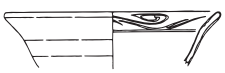
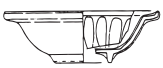
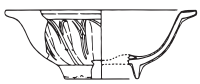
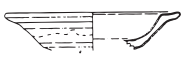
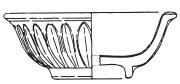
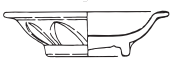
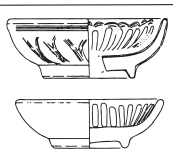
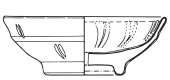
第４表　カムィヤキ須恵器分類表　　（S＝1／5）

分類				特徴		図
本報告		志慶真		器形	仮称・調整・その他の特徴	
劃花文碗		なし		胴部小破片のため不明。	劃花文碗大宰府分類のⅠ-４類に該当、出土例は灰白色の素地に灰青色の薄い失透明釉を施す、内体面に細い片切り彫りの文様が施される。	
輪花碗		輪花碗		薄手の碗。高台は逆三角形の薄い高台いわゆる砧系の範疇。	大宰府分類Ⅲ類に該当する輪花小碗で、口縁に４～６ヶ所小さな刻みを入れる、体部は無文様、白色の素地に青緑色の厚い釉を施釉する。	
蓮弁文碗 ラマ式蓮		なし		均整のとれた内湾的な器形、低部資料を欠き全形は不明。	片切り彫りと櫛描きにより文様を施す。外体面腰部にラマ式蓮弁文、内対面には花文を施す。	
鎬蓮弁文碗	a	蓮弁文碗Ⅰ群		鎬蓮弁文碗。口縁は直口か僅かに外反する。高台外面または畳付から外底までは露胎である。	「鎬蓮弁文碗」で間弁がきちんと描かれている、大宰府分類Ⅰ-５b・c類に該当、出土例は素地が灰白色が一般的で淡緑色の釉を薄く施釉、間蓮弁を持つ箆彫りの鎬蓮弁文を丁寧に描く。	
	b	なし			蓮弁文碗で間弁がきちんと描かれる。大宰府分類Ⅰ-５a類に該当、出土例は素地が灰白色で淡緑色の釉を薄く施釉、箆彫りの蓮弁文を描く。	
砧系蓮弁文碗	c	なし		畳付の幅は狭く、全面施釉のあと畳付の釉を削り取っている。	砧系の鎬蓮弁文碗大宰府分類のⅢ-２に該当、ⅢＡ類に比して弁の幅が細い、白色の素地に青緑色の厚い釉を施釉する。	
無鎬蓮弁文碗	a	蓮弁文碗Ⅱ群	a	内底が凹み口縁部は直口かわずかに外反、口径10cm前後の小碗。	いわゆる「無鎬蓮弁文碗」で箆による雑な蓮弁が弁間をもって描かれる。出土例の素地は白色・淡灰白色で青緑色の厚い透明釉を施釉する。	
	b		b	内底は直線的で張りのあるゆったりとした腰部に外反口縁、内刳りは全て釉を掻き取る、高台下部外面の斜め切り取りがⅢＡに比較して大きい。	口縁部に下に圏線を廻らせ区画し、体部に片切り彫りや丸彫りで弁先の尖った蓮弁文を描く。内底は総じて印花文を施す。素地は白色微粒子が一般的で青緑色の厚い釉を施す。	
	c		c・d		体部に片切り彫りや丸彫りで弁先の尖った蓮弁文を描く、比較的蓮弁部の盛りあがりを失う。素地は白色微粒子が一般的で青緑色の厚い釉を施す。	
	d		e	肉厚のある体部に直線的に立ちあがる口縁部、畳付けの釉は削取らない。	片切り彫りで弁先の尖った幅広の蓮弁文を描く。白色・灰白色の素地に厚い淡緑色の釉を施釉。	
	e	なし	なし	肉厚のある体部に直線的に立ちあがる直口口縁。	片切り彫りで弁先の尖った幅の狭いいわゆる「剣先蓮弁文」を描く。白色・灰白色の素地に厚い透明感のある淡緑色の釉を施釉、内面に片切り彫りで花文を描くものもある。	
線刻蓮弁文碗	a	蓮弁文碗Ⅲ群	a	器高に比して口径は狭く、厚い釉を前面施釉した後外底を蛇の目状に掻き取る。	箆描きの細蓮弁文を60～70枚廻し弁尻は高台際まで延び弁先も丁寧に描く。	
	b		b	口径はａに比較し広くなる。	箆描きの細蓮弁文を40～50枚廻らす、弁尻は高台際まで延びず弁先もａに比して雑に描かれる。釉は全体的に薄く高台内まであるいは高台外面までかかるものがある。	

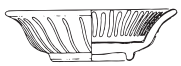
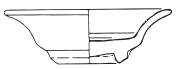
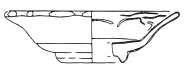
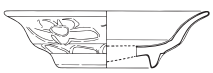
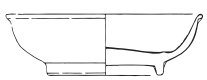
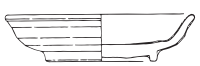
第５表　青磁碗分類表（1）　　（Ｓ＝１／５）

分類				特徴		図
本報告		志慶真		器形	仮称・調整・その他の特徴	
線刻蓮弁文	c	蓮弁文碗Ⅲ	c	腰部でやや張りを持ち、内湾状になる口縁部、口径は10cmと比較的小振り。	蓮弁は細く短く弁数に統一性がなくⅢE-a・bに比して崩れている。釉は薄くなる。	
弦文帯碗	a	なし		直口口縁の碗で10cmに満たない小碗と10cm代の大振りの碗がある。	上田分類[註17]のC－1に該当する。数条の弦文を口縁部に施し、短い斜線でこれを区画する、緑青色の釉を高台際まで施釉するのが一般的。	
	b			腰部でやや張りを持ち口縁が外反する碗。	数条の弦文を口縁部に施し、短い斜線でこれを区画する、内面に施文するものと無文の二種ある。緑青色の釉を高台際までやや厚く施釉するのが一般的。	
雷文帯碗	a	雷文帯碗	a	直口口縁で比較的厚い釉を施釉する。12cm前後の小碗と15cm超す大振りの碗がある。	上田分類C－2に該当。外体面に雷文帯を片切彫りで施すもので、内体面に花文を施すものと無文のものに分けられる。また外体面腰部にはラマ式蓮弁文を配するものもみられる。	
	b		b		雷文帯を型押し（スタンプ）で施すもの内面にも花文を施すのが多く、aに比較して大振りの碗が目立つ。	
波濤文碗		なし		やや内湾気味の直口口縁で、口径約14cmの小振りの碗。	口縁部に櫛描による波状文を施し、薄い失透釉を施釉、轆轤痕が外体に確認できる。	
無文外反碗	a	外反口縁碗Ⅱ群	AⅡ	腰部は豊かに張る外反口縁碗。	上田分類D類にほぼ該当、比較的厚い釉を施釉するのが一般的で、釉調や器形から細分可能だが一括して取り扱った。	
	b		BⅡ	口径は比較的広く大振りで、比較的薄手の外反口縁碗。	灰色でやや粗粒子の素地に薄い失透釉を高台際まで施釉、外体面は無文見込みに印花を施すものと施さないものがある。	
	c	玉縁口縁碗		口縁を玉縁状に肥厚、張りのある腰部をもつ大振りの碗、高台内面から外底まで露胎外底は平坦に仕上げる。	見込みを釉剥ぎ印花文を施すものと無文の二種ある。いわゆる佐敷タイプ。	
無文直口碗		直口口縁碗		器高に比して口径は狭い、直口口縁碗。	上田分類E類にほぼ該当、志慶真分類ではa・b種に細分したが一括して分類した 全面施釉した後外底を蛇の目状に掻き取るものが多い。	
直口大振り碗		なし		外面に轆轤痕が観察できる。高台を幅広に成形し逆ハの字に外開きの器形、見込みは蛇の目状に釉剥ぎ。	宇茂佐古島遺跡の白磁資料[註22]に類例が報告される。灰色素粒子の素地に失透釉を施釉、青磁か白磁か判別し難い釉調となる。	

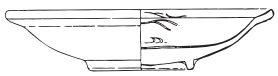
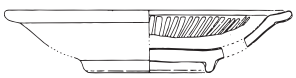
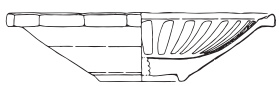
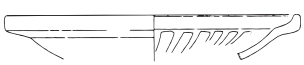
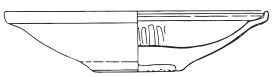
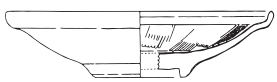
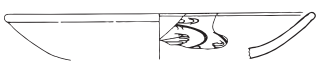
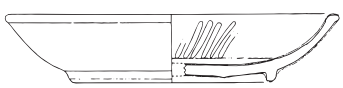
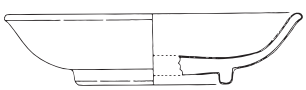
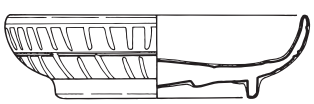
第6表　青磁碗分類表（2）　　（S＝1／5）

分類				特徴		図
本報告		志慶真		器形	仮称・調整・その他の特徴	
同安窯系	櫛描文皿	なし		ベタ底、器高は浅く体部中央で屈曲し体部と見込みの境に段を有する。	「櫛描文皿」大宰府分類のⅢⅠに該当、見込みに櫛描きによるジグザグ文様を施す。薄くやや黄色の飴色ガラス質の釉を施釉外面体部下半を露胎する。	
	無文	なし			淡灰白色の素地に灰白色の釉を外面体部上位まで施釉。同安窯系青磁無文皿。	
竜泉窯系無文小皿				体部は内湾、口縁部が直口となるベタ底の小皿。	素地は白色・灰白色で堅緻、淡青白色の釉を外底を除き全面厚めに施釉。大宰府編年Ⅷに対応するものか？	
内面有段口縁皿		なし		内面上位に蓋受け状の段を持つ。	口縁部内面に圏線を廻し、唐草文を線彫りする。厚い青緑色の透明釉を施釉する。	
直口口縁皿		なし		口径は広い直口口縁、口唇部は丸みをもつ。	弦文が外面を廻る。	
口折皿Ⅰ群	a	口折皿Ⅰ群	Aa	内体面から鍔上面へ折れる部分が明瞭な稜を持つ、比較的薄手になる。鍔端部を若干つまみ上げ凹むものと平坦のものがあり、高台も丁寧に作る。	大宰府分類杯Ⅲ-3b、内体面に幅広の篦による蓮弁文が描かれる。素地は白色微粒子で、緑色の厚い釉を全面施釉し畳付だけ掻き取って露胎する。	
	b		Ab		外体面に鎬蓮弁文が廻る、器肉は薄いが釉は全体的に厚く全面施釉され畳付だけ掻き取り露胎する。大宰府分類杯Ⅲ-4bに該当。	
	c		Ac		無文の口折皿。	
	d		Ba・Bb		外体面に2本線の蓮弁文が描かれる、見込みには双魚文が貼り付けされるものと、されないものがある。	
口折皿Ⅱ群	a	口折皿Ⅱ群	Aa・Bb	内体面から鍔上面へ折れる部分が丸みをもち、比較的器肉は厚くなる。鍔部は狭く、高台作りはハの字形に外開きで、底部の厚みがあり重厚になる。	弁先の尖る無鎬蓮弁文を廻す。比較的施釉が厚く肉厚になるものとならないもの、鍔上面に雷文を配するものや内面に草花文を施すものなどバリーエションが多く細分を要す。	
	b		Ac・Ba・Bb		浅い口折皿で外体面の蓮弁は弁先の尖っていない浅い片切彫りになる。鍔縁は短く、釉は比較的薄い施釉となる。	
	c		Bc		無文の浅い口折皿。	
直口口縁蓮弁文皿		直口口縁皿	Aa・b	比較的厚手の器肉で、高台作りはハの字形に外開きで、底部の厚みがあり重厚になる。	厚い釉を全面施釉後に外底釉を釉剥ぎし露胎とする。外体面または内体面に蓮弁文を配置するもの。	
	b	なし			外体面の腰部中央を上下に区画する陽圏線文を施し蓮弁文を配する、内面の篦彫りで間隔を開く蓮弁を描くものと、開かないもの、及び草花文をほどこすものなどがある。	

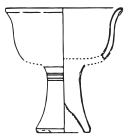
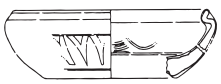
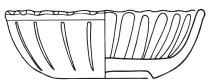
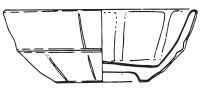
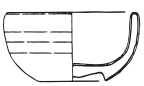
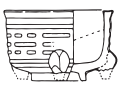
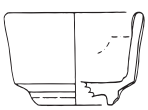
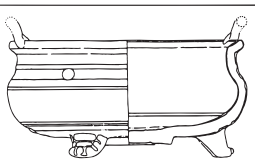
第7表　青磁皿分類表（1）　　（S＝1／5）

分類 本報告		分類 志慶真		特徴 器形	特徴 仮称・調整・その他の特徴	図
腰折れ外反皿	a	外反口縁皿	Aa	比較的重厚な広い底部、高台作りはハの字形に外開きで、強く屈曲する腰部から外反する口縁部がつく。	内外面に簡略化した蓮弁文を丸筬彫りで施す皿。稜花（b）になるものとならないもの（a）がある。	
	b					
	c		Ab c Ba		内・外体面無文の外反皿（c）で稜花になり内体面刻花文を施すもの（d）がある。	
	c	稜花皿				
	d				外面に草花文を施すもので、腰部屈曲の下端部に蓮弁を描く、口縁部を稜花にするもの（f）、しないもの（e）、各文様の組み合わせ等により細分可能。	
	e					
直口口縁無文皿		直口口縁皿	玉縁口縁皿	器高は浅く、底径の広い高台に小さく外反する玉縁の口縁か内傾気味の直口口縁などある。	見込みに陽回線を廻せ、中央に印花文を施すものと施さないものがある（a）（b）。また見込みを釉剥ぎし露胎させるもの（c）。	
						
菊花皿		なし		高台作りはハの字形に外開きで、底部の厚みがある。口縁部を刻み花弁状につくる。	灰色でやや粗粒子の素地に灰緑色の失透明釉を施釉。幅広の筬彫りの蓮弁文を内面に線刻の蓮弁文を外面に廻らす。	
景徳鎮窯系	菊花皿	なし		見込みは凹み、細い高台がつく器壁は比較的薄い。	明緑灰色の釉を全面施釉後畳付けの釉を掻き取り、高台内から外底まで透明釉を施釉、外底には「洪武年造」と二重圏線が呉須で描かれる。	
	腰折れ皿	なし		器壁は薄く、腰部は屈曲し口縁部は舌状を成す。	明緑灰色の釉を全面施釉後畳付けの釉を掻き取り、高台内から外底まで透明釉を施釉、輪花口縁で凹端部から白色釉が見込みにながれる。	

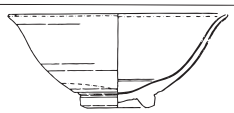
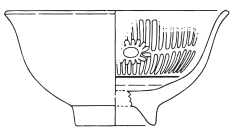
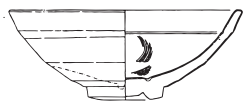
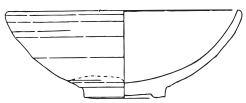
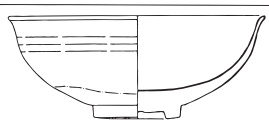
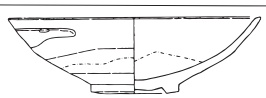
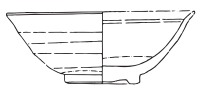
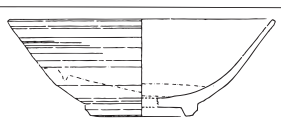
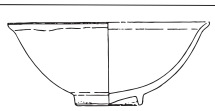
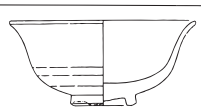
第８表　青磁皿分類表（2）　　（S＝1／5）

分類 本報告	分類 志慶真	特徴 器形	特徴 仮称・調整・その他の特徴	図
折縁盤	なし	高台は四角形、丁寧に造りだし豊かに張りのある体部に平折縁の口縁がつく。	内外面とも刻花文が描かれ、淡緑色の釉が厚く施釉される。	
鍔縁盤 I	なし	角高台からやや緩やかな体部、口縁端部は鍔を平坦にする・	縁上面・内体面には刻花文が描かれ、体部が無文のもの確認される。	
鍔縁盤 I	なし	高台から直線的に口縁に至る。鍔縁は平坦で端部を稜花とするもの(b)、しないもの（a）がある。	内外面に幅広の箆彫り蓮弁文、口縁稜花にそって線刻される。外面の蓮弁の有無、内体面の文様、鍔縁の形態などにバリエーションがある。	
鍔縁盤 I	Ⅰa			
鍔縁盤 Ⅱ b	Ⅰb	やかで碁笥底に近い外観を有する。高台から直線的に口縁部に至り、口縁鍔端はつまみ上げられる。	幅広（約 10mm 前後）の箆彫り蓮弁が丁寧に内体面に廻る。	
鍔縁盤 Ⅱ c			比較的細い箆彫りの蓮弁文が内体面に廻らされる。	
鍔縁盤 Ⅱ d	Ⅱa Ⅱb Ⅱc		2 本以上の櫛で内体面に蓮弁文を廻らす。外体面は無文とする。	
直口口縁Ⅰ a	なし	体部から直線的に開き口縁端は舌状となる。底部形態不明。	草花文	
直口口縁Ⅱ a	盤 a	体部から直線的に外に開き口縁端を微弱な玉縁口縁とする。	外面は無文、内体面は 2 本以上の櫛描き文を施す。	
直口口縁Ⅱ b	盤 b		内・外体面を無文とする。	
直口口縁Ⅲ	直口口縁 なし	幅広の高台に体部は丸みを持ちほぼ直立する口縁部がつく。	口唇部に刻目を施すものと施さないものがあり、外体面に丸箆彫り蓮弁文をあるいは 2 本櫛による櫛描き文を施す。	

第 9 表　青磁盤分類表　　（S＝1／5）

分類				特徴		図
本報告		志慶真		器形	仮称・調整・その他の特徴	
杯	高足杯			杯部と脚部からなる。脚部は外底面を削り浅く中空とさせ、杯部の胴は張り持つ。	いわゆる「馬上杯」で杯部と脚部の形状等にバリエーションがある。全形をうかがえる資料に乏しいことから細分を保留した。	
	百合口杯			体部全体を波状に成形。口縁部は平坦につくる。		
	べっ甲口縁	べっ甲口		碁笥底の底部から、緩やかに口縁へ至り、口縁部をべっ甲口に成形する。	淡緑色・緑色の厚い釉を施釉、外体面には箆描きの蓮弁文、内体面には刻花文。	
	蓮弁文杯a			碁笥底の底部から、緩やかに口縁に至り。口縁部を波状に成形する。	外体面には線刻蓮弁文を、内体面には幅広の箆描き蓮弁を廻らせる。	
	蓮弁文杯b	蓮弁文		成形段階では高台が付いているが施釉で碁笥底状の底部とする。	外体面には線刻蓮弁文を、内体面には幅広の箆描き蓮弁を廻らせる。施釉は一般的に厚く施釉される。	
	碁笥底小杯	碁笥底		碁笥底の底部でやや内湾気味に口縁部に至る。	淡緑色・黄緑色などの釉を高台際・畳付外端まで施釉、内外面とも無文となる。	
香炉	Ⅰ類	三足香炉	Aa Ba	地に付かない三足で、直立する体部から口唇が凹む寄口口縁となる。	外面には算木文が廻らされるものと、弦文のものがある。見込み及び内体面下半は露胎となる。中型・小型のものがある。	
	Ⅱ類		Ab	地に付かない三足で、直立する体部から直口口縁となる。	外面は弦文のものと無文のものがある。見込み及び内体面下半は露胎となる。小型のものがある。	
	Ⅲ類（大型香炉）			地に付く三足香炉で豊かに張る胴部から直線的に口縁に至り外側に折れる口縁を作る。	内外面は無文または刻花文を施す、大型・中型のものがあり脚部は獣面または獣脚状に線刻する。 淡緑色の 釉を施釉、見込みと外底は露胎とする。	

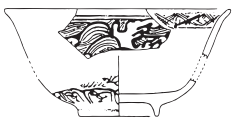
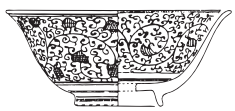
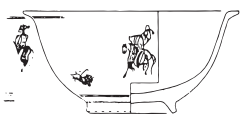
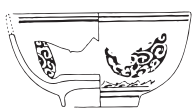
第 10 表　青磁杯・香炉分類表　　（S＝1／5）

分類 本報告		分類 志慶真	特徴 器形	特徴 仮称・調整・その他の特徴	図
口禿げ碗	a	Ⅰ類	腰部から直線的に外開きになる碗で高台は小さく見込みは水平。	素地は白色で堅緻、口縁部を釉剥ぎするいわゆる口禿碗で、腰部以下も露胎となる。釉色は淡緑灰色、灰白色。	
	b		腰部は比較的張りを持ち口縁部で外反する、見込みは凹み高台は逆ハの字で比較的太い。	素地は白色で堅緻、いわゆる口禿碗で、口縁部及び腰部以下を露胎する。釉色は淡緑白色、灰白色。	
図示無し		Ⅱ類	高台は幅広で、内側が深く削りだされる、体部下部はふくらみを持ち口縁部は緩やかに外反。	いわゆる「枢府手」といわれる碗で素地は白色堅緻、淡青白色の釉は高台外面まで施釉、畳付から外底部にかけ露胎、内体面に蓮弁文、菊花文を施す。	
ビロースクタイプ	a	Ⅲ類	器壁は厚く内湾する口縁部で、底部は高台幅は広く畳付外端に面取りが無く断面が四角形で、見込みが凹み外底の削りは浅く雑になる。	森田分類C群の一部に該当。金武 分類Ⅰ類。内体面口縁直下に陰圏線が廻り、櫛描きによる文様が内体面に施される。素地は灰白色で堅緻、外面腰部以下露胎。淡緑白色・灰白色釉を厚く施釉。	
	b			同上。内外面無文、見込みに花文が押印される。素地は灰白色で堅く、外面腰部から下を露胎する、淡緑白色・灰白色の釉色。	
無文外反碗	a	Ⅳ	張りのある腰に外反口縁碗、畳付外端は軽く面取りされ、見込みは水平になる。	森田分類C群の一部に該当する資料で、素地は灰白色で堅く、外面腰部から下を露胎する。淡緑白色・灰白色の釉色で、見込みに印花文が施される。	
今帰仁タイプ			幅広高台で見込みは凹み、外底の削りは浅い、口縁端は平坦に成形、内湾するなど有り。	灰色の素地に青磁とも白磁とも判断しがたい淡灰緑色、灰黄色の釉を薄く施釉する。腰部・見込みは露胎となる。目跡の残るものも散見され一見して粗造の感を受ける。	
内底無釉碗	a	Ⅶ Ⅷ	口径に比して器高の低い浅碗で、高台は幅広く大きく削りだし外に開きながら口縁にいたる。	口縁端部を水平にし、灰色・淡黄灰色の釉を施釉。腰下部内底を露胎とする。	
	b	Ⅸ類		やや内湾気味の体部に口縁唇を丸くつくる、見込みは露胎、字款を押印するもの多い。灰色・黄緑色の釉を腰部まで施釉。	
	c	なし		直線的に外に開く体部に内面に段を有する口縁部がつく、灰白色の釉を施釉、腰下部内底は露胎。	
	d	Ⅴ類	外面に轆轤痕が観察できる。高台を幅広に成形、外開きの器形、見込みは蛇の目状釉剥ぎ。	宇茂佐古島遺跡の白磁資料に類例があり。灰色素粒子の素地に失透釉を施釉、青磁か白磁か判別し難い釉調となる。	
無文外反碗	b	碗Ⅷ	口縁部内面に段を有する、体部は緩やかに張り見込みは凹む。	明緑灰色の釉を全面に施釉後、畳付の釉を掻き取る。森田分類E群に該当、青花碗Ⅲａに器形的には近似する。	
	c	碗Ⅸ	角高台の比較的狭い底部に豊かに張りのある体部、端反口縁をつくる。	灰白色の釉を高台際まで施釉。	

第 11 表　白磁碗分類表　　（S＝1／5）

分類 本報告		分類 志慶真	特徴 器形	特徴 仮称・調整・その他の特徴	図
口禿げ	a	Ⅰ類	底部から直線的に外開きになるベタ底の比較的浅い皿。	大宰府編年Ⅸ類に該当。素地は白色で堅緻、釉色は灰白色で口縁部を釉剥ぎするいわゆる口禿皿。	
	b	Ⅱ類		同上。比較的轆轤痕が明瞭に残る。	
外反口縁		Ⅳ類	やや腰折れになる外反口縁。畳付は面取りされる竹節状の高台。	淡灰白色の素地に淡緑白色の釉を外面腰部まで施釉。見込みは蛇の目状に釉を掻き取るものと、とらないものがある。	
直口口縁	a	なし	腰部は張り、直口口縁になる口径の広い皿。畳付は面取される。	淡灰白色の素地に淡緑白色の釉を高台際まで施釉。見込みは隆圏線を一条廻らせる。	
直口浅皿		Ⅴ	厚みのある高台に薄手の体部、口唇部は平坦に成形する。	淡い灰白色で硬質又は黄白色で軟質の二種の素地を主に、釉調は黄味を帯び、細かな貫入を伴う。腰下部は露胎。	
抉入高台		Ⅵ類	口縁端は平坦に成形。外底の削りは浅い。	同上 高台を４ヶ所抉り重ね焼きをする。	
外反皿	b	Ⅷ類	薄手の外反皿、高台断面逆三角形で畳付は細い。	染付け皿Ⅰ類、五彩皿などに器形的には類似。白色堅緻な磁胎に淡灰白色の釉を畳付を除き全面施釉。	
	c		同上、bに比して口径・底径は広く薄手となる。	高台内に字款、砂床焼成によるため畳付には砂が付着する。	
直口皿	b	なし	小さな高台に見込みは盛り上がる底部。	淡い灰白色で硬質磁胎、薄い透明釉を施釉、見込みは露胎となる。直口口縁、端部は舌状に成形する。	
菊花皿		Ⅸ類	いわゆる菊花皿で断面逆三角形の小さな高台に直口口縁。口縁内面は肥厚し段の有無がある。	淡い灰白色で硬質磁胎、白色の釉を施釉、見込みは露胎となるもの、ならないものがある。口唇部を刻み菊花状にするもの、内面に箆彫りで幅広の蓮弁外面は丸彫りで蓮弁を描くもの、内面に箆彫りの蓮弁を廻らせるものなどがある。	
碁笥底		なし	碁笥底の底部に直口口縁、口唇部は舌状に成形。	淡い灰白色で硬質磁胎、白色の釉を施釉、内面、見込みと体部の境に蓮弁文を廻らせる。	
灯明皿		Ⅶ類	平底でやや厚手の直口口縁の浅皿、やや上げ底状。	灰白色で硬質の素地を主とし釉調は内面は施釉されるが口唇部から外面は露胎、口唇部に煤が付着しており灯明具として使用される。	
腰折れ杯	a	Ⅰ なし	腰折れの杯で、腰部から上は直線的に開き口縁部はわずかに外反する高台抉りは有（a）無（b）がある。	淡い灰白色で硬質又は黄白色で軟質の二種の素地を主とし釉調は黄味を帯び、細かな貫入を伴う。腰下部は露胎。森田分類Ｄ群。	
	b				
八角杯	a	Ⅱ類 なし	体部は八面に面取りされ、口縁部で外反する。高台は抉り有（b）、無（a）がある。	淡い灰白色で硬質又は黄白色で軟質の二種の素地を種とし釉調は黄味を帯び、細かな貫入を伴う。腰下部は露胎。森田分類Ｄ群。	
	b				
外反口縁杯	a	Ⅲ類	腰部は丸みを持ち体部中央から口縁にかけてゆるく外反する抉りの有（b）無（a）がある。	淡い灰白色で硬質又は黄白色で軟質の二種の素地を主とし釉調は黄味を帯び、細かな貫入を伴う。腰下部は露胎。森田分類Ｄ群。	
	b				
直口口縁		Ⅳ類	腰部は丸みを持ち体部中央から口縁が直口になる。	淡い灰白色で硬質又は黄白色で軟質の二種の素地を主とし釉調は黄味を帯び、細かな貫入を伴う。腰下部は露胎。森田分類Ｄ群。	

第 12 表　白磁皿・杯分類表　　（S＝1／5）

分類				特徴		図
本報告		志慶真		器形	仮称・調整・その他の特徴	
Ⅰ類		なし		端反の口縁部、見込みの平坦な底部（以下中間タイプ）で高台は比較的深く削られ腰部は張りがある。	小野分類Ａ群、呉須の発色は良く素地は白色で堅緻、腰部にラマ式蓮弁文を配置する。いわゆる元様式染付け碗。	
Ⅱ類		Ⅰ類		中間タイプの底部で、口縁は端反りになる。Ⅰ類との器形的差ははほとんどない。	小野分類Ｂ群､唐草文を胴部に施文様構成が明代のものである。畳付から外底部にかけて露胎、呉須の発色は比較的鮮明。	
Ⅲ類	a	Ⅲ類		体部は内湾しながら大きく開き、底部は高台内が凹む形（以下蓮子型）となる。口径に対し器高の高いもの(abd)と低いもの（c）がみられる。またａは口唇部が肥厚する。	小野分類Ｃ群（碗Ⅰ）に該当、外面は口縁部に波濤文、胴部に芭蕉文・アラベスク文などを見込みに蓮花・ねじ花などを描く。畳付を除く総釉で高台内は雑で部分的に露胎、呉須の発色はやや鮮明。	
	b					
	c				小野分類Ｃ群（碗Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ）に該当、外体面に三つ葉状の小文様、豹皮文を施す。畳付を除き青白色の釉をかけ、呉須の発色は淡い。	
Ⅳ類		Ⅱ類		ゆるく内湾する体部で、口縁は強く外側に折れる、底部は蓮子型となる。	外体面は馬士文、見込みは観月図を配する例が多い。呉須の発色は比較的鈍くなり、釉調は淡青白色畳付を除き総釉。	
Ⅴ類		Ⅳ類		腰折れの器形、胴は腰折部から少し開きながら直線的に口縁にいたる。高台は大きく高い。	小野分類Ｄ群に該当、広い見込みに十字文、蓮花などを外体面口縁に波濤文、胴部にアラベスク文が描かれるものが多出する。	
Ⅵ類		Ⅴ類		内底部見込みが饅頭上に盛り上がる。腰折れの器形で、直線的に口縁部にいたる。	小野分類Ｅ群に該当、文様は外体面に花文・人物図・唐草などを描き、見込みの饅頭状の盛り上がり部に圏線の円中に文様を描く。ダミ技法を用いる。また、外底には「冨貴届器」などの字款が見られる。	
Ⅶ類	a	Ⅵ類		内底面は若干盛り上がるが概ね「中間型」となる、口縁部は外開きになり、口縁内側は凹み、口は尖り、やや外側に肥厚する。口径が大きいもの（ａ）と小さいもの（ｂ）に大別可能。	上田Ａ－Ⅳに近いと思われる。文様は外体面に鳳凰図、蓮池文、花鳥図などが描かれ、高台内に「宣徳年造」「萬福攸同」「大明萬暦年造」「冨貴届器」などの字款が書かれる。	
	b	なし				

第 13 表　青花碗分類表　　（Ｓ＝１／５）

分類				特徴		図
本報告		志慶真		器形	仮称・調整・その他の特徴	
青花皿	Ⅰ	Ⅰ		断面逆三角形の高台から体部は内湾、口縁端反りの皿。	小野分類Ｂ１群に該当、文様構成は外面に密な唐草文と見込みに十字文を描くもの及び外面は宝相華唐草と見込みに玉取り獅子を描くものが多出する。	
	Ⅱ	Ⅱ		底部は碁笥底体部は若干丸みを持ち直線的に開く器形になる。	小野分類Ｃ群に該当、文様構成は外面胴部に芭蕉文、口縁部に波濤文を描くものが多い。	
	Ⅲ	Ⅲ		低い底部、高台断面は丸く、口縁は内湾する体部に口縁部は直口する。	小野分類Ｅ群に該当、描画にダミ技法を用い、文様構成は見込みに人物図・草花文を施し、外面口縁と腰部に圏線を廻らせ区画した中に唐草文を描くか無文とする。	
青花（盤）中・大皿	Ⅰ類			器肉は厚みのがある。断面逆三角形の高台から体部は内湾、口縁折縁となる。	青花皿Ⅰ類に文様構成は共通するものがありこれに含めるのが妥当か？外面には宝相華唐草、見込みに玉取り獅子を描く。	
	Ⅰ類			器肉は比較的薄手。断面逆三角形の高台から体部は内湾、口縁は直口となる。	青花皿Ⅱ群に近似、描画にダミ技法を用い、文様構成は見込みに花文等を描く。呉須の発色は鮮明で一部黒ずむ。	
	Ⅱ類			つば付きの皿で鍔端部を稜花とする。内外面には蓮弁文が篦彫りされる。	見込みには獅子が、鍔上面には字款が菱形文の中に書かれる。	
小杯	Ⅰ類	なし		断面逆三角形の高台が小さく付き、やや丸みのある体部から直線的に口縁にいたる。	器肉は薄く、灰白色の釉を畳付以外は総釉。呉須の発色は比較的鮮明。文様は胴部に団花文などの小文様を配する。	
	Ⅲ類			断面逆三角形の高台、胴は腰折部から少し開きながら直線的に口縁にいたる。	広い見込みに山水人物図、外面には蚊龍などを描く。	
杯	Ⅰ類	杯	Ⅰ類	短筒型を呈す腰折れ杯、外体部中位に一条の隆圏線が廻らされる。	文様は外体面腰部に如意頭文、口縁部に花鳥折枝、見込みに十字文を描くものが多い。描画はダミ技法によるものとよらないものがある。畳付を除き総釉、呉須の発色はやや鮮明。	
	Ⅱ類		Ⅱ類	腰部は丸みをもち、体部は直線的に開き、直口口縁となる。	文様構成は腰部・口縁部外面と見込みにⅠ類同様の文様を描くが、呉須の発色は鈍い。高台際まで施釉、高台内は露胎となる。	
	Ⅲ類	なし		外底内刳りの深い底部から張りのある腰部、端反口縁になる。	小杯のⅡ類に器形等が近似する。文様構成は見込みと口縁・腰部に回線で区画する外体面に文様を施す。	

第 14 表　青花（中・小）皿・盤（大皿）・杯分類表　　（S＝1／5）

②　第Ⅸ層出土の陶磁器

主郭第Ⅸ層は在地の土器を主体にカムィヤキ須恵器と中国陶磁器など少量出土する。

土器（第 19 図・第 20 図-1 ～ 4）

Ⅰ群土器は胴部が検出されるが口縁部・底部は確認されていない。いずれも小破片で出土する。Ⅱ群土器は口頸部の特徴、器面調整等から壺形・甕形・鍋（浅鉢）形・碗（皿）形・ミニチュアの５器種に大別した。

壺－第 19 図-1 は器形のうかがえる資料で壺形ａ種に該当する。後述する須恵器壺ｂ（ex：第 23 図-6）に近似し影響を窺わせる。

甕－同図-2 ～ 4 は甕形土器で口唇部を肥厚させ頸部が比較的長いａ種（2・3）、頸部が短いｂ種（4）に細分される。同図-3 は口唇部の肥厚が顕著で肩部のナデは徹底せず凹凸が著しい。

鍋（浅鉢）－同図-5・6 は鍋（浅鉢）形で胴部に最大径があり、頸部を持たず内湾させる。口径は 15cm 前後になる。同図-5 は口唇は平坦に調整され外面は丁寧にナデ調整する。同図-6 は口唇端は丸みをもち調整も比較的雑である。

碗－同図-7 ～ 9 は碗形の土器で、それぞれ内湾の碗形器形になり、同図-7・8 は後述する白磁ビロースクタイプ碗、同図-9 は直口口縁で上端を平坦にする特徴を持ち白磁今帰仁タイプ碗あるいは文様こそ無いが器形的には青磁鎬蓮弁文碗を意識したものと推定される。

ミニチュア－同図-13 はミニチュア土器で今回の調査区から得られた唯一の資料である。

底部－同図 10 ～ 12・第 20 図-1 ～ 4 は底部資料で厚みがあり概してケズリや指頭などの調整が外面に残る。立ち上がりは緩やかで豊かな胴を持つもの（第 19 図 12 ほか）、立ち上がり部が鋭角でケズリが残る（第 19 図-11・第 20 図-3 ほか）ものなど器形や調整などにバリエーションが認められるが一括して紹介する。第 20 図-4 は内底の調整が同心円状に指頭が廻り、同図-1 ～ 3 などは立ち上がり部下端にケズリ調整を施す。これらは器種差の違いを示すと目される。

カムィヤキ須恵器（第 20 図-5 ～ 8）

内外面には叩き調整が施された後ナデ消される。綾杉・格子状の工具痕が残るのが特徴。

鉢－第 20 図-5 は鉢形の資料で類品は喜屋武グスク[註39]などで出土している。

底部－同 6 ～ 8 は底部またはその付近の資料である。

瓦質土器（第 20 図-9）

第 20 図-9 は本土中世瓦質土器と想定される標品で沖縄諸島での出土は本例が初例と考えられる[註40]。灰白色の粗製の陶土を用い瓦質焼成される。擂り目は７本を単位に重なるよう浅く密に配する。外器面には叩きが確認できる。産地は南九州と推定される[註41]。

青磁（第 21 図 1 ～ 11）

碗－第 21 図-1 劃花文碗は検出された青磁碗で最も古いタイプである。内面に片切り彫りで花文を描く。同図-2・3・4（鎬蓮弁文碗ａ）は間弁がきちんと描かれている鎬蓮弁で、口縁は直口で僅かに外反する。高台外面または畳付から外底までは露胎する。同図-5 ～ 7（同ｂ）、は篦描きの蓮弁文碗。篦描きの間弁もある。これにはＡ窯系とＢ窯系[註42]がある。同図-8・9（Ⅰ群ｂ）は、砧系鎬蓮弁文碗。Ⅰ・Ⅱ群に比して弁の幅が細く、畳付の幅は狭い、全面施釉のあと畳付の釉を削り取っている。

皿－同図-10 櫛描文皿（同安窯系）の１点、いわゆる珠光青磁の皿である。

瓶－同図-11 の１点で頸部の資料が確認される。

白磁（第 21 図 12 ～ 15）

碗－第 21 図-12 の口禿碗の底部と推定される。内面に陰圏線が廻る。同図-13 は外開きになる大振りの碗で口唇上端を平坦につくり、薄い釉を内底面まで施釉、胴下半を露胎させる特徴を持つ資料で本層Ⅸ～Ⅶ層を主体として出土する資料で薄手直口碗と仮称し紹介する。

皿－同図-14 は平底の小皿の口縁部資料で、同図-15 は口禿皿の底部資料である。

青白磁（第 21 図-16）

合子－同図-16 の小破片だが合子と推定される資料が出土する。

註文献

39. 大城剛ほか　1988 年『喜屋武グスク』具志川市教育委員会

40. 図による確認によるため判然としない浦添城跡の出土品（第36図－２）は本例と近似するように見える。
浦添市教育委員会編　1985 年『浦添城跡』浦添市文化財調査報告書第９集

41. 楢崎彰一氏のご教示による。

42. Ａ窯系・・・総体的に素地が白色で、釉が厚く、緑色・青緑色・黄緑色を呈する比較的良品のグループ。
Ｂ窯系・・・総体的に素地は灰白色でやや粗粒子、釉は薄く、青灰色、緑灰色を呈する。釉は高台外面まで施釉され、畳付から外底までは露胎である。ほとんど無文となる。畳付は水平に切られ、畳付外端を軽く面取りして竹節状としてあるものと、面取りのないのが見られる。
今帰仁村教育委員会編　1983 年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』 今帰仁村文化財調査報告書第９集　今帰仁村教育委員会

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第19図 PL.34 1	土器Ⅱ	壺a	口縁部	19.6 － －	内　橙 外　明赤褐	泥質	内外面とも丁寧なナデ調整。口縁部は横、肩部外面は斜め方向、刷毛目残。	A-1	Ⅸ
第19図 PL.34 2	土器Ⅱ	甕a	口縁部	24.4 － －	内　暗赤褐色 外　にぶい赤褐色	泥質	内外面ともナデは粗雑、口頸部には指頭痕が多く残る。	F-1	Ⅸ
第19図 PL.34 3	土器Ⅱ	甕a	口縁部	13.6 － －	内　にぶい橙 外　にぶい赤褐色	泥質	内面のナデは丁寧だが、外面は凹凸が著しく粗雑肩部内外煤、口唇部肥厚	E-1	Ⅸ
第19図 PL.34 4	土器Ⅱ	甕b	口縁部	14.0 － －	内　褐色 外　灰褐	泥質	口頸部内面と外面は横方向のナデ内面は刷毛目残。	C-3	Ⅸ
第19図 PL.34 5	土器Ⅱ	鍋（浅鉢）	口縁部	17.8 － －	内・外 にぶい褐色	泥質	内面下方に刷毛目が残るが内外面ともナデ調整、口唇部は断面舌状。	E-1	Ⅸ
第19図 PL.34 6	土器Ⅱ		口縁部	13.0 － －	内　橙 外　明赤褐色	泥質	内外ともナデ調整、指頭痕が残り凹凸が著しく波状口縁。	D-1	Ⅸ
第19図 PL.34 7	土器Ⅱ	碗	口縁部	12.2 － －	内・外 にぶい黄褐	泥質	内外ともナデ調整、下方ほど雑、口唇部は断面舌状。	D-2	Ⅸ
第19図 PL.34 8	土器Ⅱ	碗	口縁部	14.4 － －	内　にぶい橙 外　にぶい赤褐	泥質	内外とも刷毛目が横方向に、外面下方は指頭痕が残る、口縁内面稜線有	F-2	Ⅸ
第19図 PL.34 9	土器Ⅱ	碗	口縁部	14.4 － －	内　にぶい橙 外　にぶい赤褐	泥質	ない外面ともナデ調整、内面に比して外面は雑、口唇上端をケズリ平坦。	D-2	Ⅸ
第19図 PL.34 10	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 13.4	内　にぶい橙 外　にぶい褐	泥質	内外ともナデ調整で平滑にする。上げ底で、立ち上がり部の角は取れまるい。	B-3	Ⅸ
第19図 PL.34 11	土器Ⅱ	ミニチュア	口縁部	3.4 － －	内・外 にぶい橙	泥質	内外とも指頭痕を残しナデは徹底しない、口縁内面に稜をとる。	A-1	Ⅸ
第19図 PL.34 12	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 13.6	内　にぶい赤褐 外　赤褐	泥質	外面はナデ、外底面は器壁が剥落し凹凸が著しい、内底は刷毛目が残る。	A-1	Ⅸ
第19図 PL.34 13	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 10.6	内　黒褐色 外　褐灰	泥質	外底は調整が雑荒れ肌状外面は斜め方向のケズリ、一部接合痕が表出する。内底はナデ、スス有	E-1	Ⅸ
第20図 PL.35 1	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 9	内　にぶい褐 外　にぶい橙	泥質	内面はナデ調整。外面は立ち上がり部をケズリ稜線をつくる。内底に葉脈痕？有。	A-1	Ⅸ
第20図 PL.35 2	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 11.2	内　にぶい橙 外　灰褐	泥質	内外ともナデ調整。外底は荒れ肌上となる。内底はスス・炭化物が付着。	(A)-1	Ⅸ
第20図 PL.35 3	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 9.6	内　黒褐色 外　暗赤褐色	泥質	内面器壁の剥落が著しく。外面は立ち上がり部稜線をケズリ、外底荒れ肌上、内底はナデ調整。	E-1	Ⅸ

第15表　第Ⅸ層　出土陶磁器観察表(1)

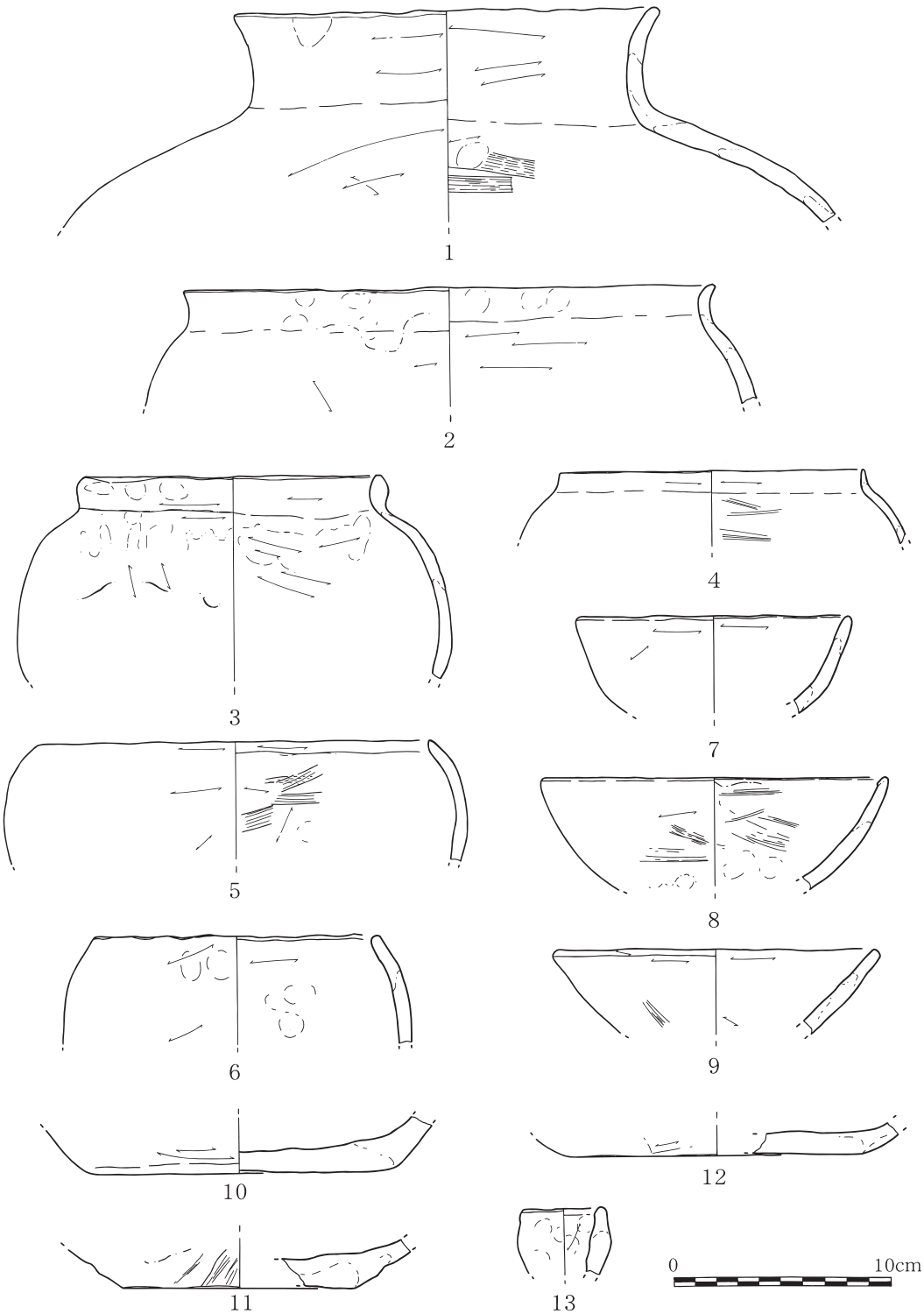
挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第20図 PL.35 4	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 7.2	内　にぶい黄褐色 外　明赤褐	泥質	内外とも丁寧なナデ。内底はナデが同心円状にまわり、上げ底。立ち上がり部の角は取れまるい。		Ⅸ
第20図 PL.35 5	須恵器	鉢	口縁部	18.0 － －	内　暗青灰 外　暗青灰	微粒子。白色粒・褐色粒をわずかに含む。	内面は綾杉状のタタキをナデ消し、口縁はナデが丁寧。外面は下方に工具による調整（ケズリ？）が確認できる、他横方向のナデ。	D-1	Ⅸ
第20図 PL.35 6	須恵器	不明	胴部	－ － －	内　暗灰 外　暗灰	微粒子。白色粒、褐色鉱物粒をわずかに含む。	内外面ともタタキ（綾杉状？）の後横方向のナデ調整。内面は凹凸が著しく一部接合痕が表出する。	A-1	Ⅸ
第20図 PL.35 7	須恵器	不明	底部	－ － 15.6	内　暗青灰 外　暗青灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。	内外とも横方向のナデ、内面は凹線状の調整痕が重なる。	A-1	Ⅸ
第20図 PL.35 8	須恵器	不明	胴部	－ － －	内　灰 外　灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。	内外面ともナデ、外面にタタキが残る。外面は凹凸が著しく接合痕が表出する。	E-1	Ⅸ
第20図 PL.35 9	瓦質	擂鉢	口縁部	－ － －	内　灰白 外　灰白	微粒子。黒色粒をわずかに含む。	外面は叩き、内面は擂目が密に施される。口縁部は横方向のナデにより丁寧に調整される。	E-1	Ⅸ

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 （貫入）	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第21図 PL.36 1	青磁	碗	劃花文碗	－ － －	灰白色でやや微粒子。所々に米粒大の黄褐色土混入。	灰青色の薄い失透釉を内外面に施釉。（粗い貫入）	内面に細い片切彫りで幅広蓮弁をその中に如意頭のような文様を描く。	A-1	Ⅸ
第21図 PL.36 2	青磁	碗	鎬蓮弁a	15.3 6.2 5.1	灰白色でやや微粒子。	黄灰青色の薄い失透釉を内底か高台外面まで施釉。畳付け露胎。（なし）	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描き、間弁の弁先も片切り彫りで描く。畳付水平。	B-2	Ⅸ
第21図 PL.36 3	青磁	碗	鎬蓮弁a	－ － 5.4	黄灰色でやや微粒子。	黄灰青色の薄い透明釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底まで露胎。（なし）	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。内底境に篦描きの圏線。畳付水平。	B-1	Ⅸ
第21図 PL.36 4	青磁	碗	鎬蓮弁a	17.4 約7.5 5.6	灰白色でやや微粒子。	灰緑色の薄い透明釉を内底から高台際まで施釉。高台外面から外底まで露胎。（なし）	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。内底境に篦描きの圏線。各蓮弁の右半分に櫛目文。竹節高台。	B-1	Ⅸ

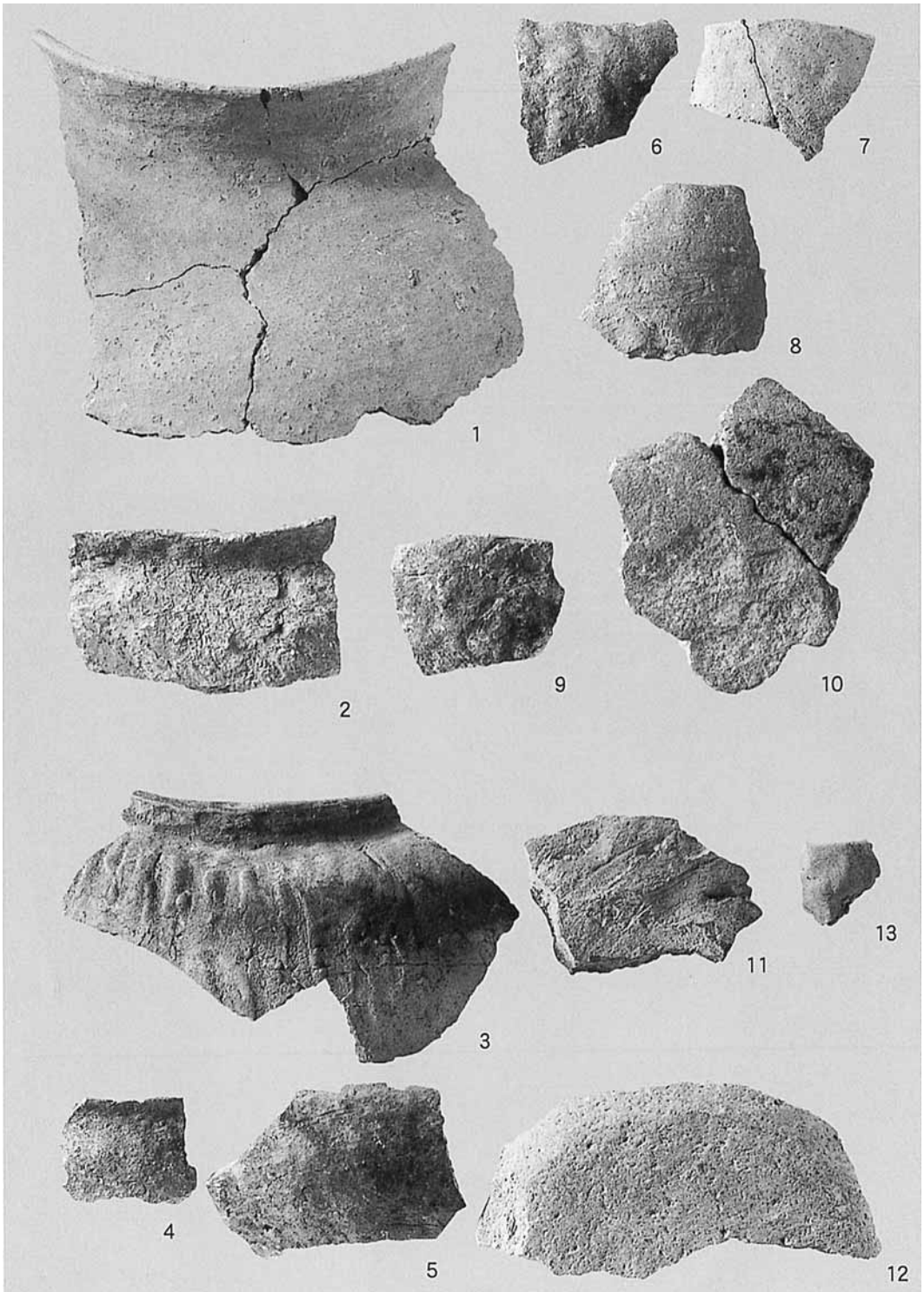
第16表　第Ⅸ層　出土陶磁器観察表(2)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第21図 PL.36 5	青磁	碗	鎬蓮弁b	15.4 — —	灰色でやや粗粒子。	青灰色の薄い透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入が部分的に見られる。)	箆描きの幅広蓮弁を描き、蓮弁と蓮弁の間に間弁も描いている。B窯系。	D-3	Ⅸ
第21図 PL.36 6	青磁	碗	鎬蓮弁b	15.1 — —	灰色でやや粗粒子。ところどころに粗い石粒混入。	黄灰青色の薄い透明釉を内側面に施釉(細かい貫入が部分的に見られる。)	箆描きの幅広蓮弁を描き、蓮弁と蓮弁の間に間弁も描いている。B窯系。	D-2	Ⅸ
第21図 PL.36 7	青磁	碗	鎬蓮弁b	— — 5.9	灰色でやや粗粒子。ところどころに粗い石粒混入	黄灰青色の薄い失透釉を内底から高台際まで施釉。高台外面から外底まで露胎(細かい貫入が全面に見られる。)	箆描きの幅広蓮弁を描いている。内底界に箆描きの圏線。B窯系。		Ⅸ
第21図 PL.36 8	青磁	碗	砧系蓮弁	15.1 — —	白色でやや微粒子。	青緑色の厚い釉を内・外面に施釉。(なし)	細い鎬蓮弁文。弁の輪郭を細い片切り彫りで描いている。砧系。	B-1	Ⅸ
第21図 PL.36 9	青磁	碗	砧系蓮弁	— — 4.5	白色でやや微粒子。	青緑色の厚い釉を全面施釉したあと、畳付の釉を掻き取って露胎にしている。(荒い貫入が全面に見られる。)	細い鎬蓮弁文。弁の輪郭を細い片切り彫りで描いている。砧系。	E-1	Ⅸ
第21図 PL.36 10	青磁	皿	櫛描文	— — 4.7	白色でやや微粒子。	緑青色の薄い透明釉を内底から外底脇まで施釉外底は露胎(なし)	内底に櫛描き文を描いた、いわゆる珠光青磁。底部は上げ底状のベタ底。	D-3	Ⅸ
第21図 PL.36 11	青磁	瓶	胴部	— — —	黄灰色でやや微粒子。	黄青色の厚い透明釉が内・外面に施釉。(細かい貫入が全面に見られる。)	なし	D-3	Ⅸ
第21図 PL.36 12	白磁	碗	口禿	— — 6.0	白色で堅緻	灰白色の釉を全面に施釉(なし)	内底に陰圏線が廻る	B-2	Ⅸ
第21図 PL.36 13	白磁	碗	今帰仁タイプ	17.0 — —	浅黄橙色軟質でやや微粒	濁黄橙色の釉を薄く施釉内・外面とも体部中位から下を露胎とする(なし)	なし	B-3	Ⅸ
第21図 PL.36 14	青磁	皿	同安窯系	9.2 — —	灰白色堅緻	灰色の釉を内底から外面腰部まで施油(外面に若干みられる)	無文皿	D-2	Ⅸ
第21図 PL.36 15	白磁	皿	口禿皿	— 8.0 —	堅緻	明緑灰色の釉を全面に施釉外底面の施釉は不均等(なし)	なし	E-1	Ⅸ
第21図 PL.36 16	青白磁	合子	身	— — —	淡黄白色堅くやや微粒淡黄白色	淡青白色の釉を施釉外面口縁端部から内面胴部中位までを露胎とする。(外面に若干みられる)	なし	D-1.2	Ⅸ

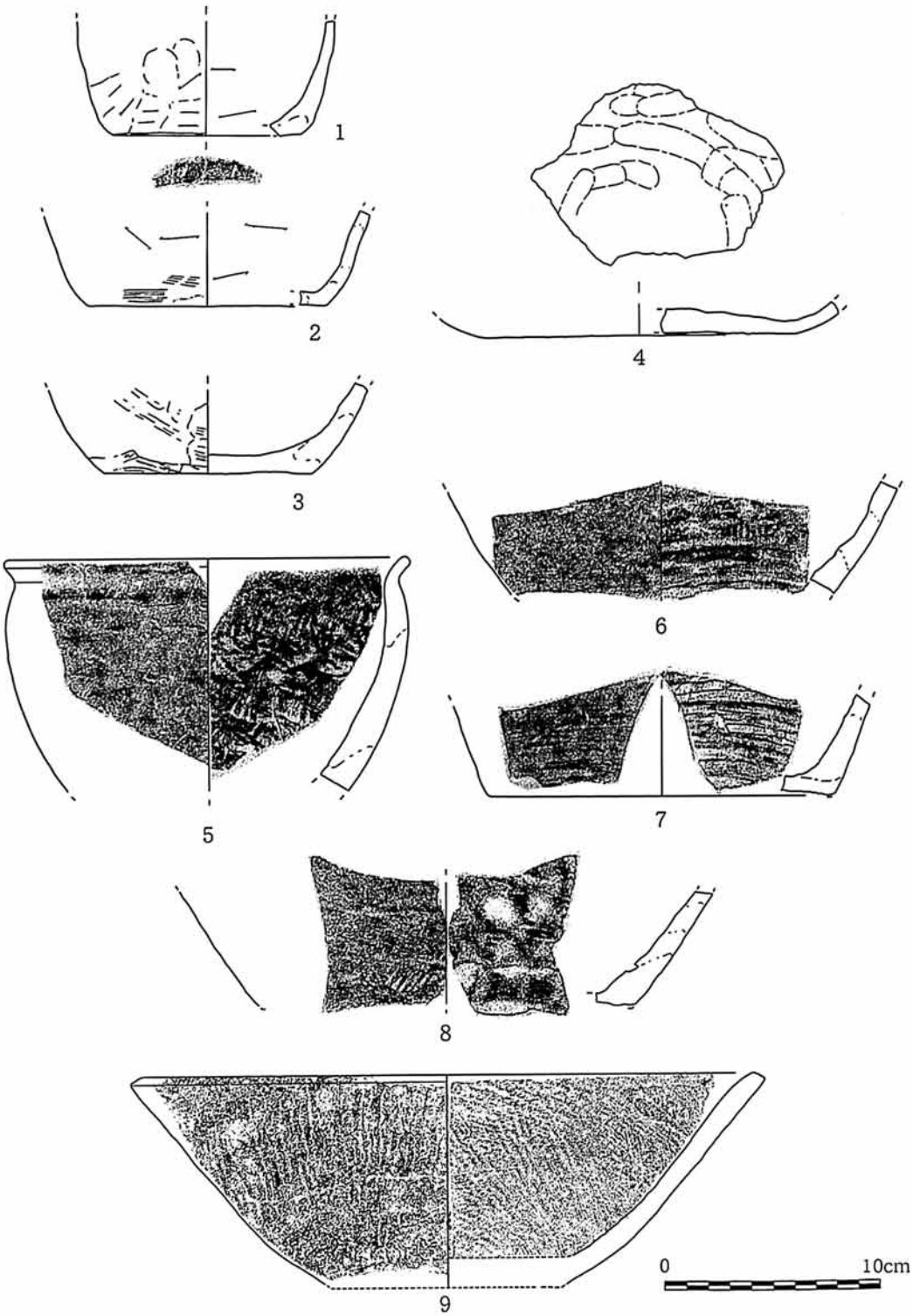
第17表　第Ⅸ層　出土陶磁器観察表(3)



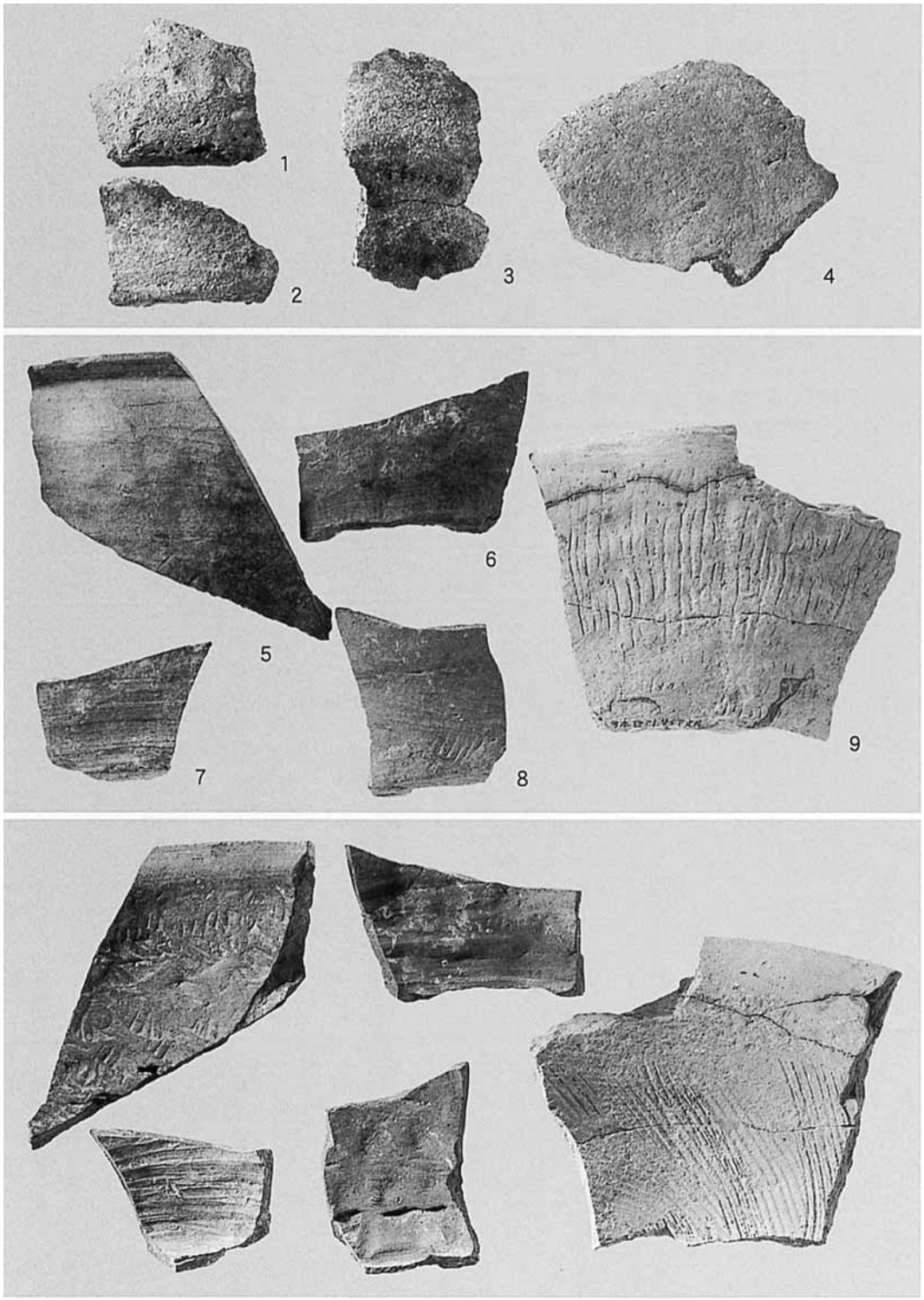
第 19 図 (PL.34)　第Ⅸ層出土土器　1. 壺　2 ～ 4. 甕　5・6. 鍋　7 ～ 9. 碗
10 ～ 12. 底部　13. ミニチュア



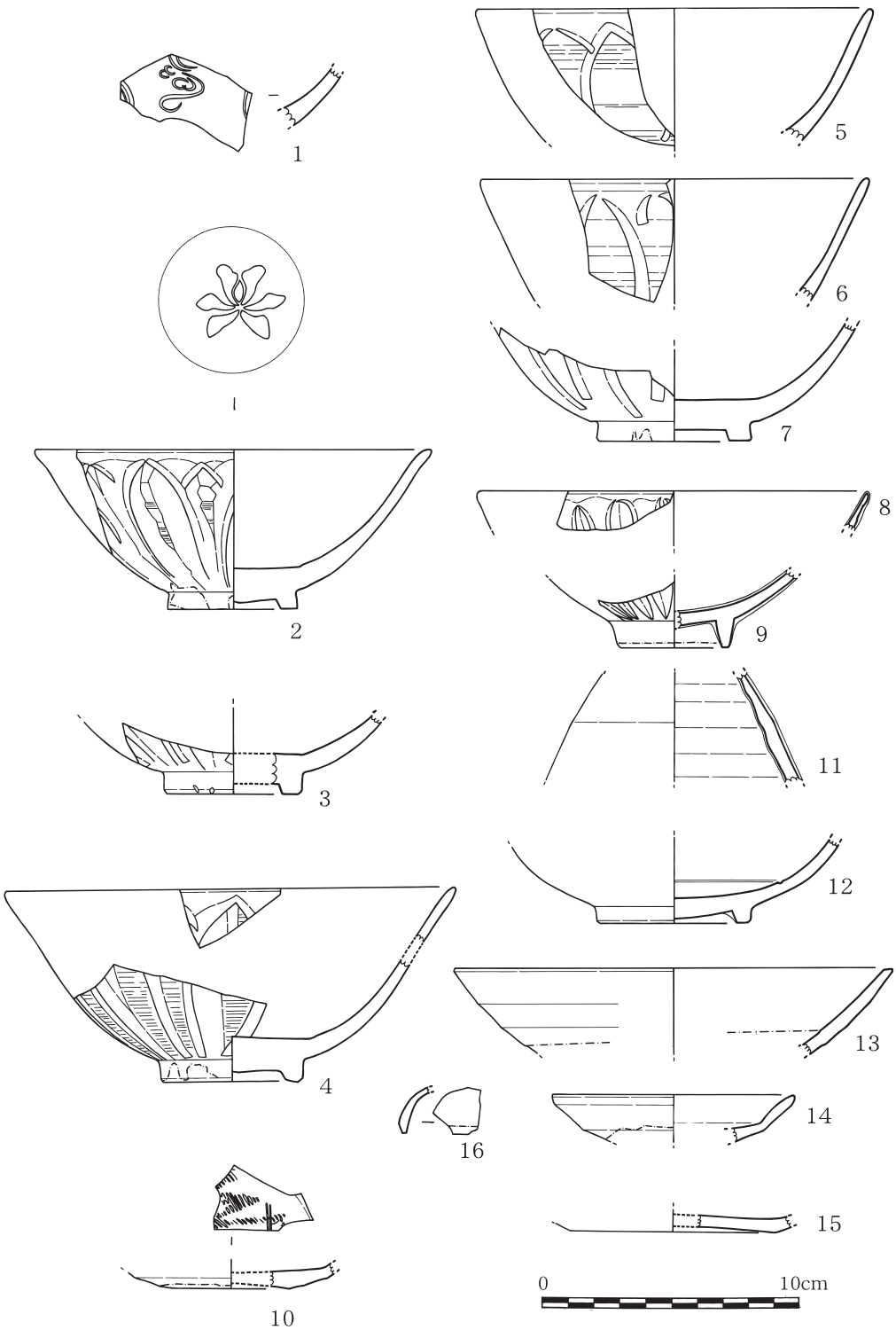
PL.34（第 19 図）　第Ⅸ層出土土器　1. 壺　2 ～ 4. 甕　5 ～ 6. 鍋　7 ～ 9. 碗
10 ～ 12. 底部　13. ミニチュア



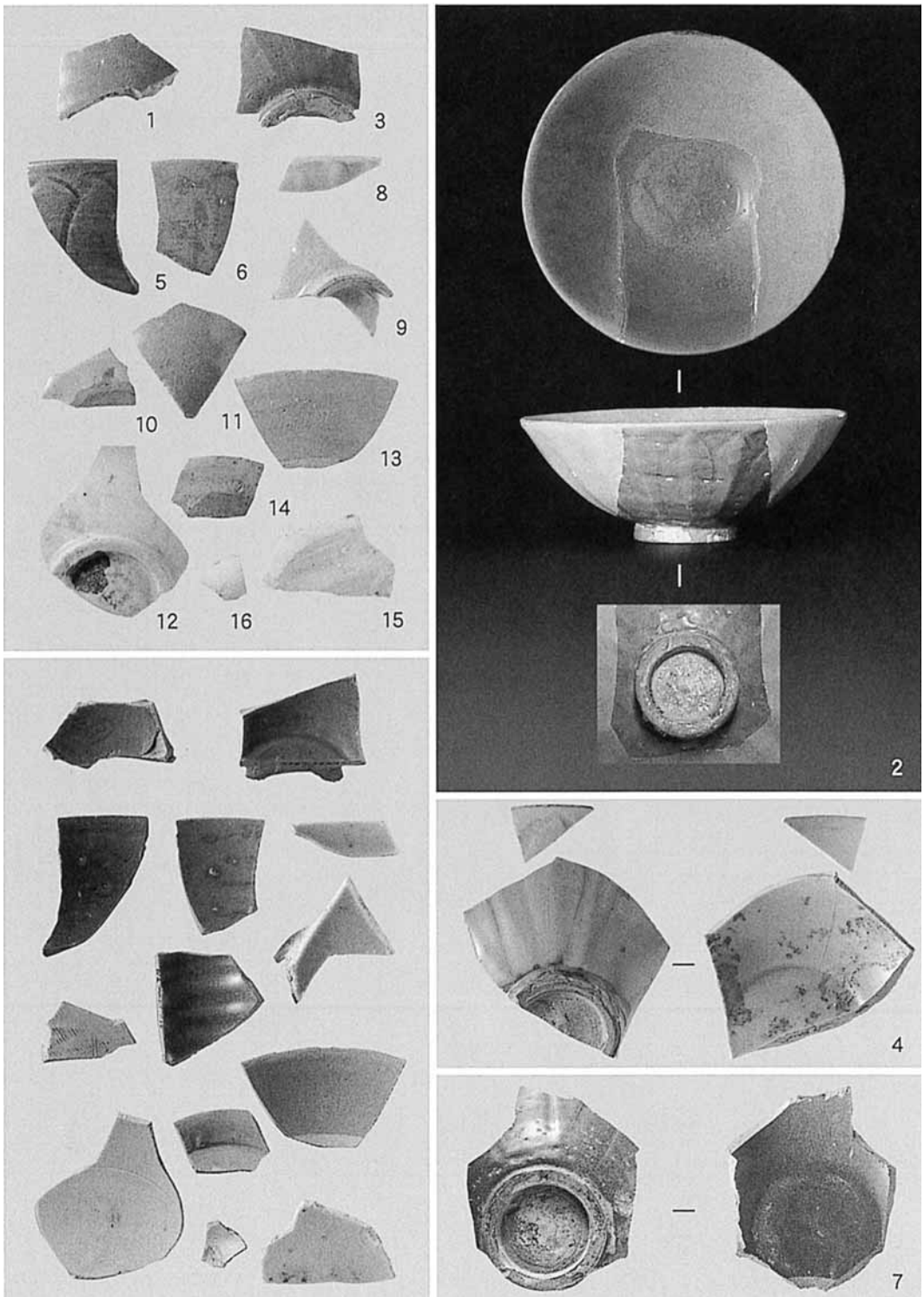
第 20 図 (PL.35)　第Ⅸ層出土土器・カムィヤキ須恵器・瓦質土器　1 ～ 4. 土器
5. カムィヤキ須恵器鉢　6 ～ 8. 同胴部・底部　9. 瓦質土器擂鉢



PL.35（第 20 図）　第Ⅸ層出土土器・カムィヤキ須恵器・瓦質土器　1 ～ 4. 土器
5. カムィヤキ須恵器鉢　6 ～ 8. 同胴部・底部　9. 瓦質土器擂鉢



第 21 図 (PL.36)　第Ⅸ層出土陶磁器　1 ～ 9. 青磁碗　10. 同皿　11. 同瓶　12・13. 白磁碗　14・15. 同皿　16. 青白磁合子



PL.36(第 21 図)　第Ⅸ層出土陶磁器　1 ～ 9. 青磁碗　10. 同皿　11. 同瓶　12・13. 白磁碗　14・15. 同皿　16. 青白磁合子

③　第Ⅶ層出土の陶磁器

主郭第Ⅶ層は在地の土器を主体にカムィヤキ須恵器と中国陶磁器などが出土。Ⅸ・Ⅴ層に比して出土量は多い。中国陶磁器は青磁・白磁・青白磁・褐釉陶器などが得られる。

土器（第 22 図・第 23 図 1 ～ 4）

Ⅰ群に比定される口縁部資料は確認されていない。Ⅱ群が圧倒的主体となる。第 22 図 9・10 は底部資料で後者は胎土からⅡ群の範疇に含まれると考えるが形態、内底面に擂鉢の摺目のように刷毛目調整が見られることなどから当該資料群に含んだ。前者は外底面に葉痕が残る。

壺－同図-1 はⅡ群壺形ａ種で同図-2 に比べ口縁部を強く外反させる特徴を持ち、内面にわずかに刷毛目が残るが丁寧なナデ調整によって均整のとれた器形となる。同図-2 は壺形ｂ種。

甕形－同図-3 は口頸部を短く作るｂ種でやや玉縁状に肥厚させ、外面の肩部より下半に一部研磨するなど丁寧な調整が施される。薄手に作る土器で図上復元を試みた。同図-4 はｃ種で口縁部を外側に強く折り肥厚させる。内面は刷毛目状の擦痕が残る。

鍋（浅鉢）形－同図-5・6 で内湾させる鉢形。前者は全形のうかがえる唯一の鍋（浅鉢）形土器で、底部は立ち上がりに稜線を持ち、内底はナデ調整も徹底せず荒れ肌状となる。両者とも口唇を舌状に仕上げる。

碗－同図-7 は碗形の土器と推定される、内湾の器形で鍋（浅鉢）形ともとれるが内面の刷毛目調整などから碗に含めた。同図-8 は直口器形の碗である。いずれも内外面に工具による調整と思われる擦痕が残る。

底部－厚手で立ち上がり部に指頭の並ぶもの（第 22 図-11・12）　比較的薄く作るもの（第 23 図-1）、内底部がやや上げ底状になり立ち上がりは丸みを持つもの（同図-2）、器形は前者同様だが滑石を混和財に用いるもの（同図-3）、内底面に葉脈痕を残す（同図-4）底部資料が確認される。

カムィヤキ須恵器（第 23 図-5 ～ 13）

壺－第 23 図-5 ～ 10 は壺形の口縁部で、外側に玉縁状の肥厚を持つもの（同図-5）、口頸部が直立ナデ肩になる器形（同図-6）、口縁部の形状で内側に段を有するもの（同図-7）段を有しない（同図-8）、口頸部が短いもの（同図-10）など個体によってさらに細分の余地がある。**器種不明**－同図-12・13 は底部資料で器種は不明、同図-11 は施文する胴部資料、沈線文が「〉」模様に施される。

青磁（第 24・25・26 図）

碗－第 24 図-1 は劃花文碗で検出されたのは 1 点である。第 24 図-2 ～ 8 は鎬蓮弁文碗ａで口縁は僅かに外反するのが多いが、直口も見られる。底部は高台の内刳りが浅く、畳付の幅は広い。内底は平坦で文様があるもの（同図-7・8）と無いもの（同図-6）が見られ

る。同図-9 は鎬蓮弁文碗ｂ。篦描きで幅広の蓮弁を描き、間弁も描いている。Ｂ窯系の直口碗。同図-10 ～ 13 は砧系鎬蓮弁文碗。第 25 図-1・2 はＢ窯系鎬蓮弁文碗で直口口縁だが器形としてはやや内彎的（同図-1）であり、畳付から内底までは露胎（同図-2）である。いわゆる大宰府編年のⅢ’の特徴を有する。同図-3 はラマ式蓮弁文碗、内彎的器形の碗で、内・外面に片切り彫りで文様が描かれる、外体面下位にラマ式蓮弁が廻っている。同図-4・5 は弦文帯碗、外体面上位に弦文を描いている。口縁部は外反タイプ（4）、直口タイプ（5）とが見られる。同図-6 は無文外反碗の底部資料と考えられる。

皿－第 26 図-1 は櫛描文皿（同安窯系）。同図-17・18 は無文皿（同安窯系）で灰白色の素地に薄い釉を施釉。同図-2 ～ 13 は口折皿で内体面から鍔上面へ折れる部分が明瞭な鎬を示している口折皿である。総体的に器壁は薄手で、釉は厚い（Ａ窯系）。第Ⅶ層の口折皿はすべて「口折皿Ⅰ群」で、「口折皿Ⅱ群」は検出されていない。同図-2 は内体面に幅広の篦描文を廻らす口折皿Ⅰ群ａで、同文様は盤の文様と類似する。同図-3 ～ 11 は外体面に鎬蓮弁文を廻らす口折皿Ⅰ群ｂで、同図-3 ～ 7 は鎬が明瞭な蓮弁で、弁の輪郭を細い２本線で描いている。畳付は細く、畳付だけ露胎となる。8 ～ 11 は鎬があまり明瞭でない蓮弁で、弁の輪郭は２本線で描いているが、２本のうち１本は幅広い片切り彫りになっている。また、畳付はやや幅広くなり、外底に蛇の目掻き取りの露胎が見られる。同図-12・13（口折皿Ⅰ群ｃ）は無文皿。同図-15 は内面有段皿、内面上位に蓋受けのような段を持つ皿で、段の上位だけに文様を描く。同図-16 は直口口縁皿で口径は広く外体面に数本の弦文が廻る。同図-19 は無文小皿（龍泉窯系）で淡青白色の釉を外体面に厚めに施釉。

杯－第 25 図-7 は百合口杯、器壁全体を波状にしているが口縁は輪花にならず、平坦で百合口状になっている。

壺－第 25 図-8 は鎬文酒会壺で弁先の尖らない細い丁寧な鎬蓮弁文が廻っている、底部の成形は円盤状の底部を内側から貼り付けている。

白磁（第 27・28 図・第 29 図-1 ～ 7）

碗－第 27 図-1 ～ 6 は薄手直口碗（今帰仁タイプ）で、施釉が輪状の釉剥ぎするもの（同図-1）、見込みまで施有せず胴中央で止まり下半を露胎とするもの（同図-2 ～ 6）、口唇を平たく広くつくるもの（同図-1・4・5）、やや内湾気味になり口唇を丸くつくるもの（同図-2・3・6）などバリエーションが認められる。この碗は第Ⅶ層を代表するタイプである。第 27 図-7 ～ 11・第 28 図-1 ～ 3 は口禿碗で概ね口径 13 ～ 14cm 内外で収まり、淡白色で堅緻な素地に灰白色の釉を口縁部を除く全面に施釉させる。第 28 図-7 ～ 10 は直口（口禿碗ａ）、第 28 図-1 ～ 3 は口縁部を外反させる（口禿碗ｂ）。第 27 図-7 は外面に癒着した痕跡を残す。第 27 図-4 ～ 10 はビロースクタイプ碗で口縁直下内面に圏線を廻し櫛描き、高台の高さが比較的低くなる同図-4・5（ａ）、同図-6 ～ 10 の口唇が前者に比べ丸みを持ち内面に文様を持たないもの（ｂ）に大別される。

皿－第 29 図 1 ～ 7 は口禿の小皿。器高と口径に若干バリエーションが認められ、概ね器高の高く口径の狭い同図-1 ～ 3 のａと、器高が低く口径の広い同図-4 ～ 6 のｂに大別できる。

青白磁（第 29 図-9・10）

皿－第 29 図-8 は淡青白色の釉を施釉し口唇を掻き取り露胎させる資料で、内底面には蓮池魚文を陰刻する、器形は均整がとれ器壁も薄く良品である。

瓶－同図-12 は小破片だが胴部の資料、外面に唐草文（渦文？）を描く。

褐釉陶器（第 30 図）

壺－小破片で数点確認される。いずれも壺形で比較的大型になる資料と小型のいわゆる茶入れに分けられる。第 30 図-1 は口縁部資料で肩部の境は不明瞭で耳の貼付けの無いいわゆる無耳壺、同図-2 は底部資料。同図-3 はいわゆる大海茶入壺の底部資料で、同図-4 は口縁部が小さく付く茶入れいわゆる尻張壺である。

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第 22 図 PL. 37 1	土器Ⅱ	壺 a	口縁部	24.4 － －	内橙 外橙	泥質。	内外とも丁寧なナデ、内面に刷毛目がわずかに残る。	E-3	Ⅶ
第 22 図 PL. 37 2	土器Ⅱ	壺 b	口縁部	14.0 － －	内にぶい橙 外橙	泥質。	内外とも丁寧ナデ、口縁内外面に浅い指頭痕を残す。	B-2	Ⅶ最下
第 22 図 PL. 37 3	土器Ⅱ	甕 b	口縁部	－ － －	内外にぶい黄褐（黒色）	泥質。	外面はナデを主に胴下半は磨き様の調整が観察できる。内面は雑なナデ、外底は荒れ肌状、内底にススを残す。	C-1	Ⅶ
第 22 図 PL. 37 4	土器Ⅱ	甕 C	口縁部	－ －	内にぶい橙 外灰黄褐色	泥質。	口唇部を折り肥厚させ、口縁上端をナデ調整により平坦につくる。外面荒れ肌状、内面刷毛目。	A-1 A-1	Ⅶ 60-65 Ⅶ 40-45
第 22 図 PL. 37 5	土器Ⅱ	鍋（浅鉢）	完形	11.4 8.2 9.7	内黒褐色 外暗褐	泥質。	内外面ともヘラナデ、一部磨き様に光沢をもつ。外底面は調整をせず、内底面は同心円状に調整。	B-1 石垣沿い	Ⅶ
第 22 図 PL. 37 6	土器Ⅱ		口縁部	11.4 － －	内にぶい橙 外にぶい黄褐	泥質。	ない外面ともナデ調整、内湾させるため口縁下に指頭が並ぶ、口唇部舌状。	A-1	Ⅶ 50-55
第 22 図 PL. 37 7	土器Ⅱ	碗	口縁部	16.2 － －	内にぶい橙 外にぶい橙	泥質。	内面は刷毛目が縦位に並び口縁下はナデ消される。外面は雑なナデ。	A-1	Ⅶ 50-55
第 22 図 PL. 37 8	土器Ⅱ	碗	口縁部	16.6 － －	内にぶい橙 外橙	泥質。	内外面ともヘラ状工具によるナデ？、外面胴はケズリに近い、口縁下は丁寧なナデ、口唇部は舌状。	北石沿	Ⅶ 15-20
第 22 図 PL. 37 9	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 7.0	内黒褐色 外褐灰	泥質。	薄手で立ち上がりがわずかにくびれる。外底に葉脈痕あり。Ⅰ類にも近似するがⅡ類碗の底部と考えた。	B-1	Ⅶ 土留内
第 22 図 PL. 37 10	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 4.3	内橙 外橙	泥質。	薄手で立ち上がりがわずかにくびれる。外底に葉脈痕あり。Ⅰ類にも近似するがⅡ類碗の底部と考えた。	北石沿 F-2	Ⅶ 15-20 Ⅶ 5-10
第 22 図 PL. 37 11	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 17.6	内にぶい橙 外にぶい橙	泥質。	内外ともナデ調整、外底は接合痕が明瞭に表出、。雑なナデ調整である。	B-1	Ⅶ 土留内
第 22 図 PL. 37 12	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 14.0	内橙 外にぶい橙	泥質。	内面ナデ、外面は立ち上がり部で指頭が並ぶ。指頭を切りヘラナデ、外底は荒肌状となる。	A-1	Ⅶ 30-35

第 18 表　第Ⅶ層　出土陶磁器観察表(1)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第23図 PL. 38 1	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 12.2	内橙 外にぶい橙	泥質。	内面はナデ一部刷毛目が残る。外面はナデ、下方は横方向にケズリ。外底面は雑なナデ。	北石沿	Ⅶ 25-30
第23図 PL. 38 2	土器Ⅱ	不明	底部	－ －	内灰・橙 外暗灰	泥質。	胴下半は雑な調整。内底面と外底縁辺がススを残す。	A-1	Ⅶ 50-60
第23図 PL. 38 3	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 10.0	内橙 外にぶい橙	泥質。 滑石混入。	内外ともナデ調整で立ち上がり部の角をとり丸い。	北石沿	Ⅶ 10-15
第23図 PL. 38 4	土器Ⅱ	不明	底部	－ － －	内橙 外明茶褐色	泥質。	ない外面ともナデ、外底面に葉脈痕を残す。立ち上がり部から外底のナデにより丸くなる。	A-1	Ⅶ 55-60
第23図 PL. 38 5	須恵器	壺a	口縁部	－ － －	内暗灰 外灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。	内外とも丁寧にナデ。口縁外面は肥厚し、内面は若干凹む。	D-1	Ⅶ
第23図 PL. 38 6	須恵器	壺b	口縁部	22.0 － －	内灰 外灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。	内外ともナデ。肩部内面は凹線状調整痕が斜位に並行重複。	A-2	Ⅶ 0-5
第23図 PL. 38 7	須恵器	壺c	口縁部	11.3 － －	内赤褐 外暗赤灰	微粒子。白色粒を含む、焼成不良。	内外とも横方向の丁寧なナデ、内面口縁直下が凹む。	F-2	Ⅶ 5-10
第23図 PL. 38 8	須恵器	壺c	口縁部	26.8 － －	内灰 外灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。	内外とも横方向の丁寧なナデ、内面口縁直下が凹む。	A-1 北石沿	Ⅶ
第23図 PL. 38 9	須恵器	壺b	口縁部	12.2 － －	内暗灰 外暗灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。 焼成良好。	内外とも丁寧な横方向のナデ。内面にわずかに接合痕が表出。	B-1	Ⅶ 25-30
第23図 PL. 38 10	須恵器	壺d	口縁部	7.8 － －	内黄灰 外灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。 焼成良好。	内外とも丁寧な横方向のナデ。内面にわずかに接合痕が表出。	A-1	Ⅶ
第23図 PL. 38 11	須恵器	不明	胴部	－ － －	内暗灰 外黄灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。 焼成良好。	内外とも横方向のナデ。「く」の字あるいは逆「く」の字に沈線を施す。	B-1	Ⅶ
第23図 PL. 38 12	須恵器	不明	底部	－ － 17.0	内暗灰 外暗灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。 焼成良好。	外面は一部タタキが重複するが丁寧にナデ。内面は凹線状調整痕が、外底は荒肌状となる。	B-1 石沿	Ⅶ 10-15
第23図 PL. 38 13	須恵器	不明	底部	－ － 17.2	内灰 外黄灰	微粒子。白色粒をわずかに含む。	外底に籾圧痕有り。内外ともナデ、内面にはタタキが一部に残る。	B-2	Ⅶ

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第24図 PL. 39 1	青磁	碗	劃花文	－ － －	灰色でやや微粒子	青灰色の薄い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	内対面に3本櫛描き文。	A-1	Ⅶ
第24図 PL. 39 2	青磁	碗	鎬蓮弁文碗a	14.8 － －	灰白色で微粒子	青灰色のやや厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。	A-1	Ⅶ
第24図 PL. 39 3	青磁	碗		15 － －	淡灰色でやや微粒子	黄青色のやや厚い透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入が全面に見られる。)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。	A-1	Ⅶ
第24図 PL. 39 4	青	碗		15.2 － －	灰白色でやや微粒子	灰青色のやや厚い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入が部分的に見られる)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。	A-1	Ⅶ
第24図 PL. 39 5	青磁	碗		15.7 － －	灰白色でやや微粒子	灰緑色のやや厚い透明釉を内・外側に施釉。(なし)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。	F-2	Ⅶ

第 19 表　第Ⅶ層　出土陶磁器観察表(2)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第24図 PL.39 6	青磁	碗	鎬蓮弁文碗a	16.3 6.7 5.8	灰白色でやや微粒子	灰青色のやや薄い透明釉を内底から高台際まで施釉。高台外面から外底まで露胎。(なし)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。内底界に篦描きの圏線。竹節高台。		Ⅶ
第24図 PL.39 7	青磁	碗		－ － 6.0	灰白色でやや微粒子	黄青色の薄い透明釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底まで露胎。(荒い貫入が外面にみられる。)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。内底界に篦描きの圏線。内底に印花。竹節高台。	D-3	Ⅶ
第24図 PL.39 8	青磁	碗		－ － 5.7	灰白色でやや微粒子	緑青色の薄い透明釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から外底まで露胎。(なし)	鎬蓮弁の輪郭を片切り彫りで描いている。間弁も同じ手法で描いている。内底界に篦描きの圏線。内底に印花。竹節高台。	E-3	Ⅶ
第24図 PL.39 9	青磁	碗	鎬蓮弁b	15.6 － －	灰色でやや粗粒子	淡灰色の薄い透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入が部分的に見られる。)	鎬のない蓮弁を篦で描いている。間弁も見られる。 B窯系。	F-2	Ⅶ
第24図 PL.39 10	青磁	碗	砧系蓮弁文碗	13.0 － －	白色微粒子	淡青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入と細かい貫入が全面に見られる。)	細い鎬連弁。弁の輪郭の線の有無が明瞭でない。	E-2	Ⅶ
第24図 PL.39 11	青磁	碗		13.6 － －	白色微粒子	淡青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	細い鎬蓮弁。弁先だけ篦で輪郭を描いている。	E-2	Ⅶ
第24図 PL.39 12	青磁	碗		15.7 － －	白色微粒子	淡青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	細い鎬蓮弁。弁先だけ篦で輪郭を描いている。	D-1	Ⅶ
第24図 PL.39 13	青磁	碗		－ － 3.8	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を全面施釉のあと、畳付の釉を掻き取る	細い鎬蓮弁の一部が見られる。高台が小さく畳付の幅がせまい	A-1	Ⅶ
第25図 PL.40 1	青	碗	鎬蓮弁文碗b	16.2 － －	淡灰色でやや粗粒子	灰青色のやや厚い透明釉を内・外面に施釉(細かい貫入が全面に見られる)	鎬が弱い鎬、鎬蓮弁文。弁の輪郭を線描きで描いている。弁先と弁先の間にも線描き。	C-1	Ⅶ
第25図 PL.40 2	青磁	碗		－ － 4.5	淡灰色でやや粗粒子	灰青色のやや薄い透明釉を内底から高台際まで施釉。高台外面から外底までは露胎(なし)	鎬が弱い蓮弁文の下部が見られる。畳付水平。内底が凹む。	C-1	Ⅶ
第25図 PL.40 3	青磁	碗	ラマ式蓮弁	5.2 － －	白色微粒子	緑青色のやや薄い透明釉を内底から高台際まで施釉。高台外面から外底までは露胎。(なし)	口縁直下に数本の弦文が廻り、その下に3本櫛による幅広蓮弁を描くものと考えられる。内体面には線描き草花文。畳付水平内底凹む。	C-1	Ⅶ
第25図 PL.40 4	青磁	碗	弦文帯碗a	15.0 － －	白色微粒子	緑青色のやや厚い透明釉を内・外面に施釉(なし)	4本の弦文を口縁直下に廻らしている。	C-1	Ⅶ
第25図 PL.40 5	青磁	碗		－ － 16.9	灰白色でやや微粒子	灰青色のやや薄い透明釉を内・外面に施釉。(貫入が全面にみられる。)	口縁直下に2本の弦文を廻らし、それを3本斜線で区割していく文様。	D-3	Ⅶ
第25図 PL.40 6	青磁	碗	無文外反	－ － 6.0	淡灰色でやや粗粒子	灰青色のやや薄い透明釉を内・外に施釉(荒い貫入が全面に見られる。)	なし B窯系	F-2	Ⅶ
第25図 PL.40 7	青磁	杯	百合口	8.2 － －	淡灰色でやや微粒子	灰青色のやや厚い透明釉を内・外に施釉。内外面に釉垂れ。	器壁全体を波状にして蓮弁文を表現している。	C-1	Ⅶ
第25図 PL.40 8	青磁	壺	酒会壺	15.0 14.5 10.4	白色微粒子	灰青色の厚い透明釉を全面に施釉したあと、口唇部と畳付の釉を掻き取って露胎にしている。	弁先のない細い鎬蓮弁を全面に廻らしている。	E-2	Ⅶ
第26図 PL.41 1	青磁	皿	櫛描	－ － 4.5	灰白色でやや微粒子	灰白青色の薄い透明釉を内底から外底脇まで施釉。外底は露胎。(細かい貫入が全面に見られる。)	内底に櫛描き文を描いたいわゆる珠光青磁。底部は上げ底状のベタ底。	C-3	Ⅶ
第26図 PL.41 2	青磁	皿	口折Ⅰa	－ － 14.6	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入が全面に見られる。)	内体面に幅7㎜の単篦による蓮弁文を廻らす。錆端をつまみあげている。	B-1	Ⅶ

第20表　第Ⅶ層　出土陶磁器観察表(3)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第26図 PL.41 3	青磁	皿	口折皿Ⅰ群b	10.2 3.7 4.0	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を全面施釉したあと、畳付の釉を掻き取って露胎にしている。(なし)	鎬蓮弁の輪郭を細い2本線で描いている。内底には双魚文が貼付されている。	A-1	Ⅶ
第26図 PL.41 4	青磁	皿		－ － 10.4	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を全面施釉したあと、畳付の釉を掻き取って露胎にしている。(なし)	鎬弁蓮の輪郭を細い2本線で描いている。	E-2	Ⅶ
第26図 PL.41 5	青磁	皿		－ － 5.7	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を全面施釉したあと、畳付の釉を掻き取って露胎にしている。(なし)	鎬弁蓮の輪郭を細い2本線で描いている。内底には双魚文が貼付されている。	F-2	Ⅶ
第26図 PL.41 6	青磁	皿		11.2 3.9 4.4	白色微粒子	灰白色の厚い透明釉を全面施釉したあと、畳付の釉を掻き取って露胎にしている。(なし)	鎬弁蓮の輪郭を細い2本線で描いている。内底に1本の陽圏線が廻っている。土留め石積みの内側。	C-1 B-1	Ⅶ Ⅶ
第26図 PL.41 7	青磁	皿		12.4 － －	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	鎬弁蓮の輪郭を細い2本線で描いている。内底は不明。鍔端をつまみ上げている。	F-2	Ⅶ
第26図 PL.41 8	青磁	皿		12.6 － －	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	鎬が明瞭でない鎬蓮弁の輪郭を2本線で描いているが、2本のうち外側一本は幅広い片切り彫りになっている。	E-2	Ⅶ
第26図 PL.41 9	青磁	皿		12.7 － －	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	鎬が明瞭でない鎬蓮弁の輪郭を2本線で描いているが、2本のうち外側一本は幅広い片切り彫りになっている。	D-2	Ⅶ
第26図 PL.41 10	青磁	皿		－ － 6.4	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を全面施釉したあと、外底釉を蛇の目掻き取る。	鎬が明瞭でない蓮弁を2本線で描き、外側は幅広の片切り彫り。内底は双魚文。	基壇の下 E-3	Ⅶ
第26図 PL.41 11	青磁	皿		12.1 － －	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入がある。)	鎬蓮弁の輪郭を細い1本線で描いている。	C-3	Ⅶ
第26図 PL.41 12	青磁	皿	口折皿Ⅰ群c	12.1 － －	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入がある。)	無文、鍔端をつまみ上げている。	A-1	Ⅶ
第26図 PL.41 13	青磁	皿		11.6 － －	白色微粒子	灰白色の厚い透明釉を内、外面に施釉。(荒い貫入が全面に見られる。)	無文	F-2	Ⅶ
第26図 PL.41 14	青磁	皿		－ － 6.1	灰色で粗粒子	灰青色の薄い透明釉を施釉。畳付から外底まで露胎。(貫入なし)	無文、畳付水平(B窯系)	E-2 基壇の下	Ⅶ
第26図 PL.41 15	青磁	皿	内面有段	11.6 － －	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	口縁内面に1本の陰圏線を廻らし、その中に線彫りの唐草文を描いている。	E-2	Ⅶ
第26図 PL.41 16	青磁	皿	直口	13.1 － －	灰白色でやや微粒子	黄青色の薄い透明釉を内・外に施釉。(荒い貫入が部分的に見られる。)	外体面上部に数本の弦文が廻っている。	F 北石垣沿	Ⅶ
第26図 PL.41 17	青磁	皿	同安窯系無文皿	9.9 1.7 5.0	淡灰白色堅緻	灰白色の釉を施釉外面胴部下位から下を露胎とする。(なし)	なし	F-1	Ⅶ
第26図 PL.41 18	青磁	皿		10.0 2.0 5.6	黄灰白堅くやや微粒気泡多い	淡黄緑色の釉を施釉。内底の釉は輪状に掻き取る。(細かい貫入)	なし	－	－
第26図 PL.41 19	青磁	皿	無文皿	10.0 1.9 5.2	黄白色堅くやや粗粒子	緑青色の薄い透明釉を外底脇まで施釉。	なし	F 北石垣沿	Ⅶ

第21表　第Ⅶ層　出土陶磁器観察表(4)

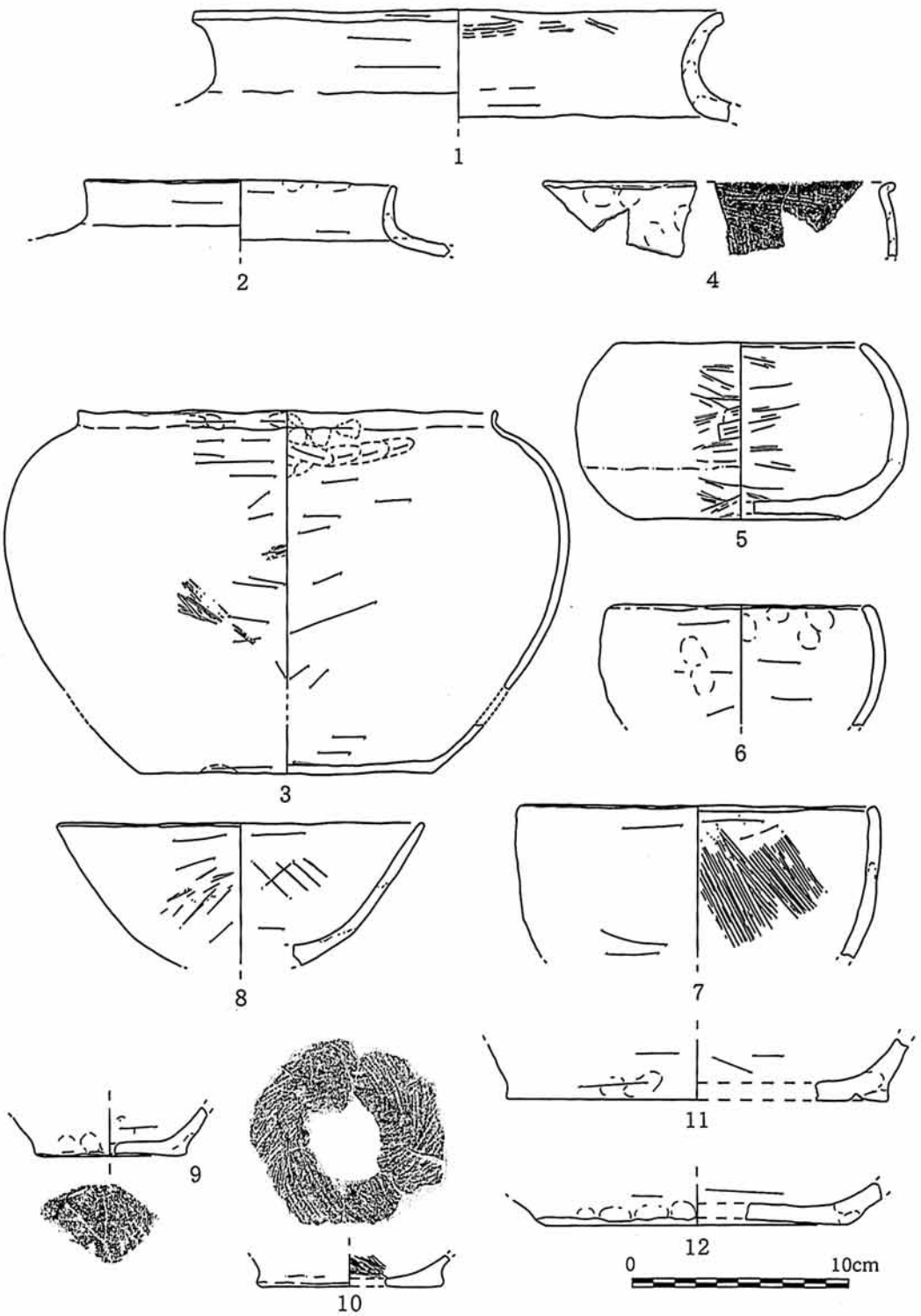
II

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第27図 PL. 42 1	白磁	碗	今帰仁タイプ碗	18.0 4.3 9.1	淡灰色堅くやや微粒気泡あり	緑灰色の釉を内底から外底中位まで施釉、内底は輪状に釉を掻き取る	なし	E-1 E-3	Ⅶ
第27図 PL. 42 2	白磁	碗		16.8 6.0 6.4	灰色堅緻	灰黄色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（全面に細かい貫入）	内底に目跡がみられる。	A-1 A.B 表	Ⅶ
第27図 PL. 42 3	白磁	碗		16.8 5.5 6.2	灰色堅くやや微粒	淡灰緑色の釉を薄く施釉。内・外面とも体部中位から下を露胎とする	無釉部と施釉部の境は茶色に発色	E-3	Ⅶ
第27図 PL. 42 4	白磁	碗		18.0 5.6 6.6	灰色堅くやや微粒	淡緑色の釉を薄く施釉（なし）	外面上部に目跡（？）が付着 (A)-1 Ⅶ 45-50	(A) -1	Ⅶ
第27図 PL. 42 5	白磁	碗		16 5.8 6.2	灰色堅くやや微粒	淡灰緑色の釉を施釉内・外面とも体部中位から下を露胎とする。（なし）	無釉部と施釉部の境は茶色に発色	A-1	Ⅶ
第27図 PL. 42 6	白磁	碗		19.0 5.2 5.9	灰色堅くやや微粒	淡灰緑色の釉を薄く施釉。内・外面とも体部中位から下を露胎とする		E-2	Ⅶ
第27図 PL. 42 7	白磁	碗	口禿碗a	12.6 4.0 4.0	白色 堅緻	淡青白色の釉を施釉口縁端部と外面胴部中位から下を露胎とする。	外面上部に癒着した痕。	E-1	Ⅶ
第27図 PL. 42 8	白磁	碗		12.8 3.9 5.0	淡灰白色 堅緻	灰白色の釉を施釉口縁端部と外面胴部中位から下を露胎とする。（なし）	なし	E-2 志6	Ⅶ
第27図 PL. 42 9	白磁	碗		12.2 3.8 4.8	淡灰白色 堅緻	淡青白色の釉を施釉、口縁端部と外面胴部下位から露胎とする。（なし）	見込みに圏線	E-1	Ⅶ
第27図 PL. 42 10	白磁	碗		12.4 3.6 4.6	白色 堅緻	明緑灰色の釉を施釉口縁端部と外面胴部下位から下を露胎とする。	内底に陰圏線を一条廻らす	E-1	Ⅶ
第27図 PL. 42 11	白磁	碗		－ － 4.4	淡灰白色 堅くやや微粒	灰白色の釉を施釉外面胴部中位から下を露胎とする	内底に陰圏線を一条廻らす E-2 Ⅶ 15-20 F-2 Ⅶ 20-25	E-2 F-2	Ⅶ
第28図 PL. 43 1	白磁	碗	口禿b	13.2 － －	淡黄白色堅緻	灰白色の釉を口縁端部を除く全面に施釉（全体に細かな貫入が多くみられる）	外面口縁部に目跡（？）が付着	B-1	Ⅶ 最下
第28図 PL. 43 2	白磁	碗		14.1 － －	淡黄白色堅緻	灰白色の釉を口縁端部を除く全面に施釉 （なし）	なし	C-1	Ⅶ
第28図 PL. 43 3	白磁	碗		－ － －	淡黄白色堅緻	灰白色の釉を口縁端部を除く全面に施釉 （なし）	なし A-1 Ⅶ 60-65	A-1	Ⅶ
第28図 PL. 43 4	白磁	碗	ビロースクタイプa	15.6 6.1 5.0	灰白色堅くやや微粒子気泡多し	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉、一部高台まで流れる（全体に細かい貫入がみられる）	内面上部に陰圏線が一条廻り、下部には櫛目による櫛描文を施す。内底は凹み圏線あり。	(A)-1 E-1 F-1 志5	Ⅶ
第28図 PL. 43 5	白磁	碗		15.5 6.0 5.0	灰色堅くやや微粒気泡多し	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉（全体に細かい貫入がみられる）	内面上部に陰圏線が一条廻り、下部には櫛目による文様を施す。内底は圏線あり。	D-1 志6	Ⅶ
第28図 PL. 43 6	白磁	碗	ビロースクタイプb	14.6 6.0 4.5	淡黄白色堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉（なし）	外面上部に陰圏線が二条廻るが不明瞭。	基壇下 E-2	Ⅶ
第28図 PL. 43 7	白磁	碗		14.4 6.2 4.6	淡黄白色堅くやや微粒気泡多し	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉（全体に細かい貫入がみられる）	なし	E-2 F-2	Ⅶ

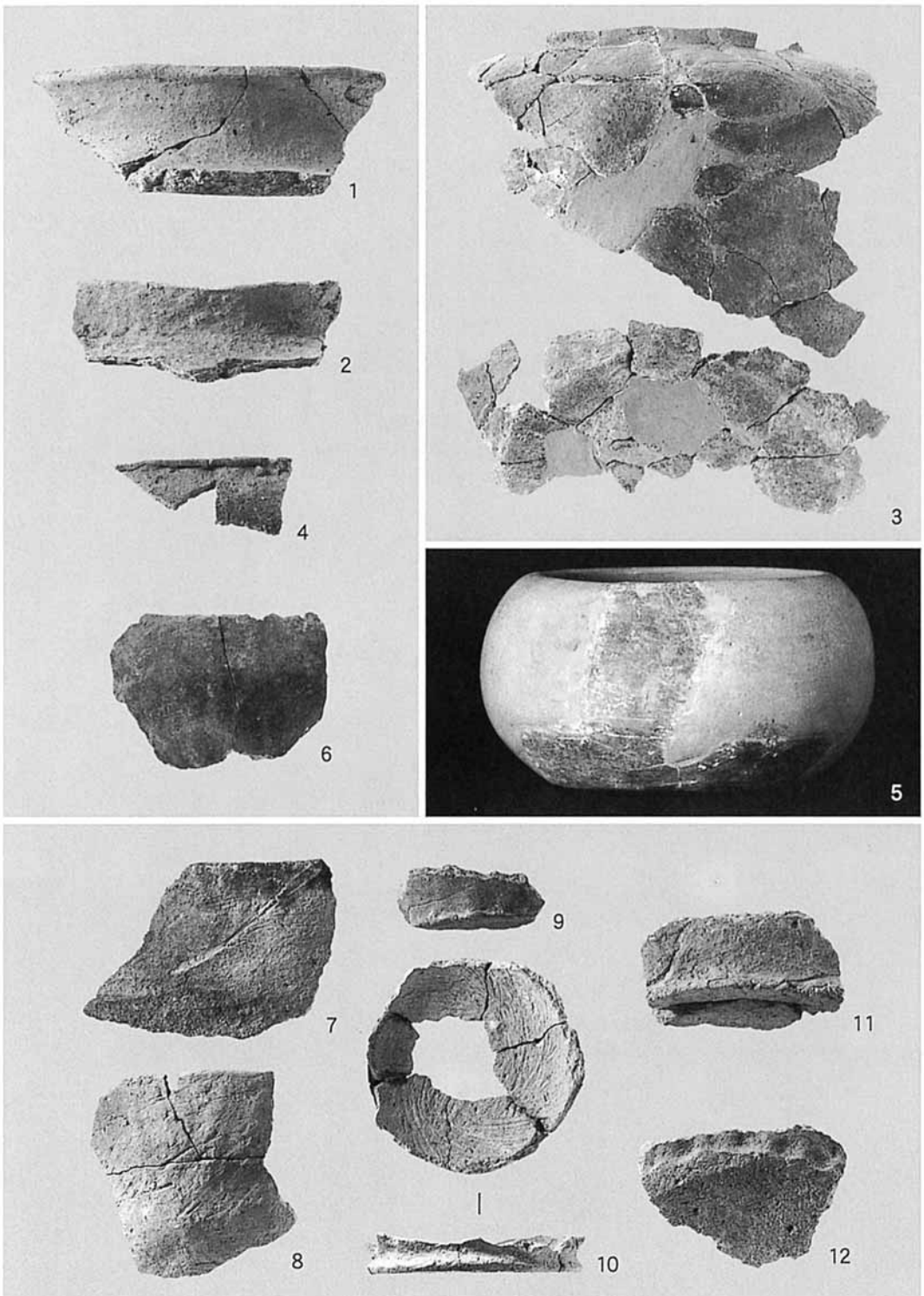
第 22 表　第Ⅶ層　出土陶磁器観察表(5)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第28図 PL.43 8	白磁	碗	ビロースクタイプb	14.8 － －	淡黄白色堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉（全体に貫入がみられる）	なし	D-2 D-3 大庭Ⅱ	Ⅶ
第28図 PL.43 9	白磁	碗		15.6 － －	淡黄白色堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を施釉※破片のため施釉範囲は不明（なし）	なし	E-3 基壇下	Ⅶ
第28図 PL.43 10	白磁	碗		16.1 － －	灰白色堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を施釉（全面に細かい貫入がみられる）	外面下部に圏線が三条廻る	A-1	Ⅶ
第29図 PL.44 1	白磁	皿	口禿b	10.8 2.6 7.0	淡灰白色堅緻	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉 （なし）	なし A-1 Ⅶ 60-65、D-3 Ⅸ	A-1 D-3	Ⅸ
第29図 PL.44 2	白磁	皿	口禿a	10.6 3.0 5.7	淡灰白色堅緻	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉。外底面の施釉は不均等（なし）	内底に陰圏線を一条廻す A-1 Ⅶ 45-50	A-1	Ⅶ
第29図 PL.44 3	白磁	皿	口禿a	10.2 2.9 5.8	淡灰白色堅くやや微粒	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉（なし）	外面は火熱により部分的に変色　北石垣沿Ⅶ 10-15	北石垣沿	Ⅶ
第29図 PL.44 4	白磁	皿	口禿a	9.3 1.8 5.4	淡灰白色堅くやや微粒	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉（なし）	なし E-3 基壇内Ⅶ 10-15	E-3 基壇内	Ⅶ
第29図 PL.44 5	白磁	皿	口禿b	11.3 1.7 7.3	淡灰白色堅緻	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉（なし）	なし A-1 Ⅶ 70-75	A-1	Ⅶ
第29図 PL.44 6	白	皿	口禿b	12.2 2.4 7.5	淡灰白色堅	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉（なし）	なし	B-2	Ⅶ
第29図 PL.44 7	白磁	皿	口禿b	－ － 5.6	淡灰白色堅緻	灰白色の釉を施釉外底の釉を掻き取る（なし）	内底に陰圏線を一条廻す。	A-1	Ⅶ
第29図 PL.44 8	青白磁	皿		10.0 1.2 6.6	淡灰白色堅緻	淡青白色の釉を施釉内面口縁端部から外面胴部中位までを露胎とする。	内底に蓮池魚文を陰刻。	基壇の下 E-2	Ⅶ
第29図 PL.44 9	青白磁	瓶		－ － －	淡灰白色堅くやや微粒	淡青白色の釉を施釉（外面に貫入がみられる）	外面に唐草文を施す。	A-1 E-2	Ⅶ
第30図 PL.45 1	褐釉	壺	口縁	11.6 － －	〃	淡褐色の釉を口厚から外面にかけて施釉	なし	F-2	Ⅶ
第30図 PL.45 2	褐釉	壺	底部	－ － 10.4	〃	淡褐色釉を底部近くまで施釉。釉垂れが見られる。	なし	E-2 基壇下	Ⅶ
第30図 PL.45 3	褐釉	壺	底部	－ － 7.0	紫褐色で堅緻。水簸された素地	黒釉を胴部下半まで施釉、内面は全面施釉となる。	文様はとくになし。口縁部の形状は第37図-3を参考に復元。大海茶入。	F-2	Ⅶ
第30図 PL.45 4	褐釉	壺	胴部	－ － －	淡橙褐色でやや粗粒	外面に淡褐色釉	肩部近くに「清」のスタンプ	F-2	Ⅶ
第30図 PL.45 5	褐釉	壺	口縁	1.0 － －	紫褐色で堅緻。水簸された素地	淡黒褐釉を外面に施釉	なし 茶入。	F-2	Ⅶ

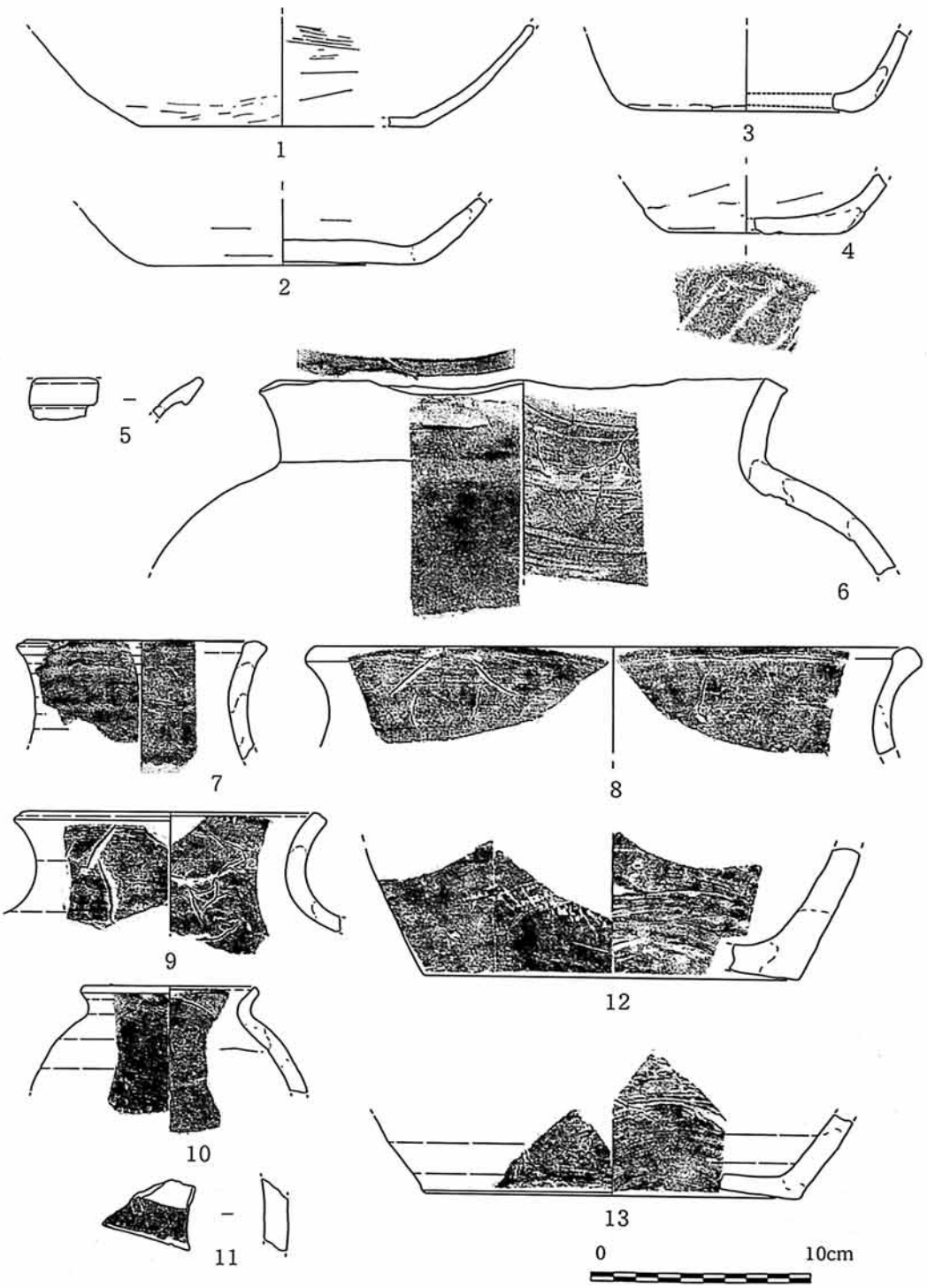
第23表　第Ⅶ層　出土陶磁器観察表(6)



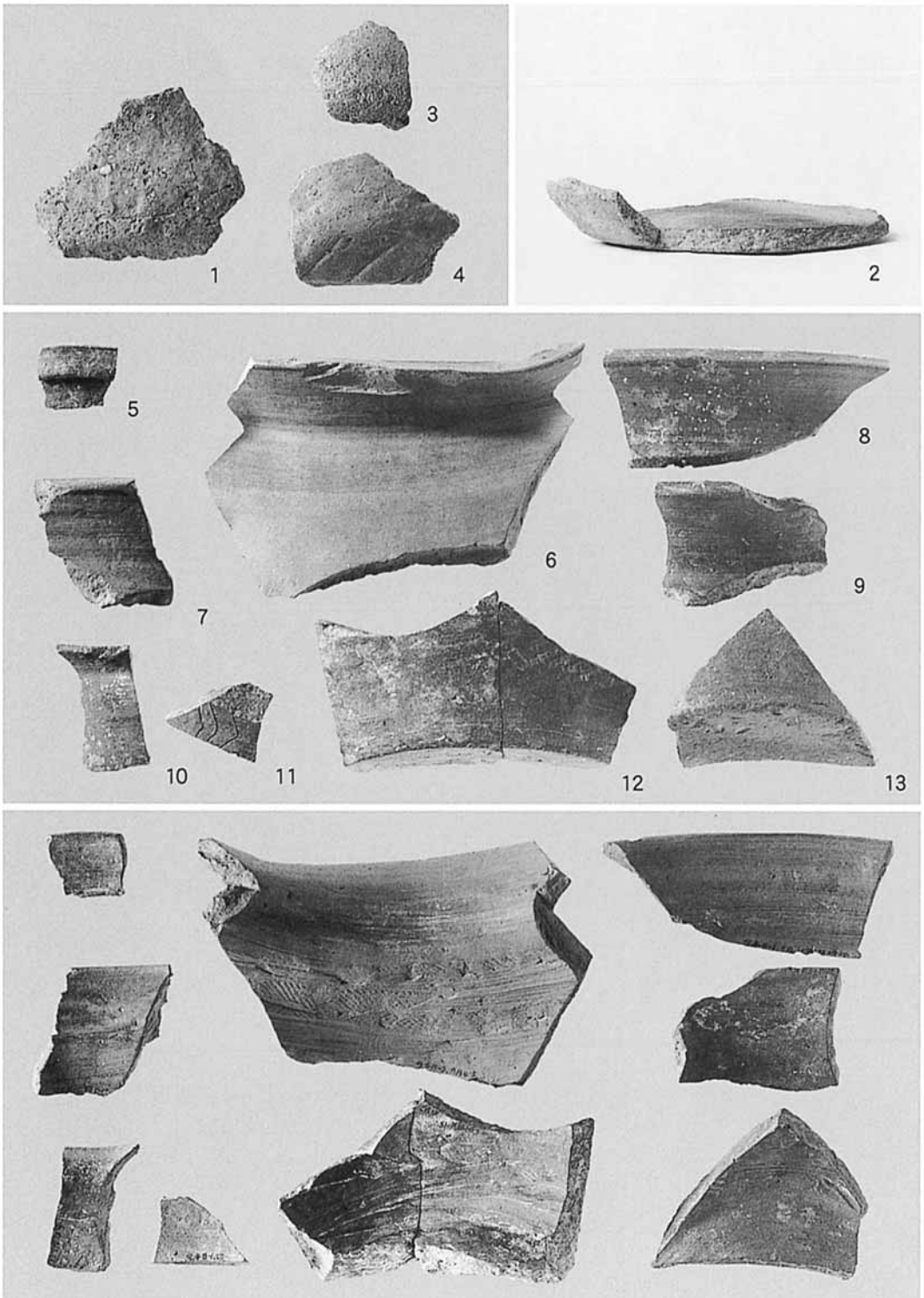
第 22 図 (PL.37)　第Ⅶ層出土土器
1・2. 壺　3・4. 甕　5・6. 鍋　7・8. 碗　9 ～ 12. 底部



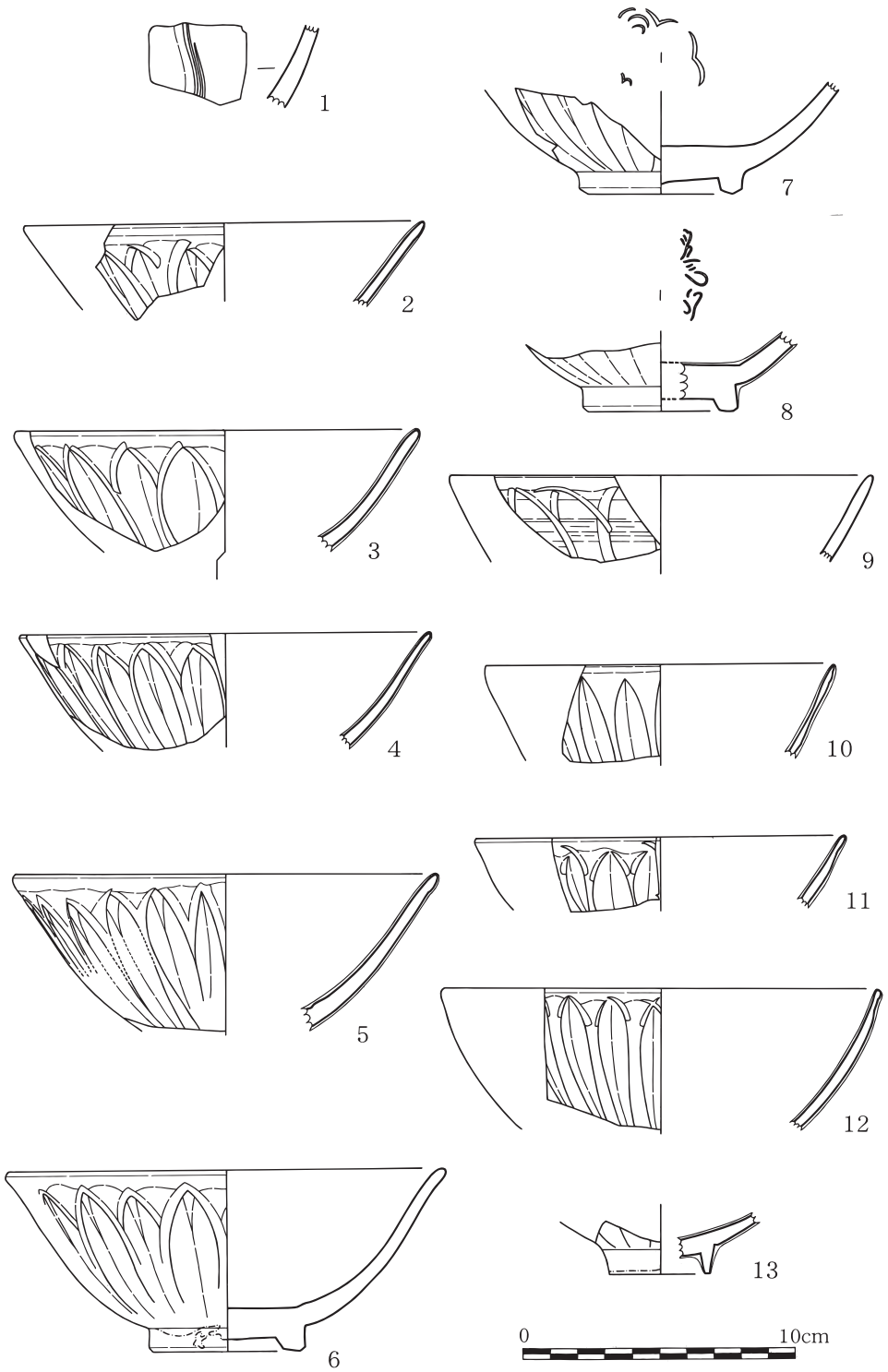
PL.37(第 22 図)　第Ⅶ層出土土器
1・2.壺　3・4.甕　5・6.鍋　7・8.碗　9 ～ 12.底部



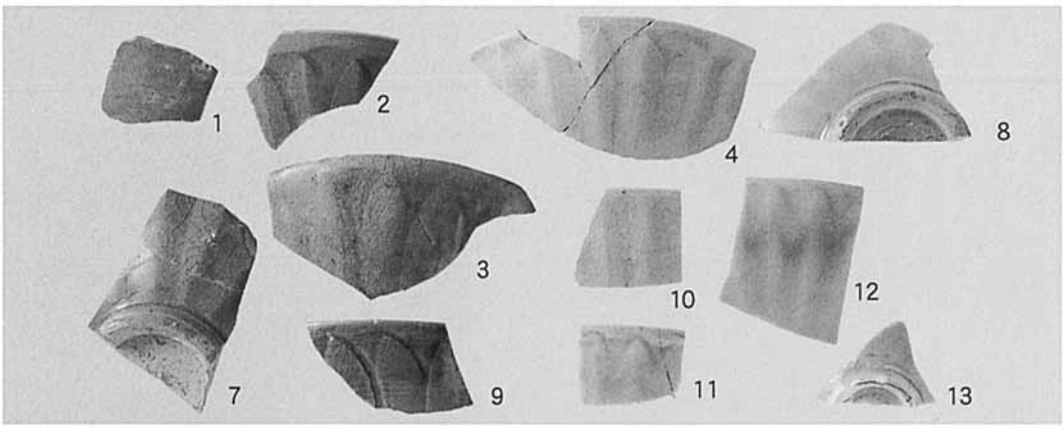
第 23 図 (PL.38)　第Ⅶ層出土土器・カムィヤキ須恵器　1 ～ 4. 土器底部
5 ～ 10. カムィヤキ須恵器　11. 同有文胴部　12・13. 同底部

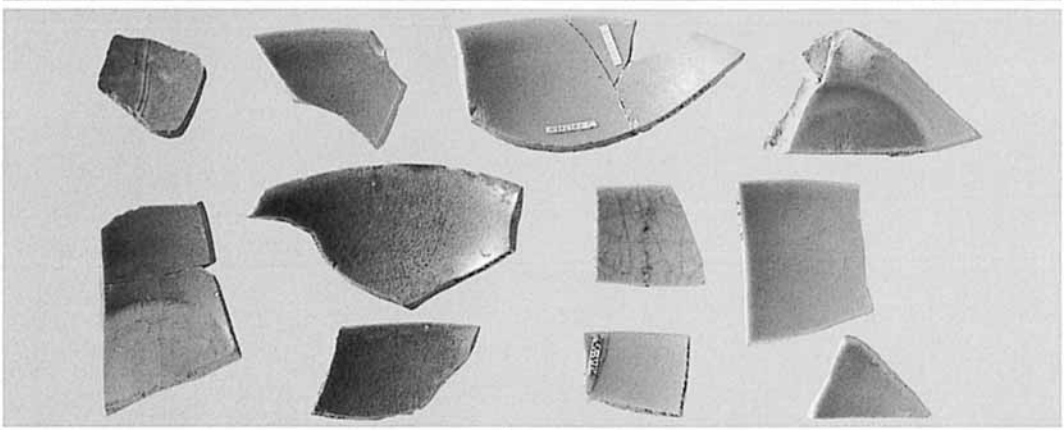


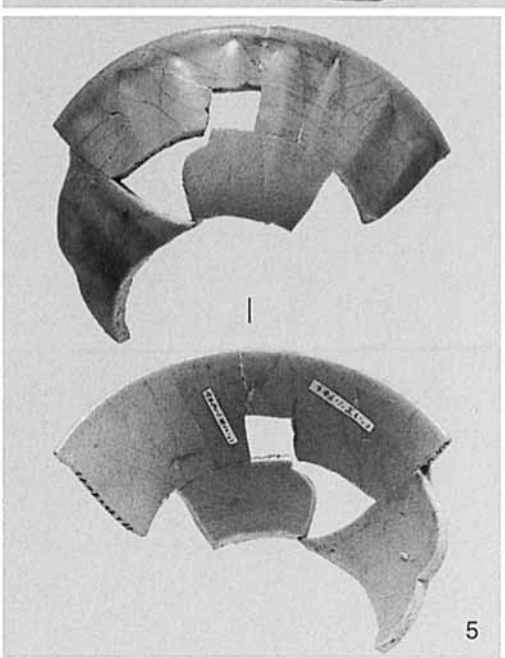
PL.38(第 23 図)　第Ⅶ層出土土器・カムィヤキ須恵器　1 ～ 4. 土器底部
5 ～ 10. カムィヤキ須恵器　11. 同有文胴部　12・13. 同底部

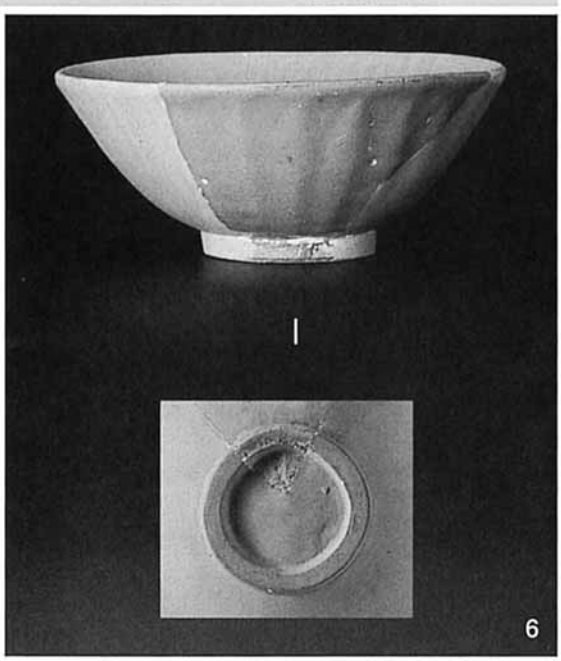


第 24 図 (PL.39)　第Ⅶ層出土青磁碗

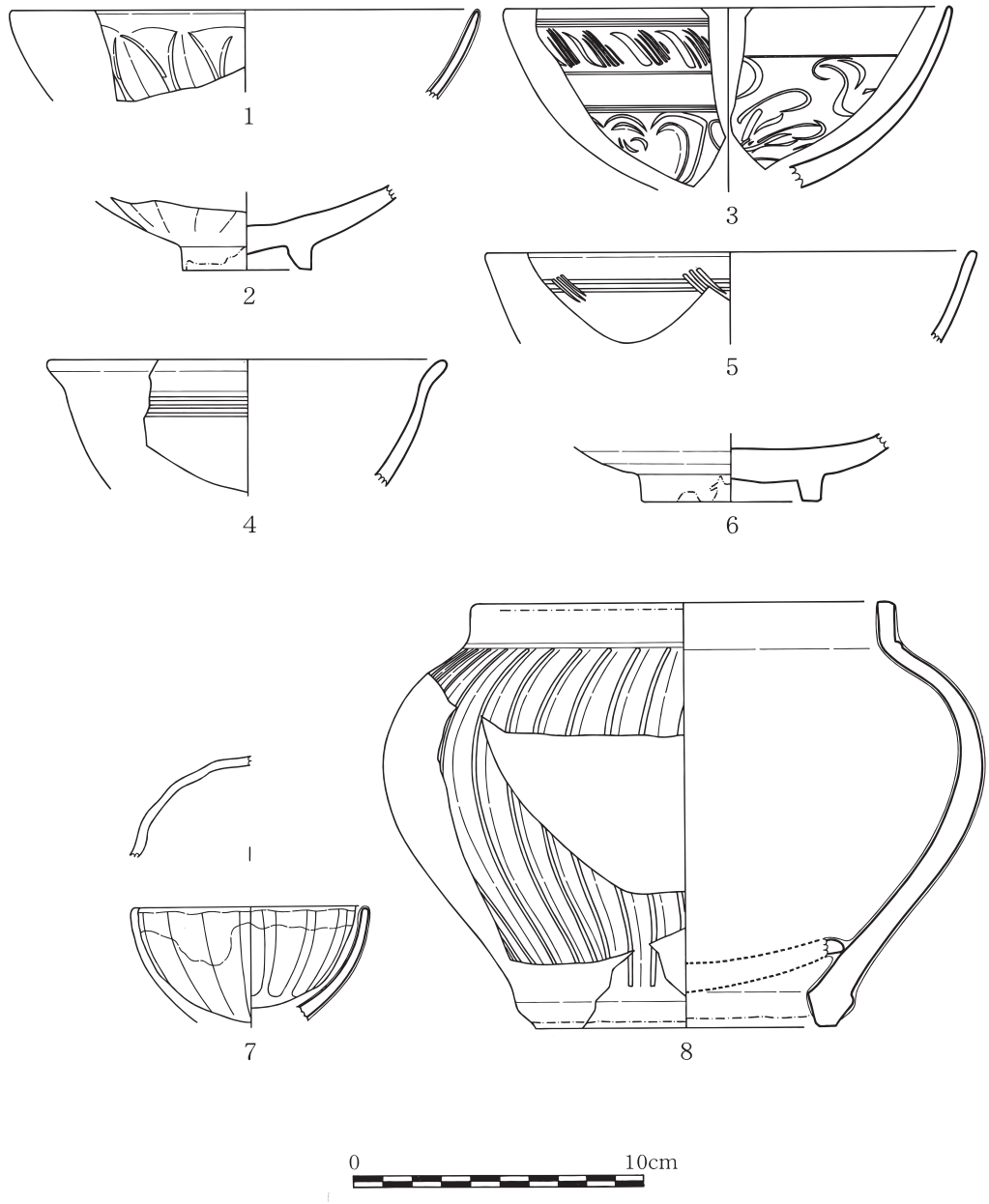




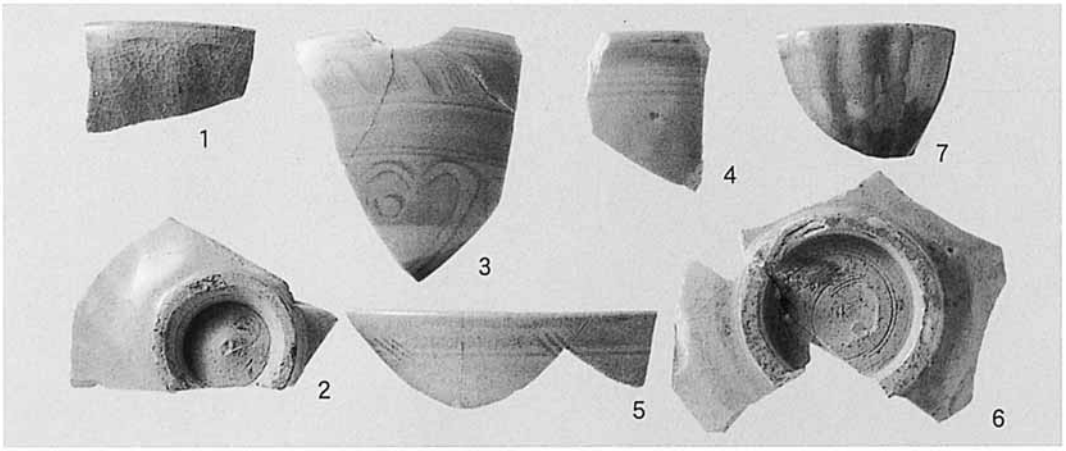


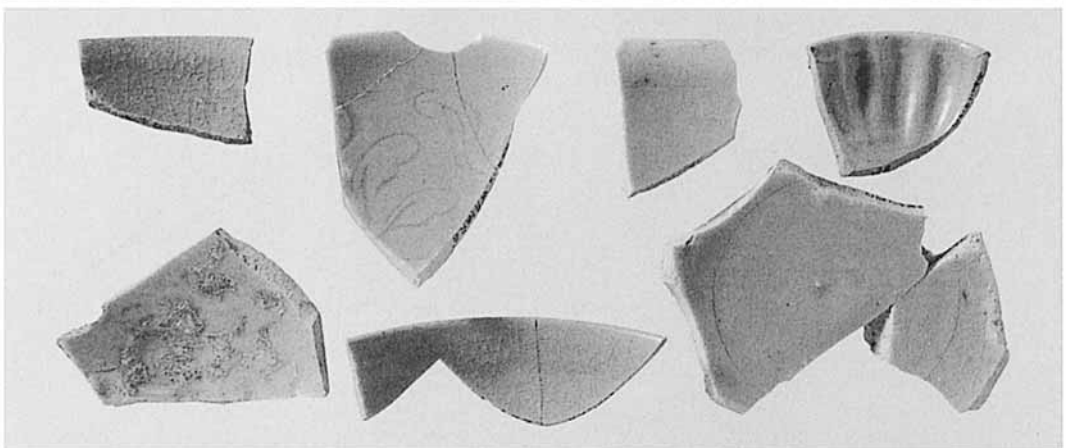


PL.39（第 24 図）　第Ⅶ層出土青磁碗



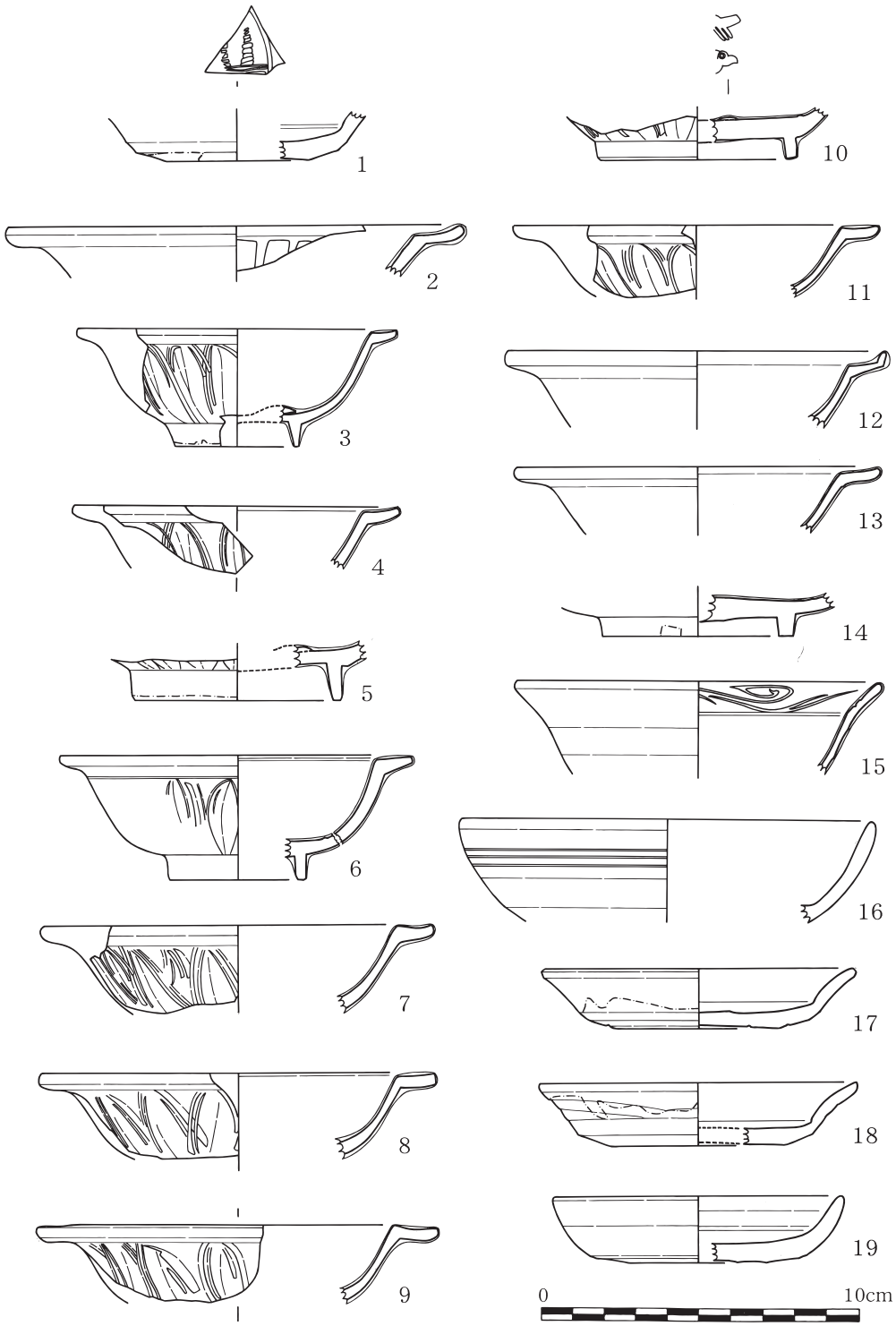
第 25 図 (PL.40)　第Ⅶ層出土青磁
1 ～ 6. 碗　7. 杯　8. 酒会壺



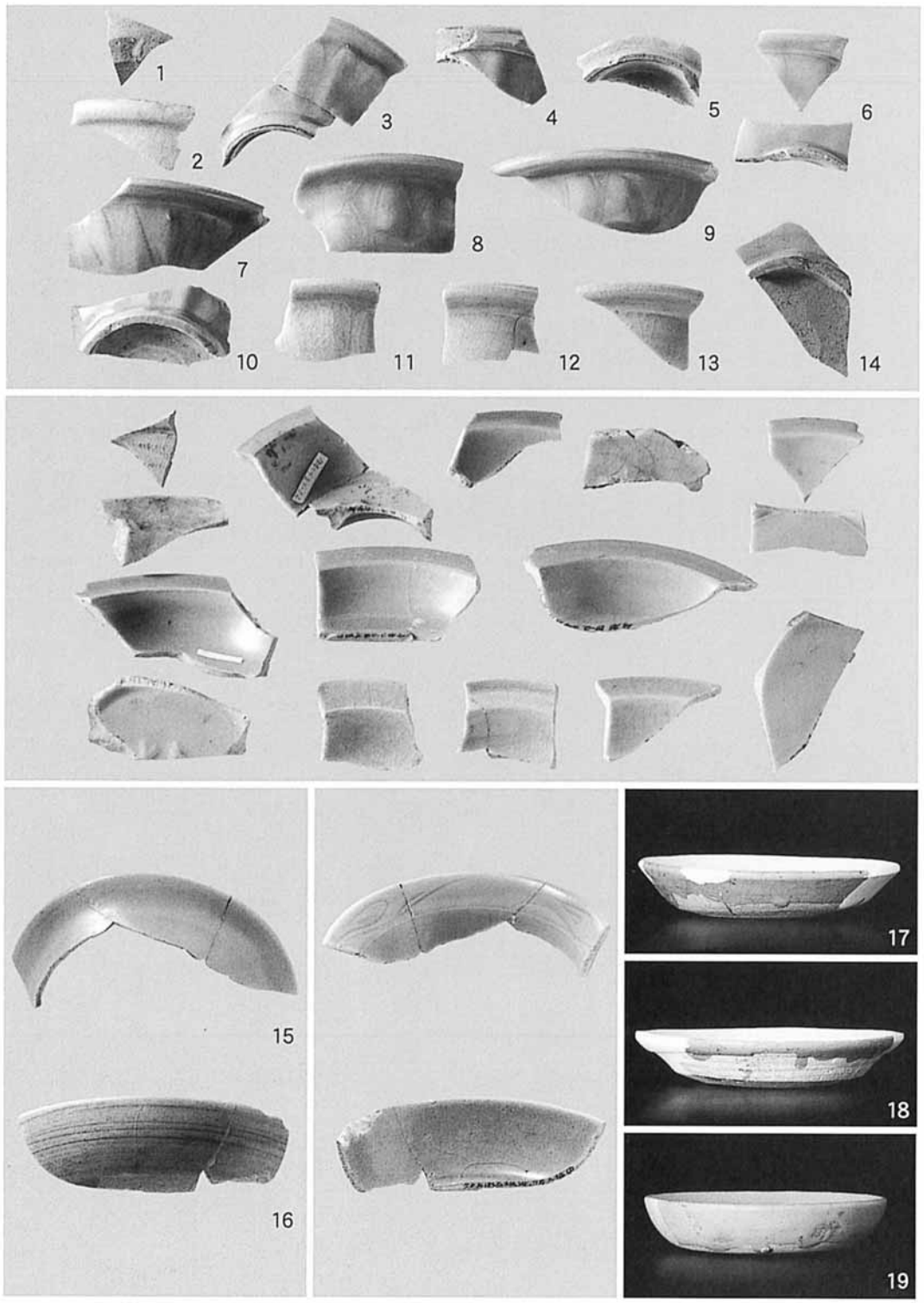




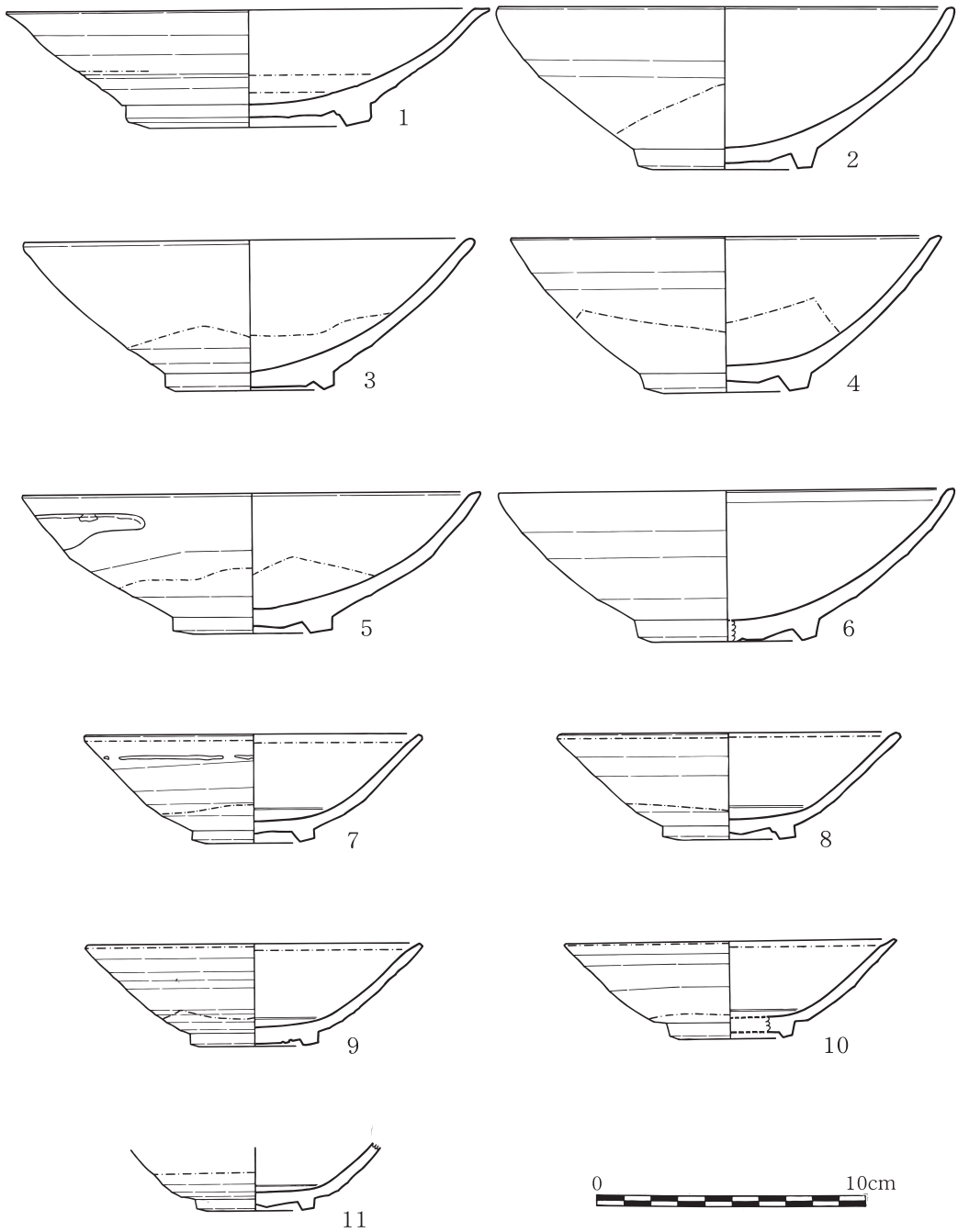
PL.40(第 25 図)　第Ⅷ層出土青磁
1 ～ 6. 碗　7. 杯　8. 酒会壺



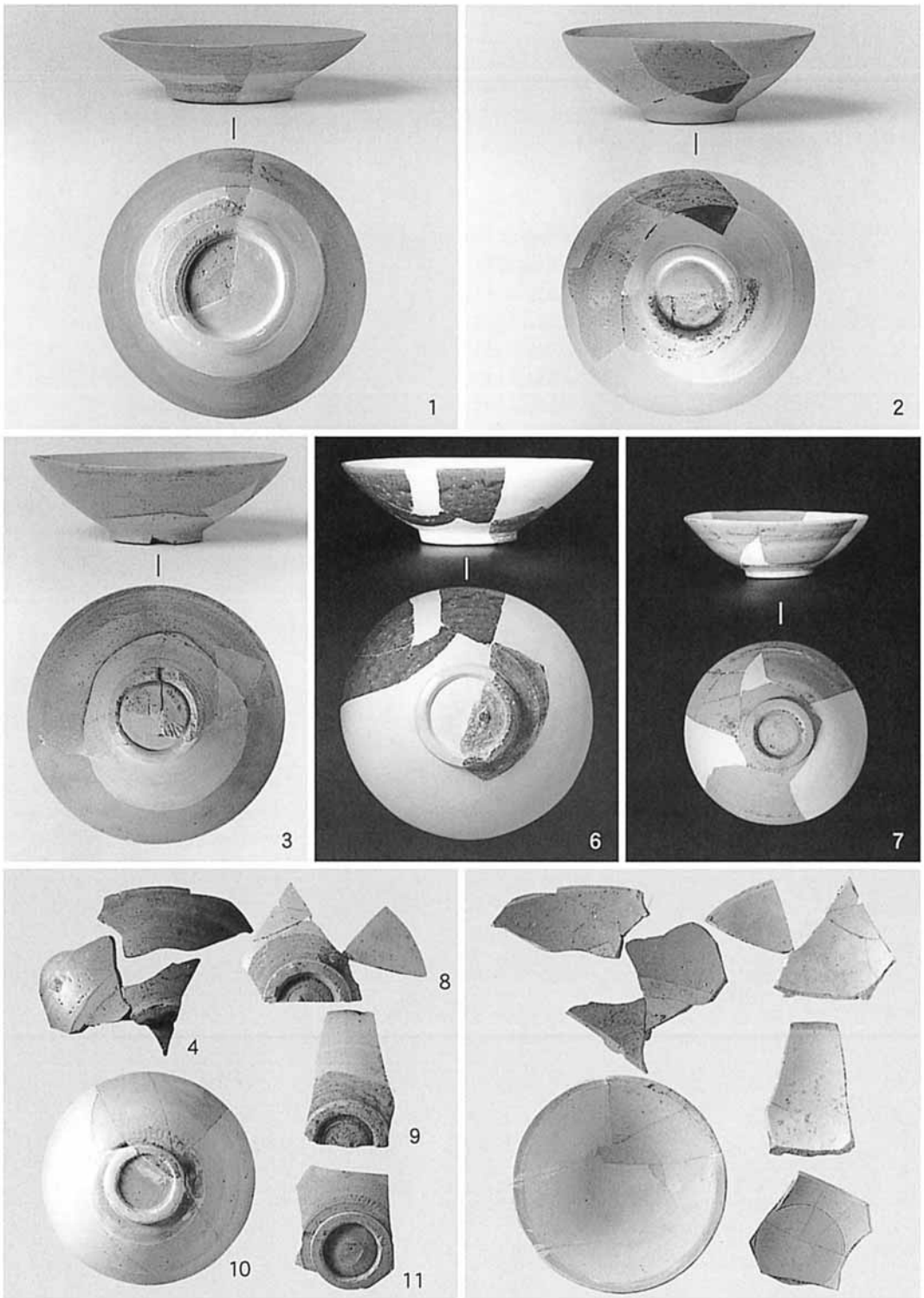
第 26 図 (PL.41)　第Ⅶ層出土青磁皿



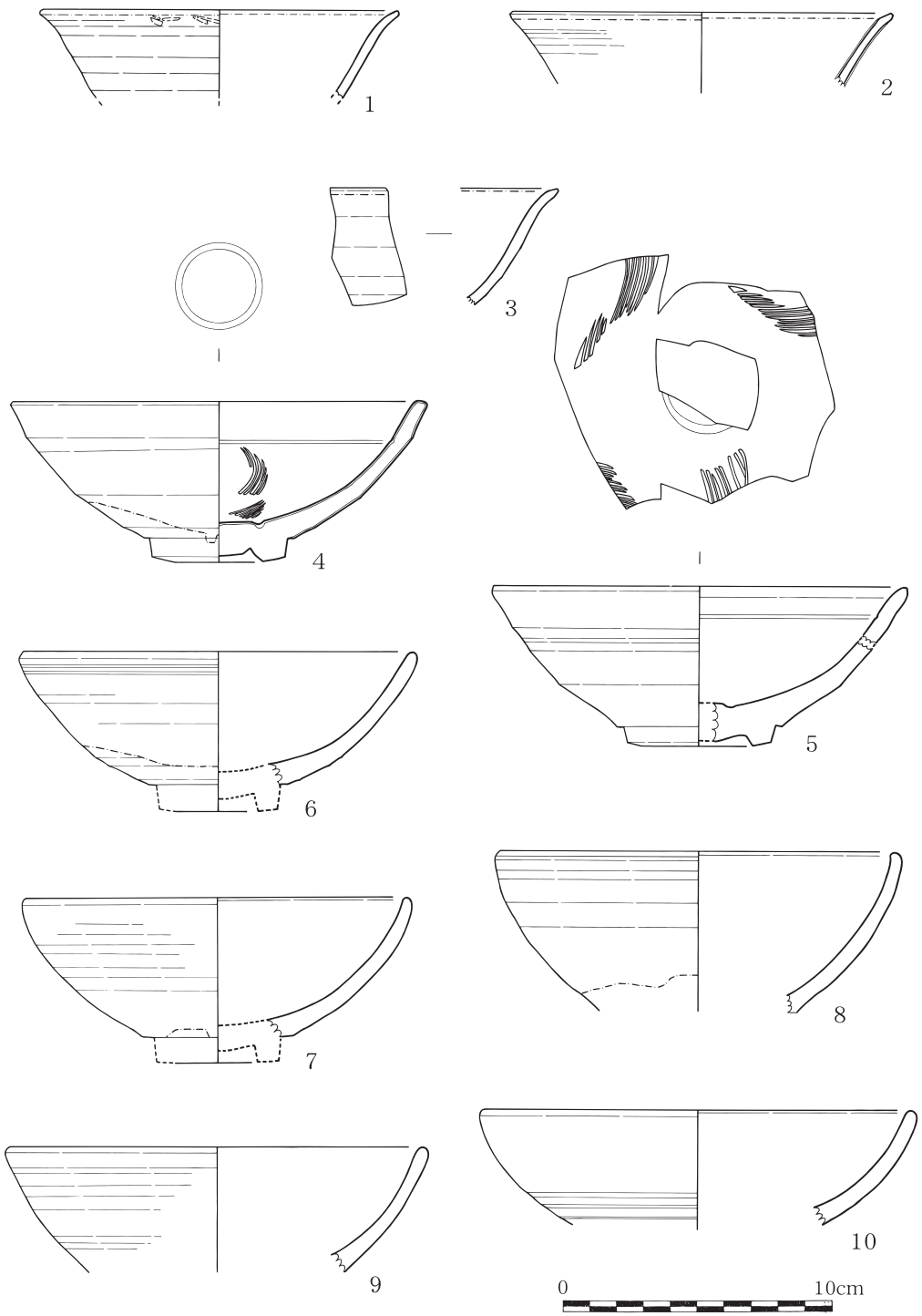
PL.41（第 26 図）　第Ⅶ層出土青磁皿



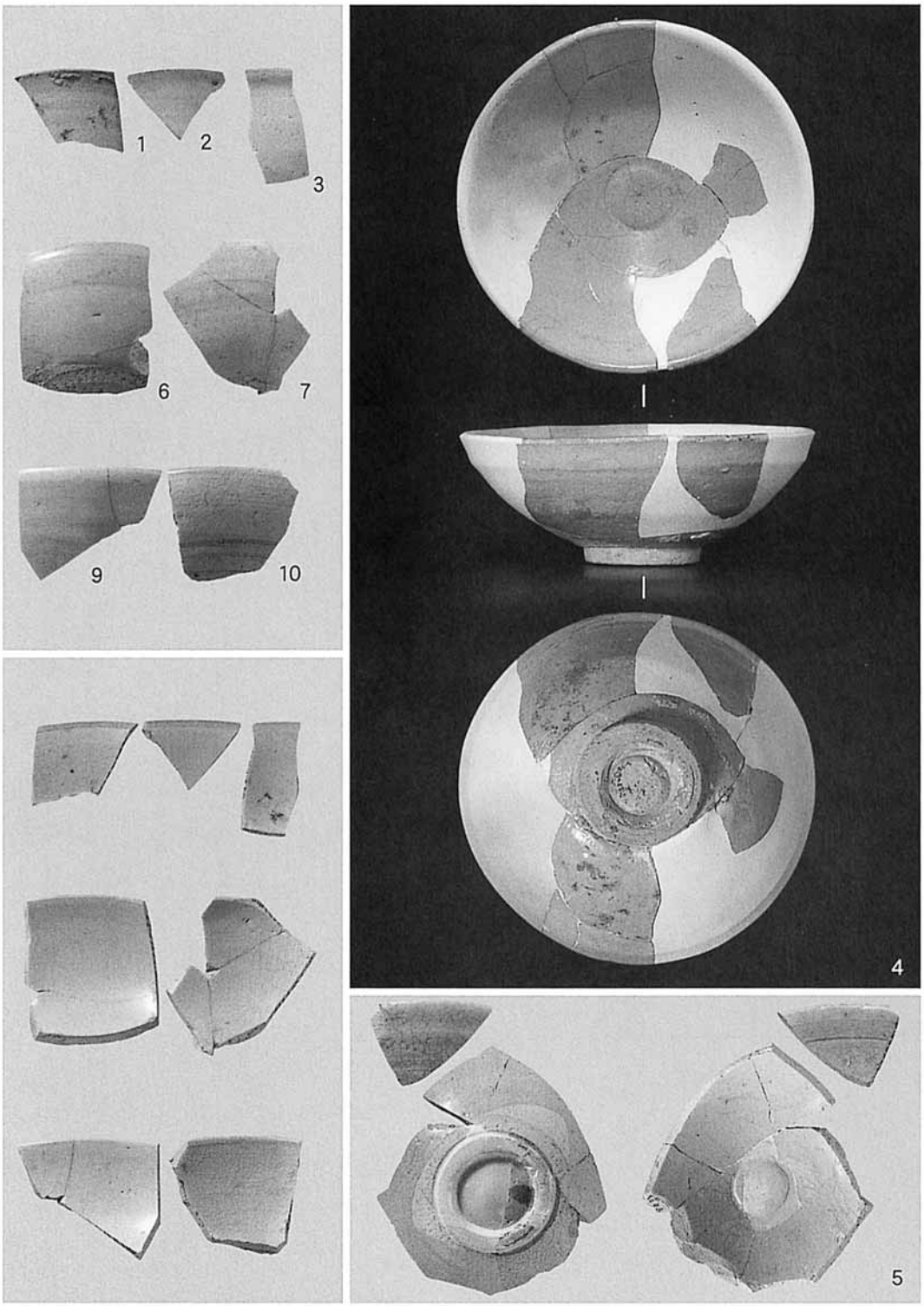
第 27 図 (PL.42)　第Ⅶ層出土白磁碗



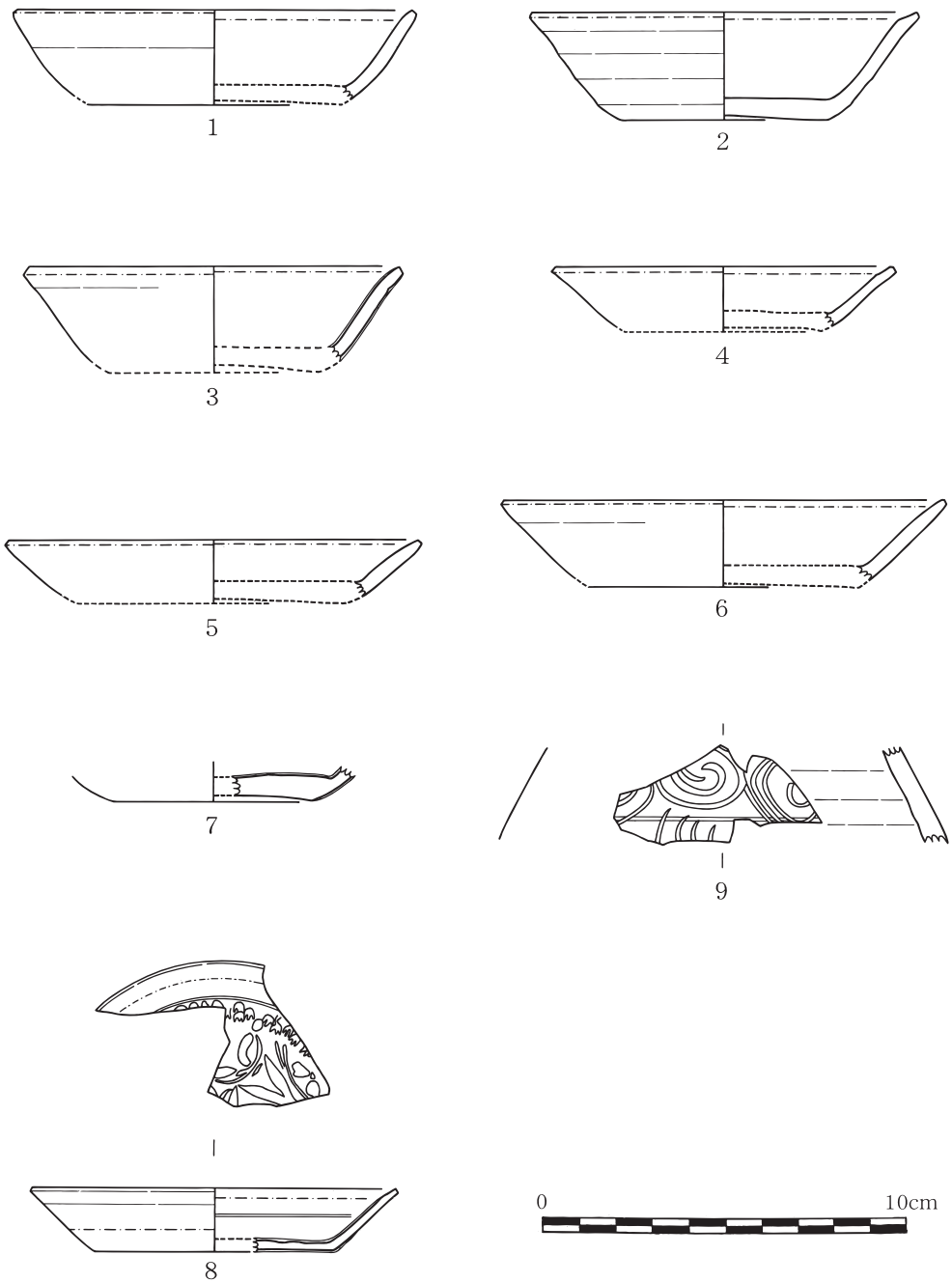
PL.42（第 27 図）　第Ⅶ層出土白磁碗　　（5 は写真割愛）



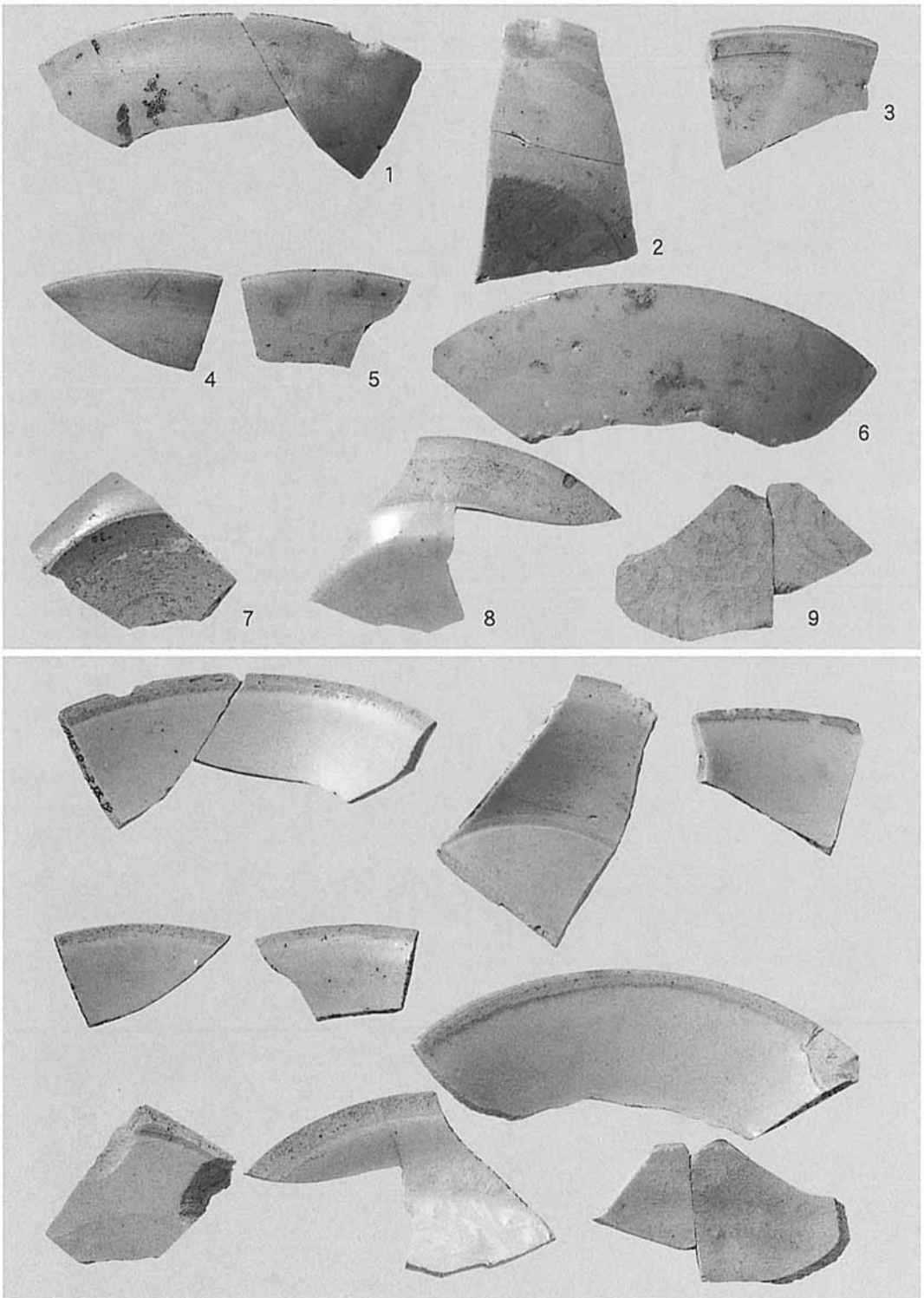
第 28 図 (PL.43)　第Ⅶ層出土白磁碗



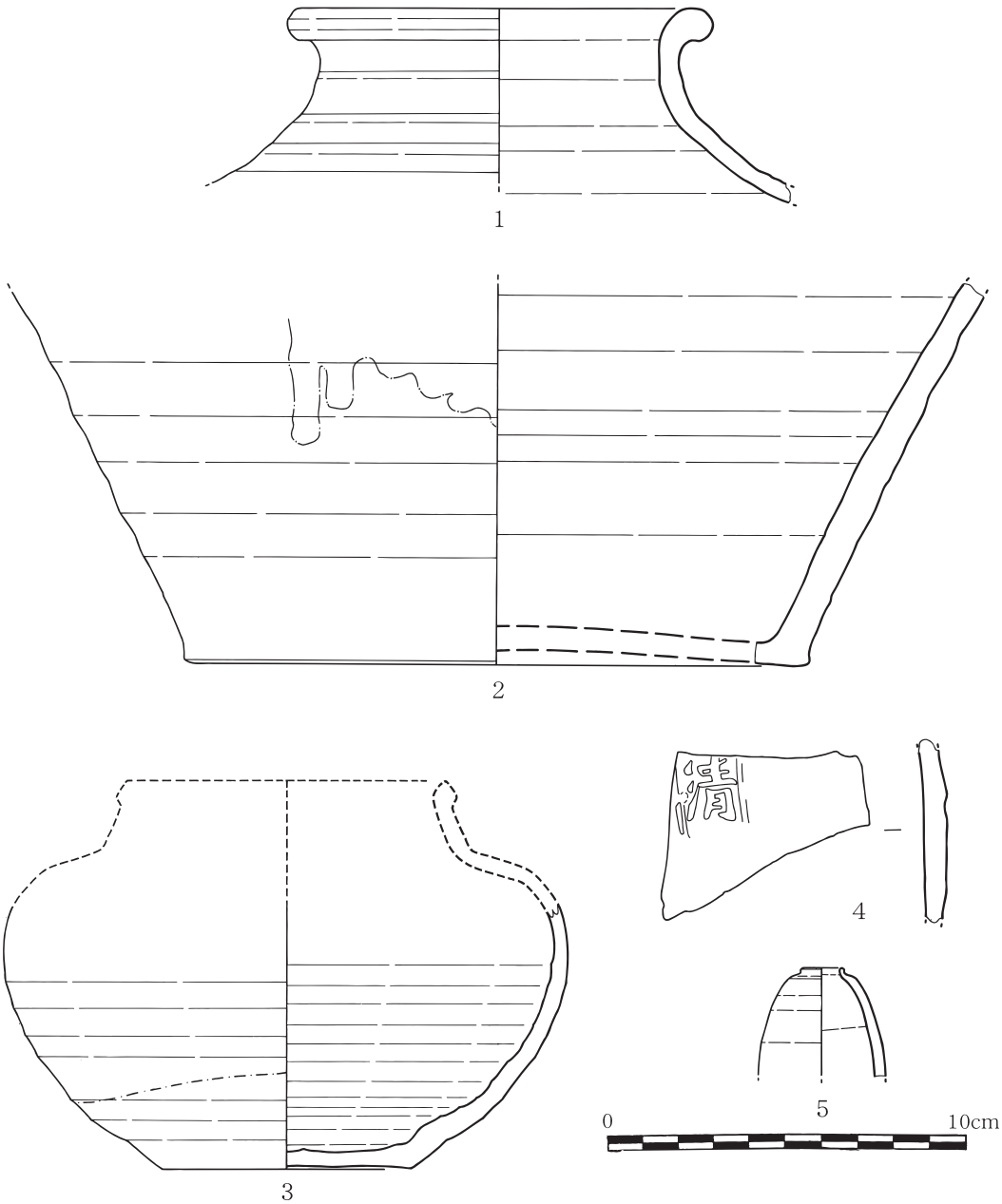
PL.43(第 28 図)　第Ⅶ層出土白磁碗



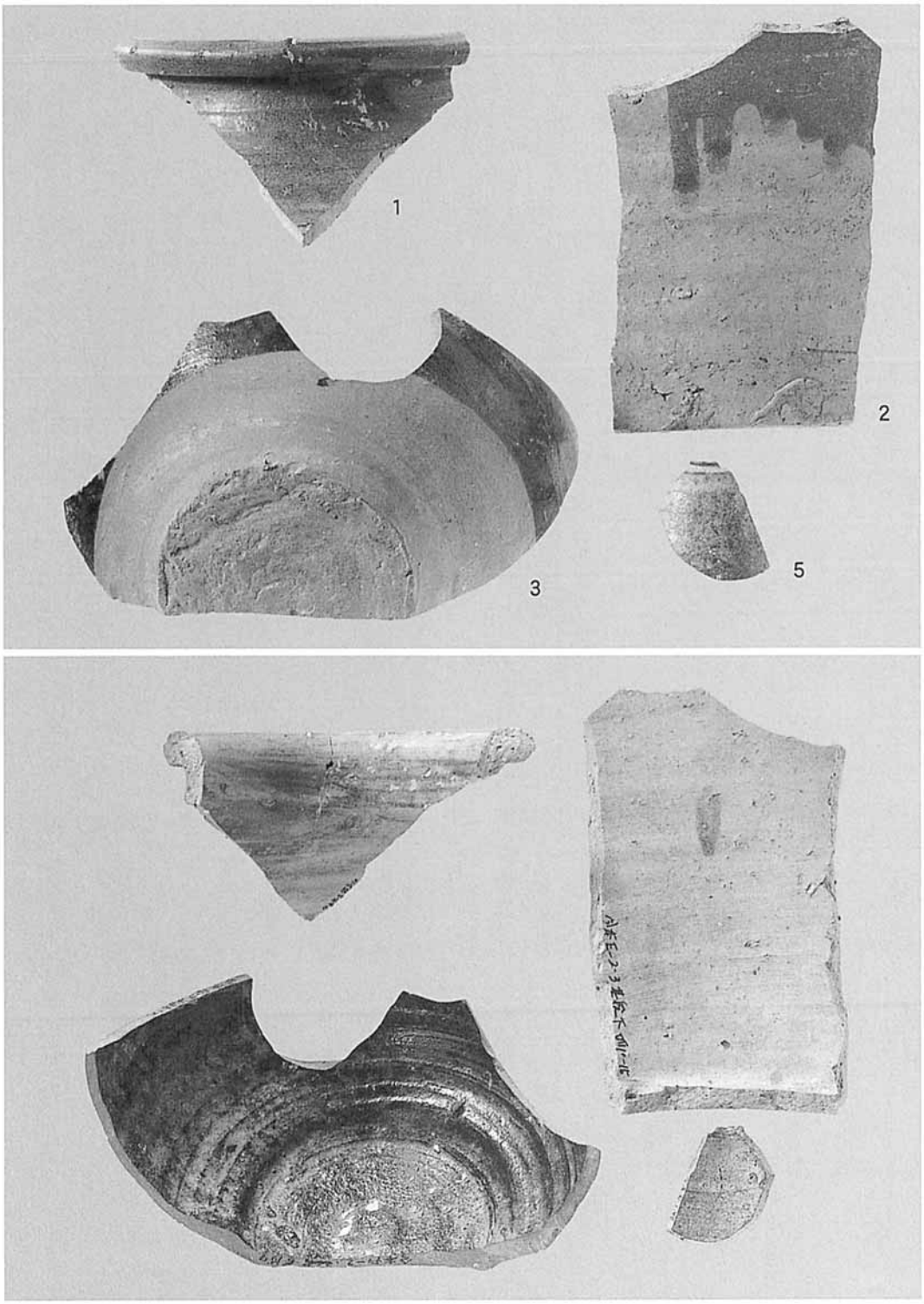
第 29 図 (PL.44)　第Ⅶ層出土白磁・青白磁
1 ～ 7. 白磁皿　8. 青白磁皿　9. 同瓶



PL.44（第 29 図）　第Ⅶ層出土白磁・青白磁
1 ～ 7. 白磁皿　8. 青白磁皿　9. 同瓶



第 30 図 (PL.45)　第Ⅶ層出土褐釉陶器
1. 壺　2 底部　3. 大海茶入　4. 胴部　5. 茶入れ小壺



PL.45（第 30 図）　第Ⅶ層出土褐釉陶器
1. 壺　2 底部　3. 大海茶入　4. 胴部（写真割愛）　5. 茶入れ小壺

④　第Ⅵ層出土の陶磁器

主郭第Ⅵ層は造成層のため出土量は多くない。在地の土器・カムィヤキ須恵器は減少しているようだが、出土量が少ない為判然としない。中国陶磁器のほか高麗青磁が出土する。

土器（第 31 図-1 ～ 6）

壺－第 31 図-1 は壺形ｂ種で口唇は舌状となりナデが丁寧に施される。

甕－同図-3 は甕形ｃ種で内面にはハケメがあり、口縁部が微弱だが肥厚する。

鍋（浅鉢）－同図-2 は内彎する鍋（浅鉢）形土器で体部に指頭圧痕が並ぶ。

碗－同図-4 の碗形の土器は口唇部を先に細く造り全体的に白磁口禿皿の器形に近似することから、模倣土器と推定される。底面には葉脈圧痕が残る。

器種不明－同図 5 ～ 6 は底部資料、器種は不明。

カムィヤキ須恵器（第 31 図 7 ～ 8）

出土数は多くない、いずれも胴部片で、第 31 図-7・8 に 2 点図化した。

青磁（第 32 図-1 ～ 9）

碗－第 32 図-1 は砧系蓮弁文碗で、この第Ⅵ層からは鎬蓮弁文碗は検出されていない。同図-2･3は弦文帯碗で、同図-2は直口口縁で弦文帯の下に2本線による蓮弁文を描いた碗（弦文帯碗ｂ）。同図-3 は外反碗で弦文帯の下に文様がないもの（弦文帯碗ａ）。同図-4 は無文外反碗でＡ窯系の無文外反碗に分類される。同図-6 はＢ窯系の無文外反碗である。

皿－同図-7 は無鎬蓮弁文皿（口折皿Ⅱ群ｂ）で底部資料である。

盤－同図-8 は折縁の盤（折縁盤・鍔縁盤）と推定される胴部破片である。

瓶－同図-9 は櫛描きと篦描きの文様のある瓶の底部資料。

白磁（第 32 図-10 ～ 12）

碗－第 32 図-10 はビロースクタイプ碗ｂ。

皿－同図-11・12 は口禿皿の口縁部資料で、いずれも器高の低い口禿皿ａに該当する。

褐釉陶器（第 32 図-13・14）

壺－第 32 図-14 は褐釉陶器で球胴になる小型の壺で、同図-13 は褐釉の小型壺で精製された胎土でつくられる良品で、いわゆる茶入れ尻張りの底部に該当する資料と推測される。

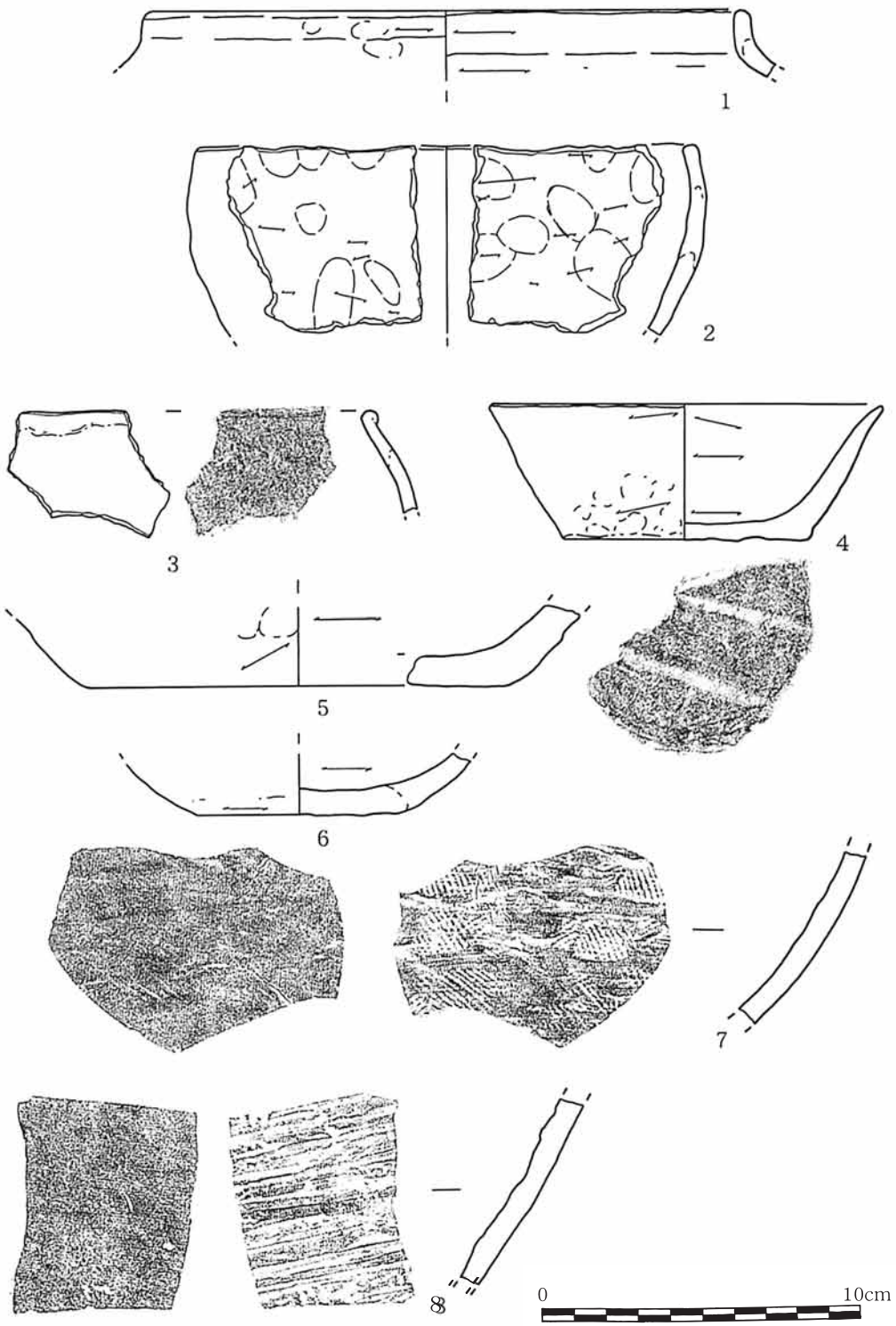
高麗青磁（第 32 図-15）

杯－第 32 図-15 は象嵌青磁八角杯で外体面には稜線に区画文、区画内に花文を、内体面には稜線を区画し口縁直下には雷文、見込みには花文を白・黒色土で象嵌する。

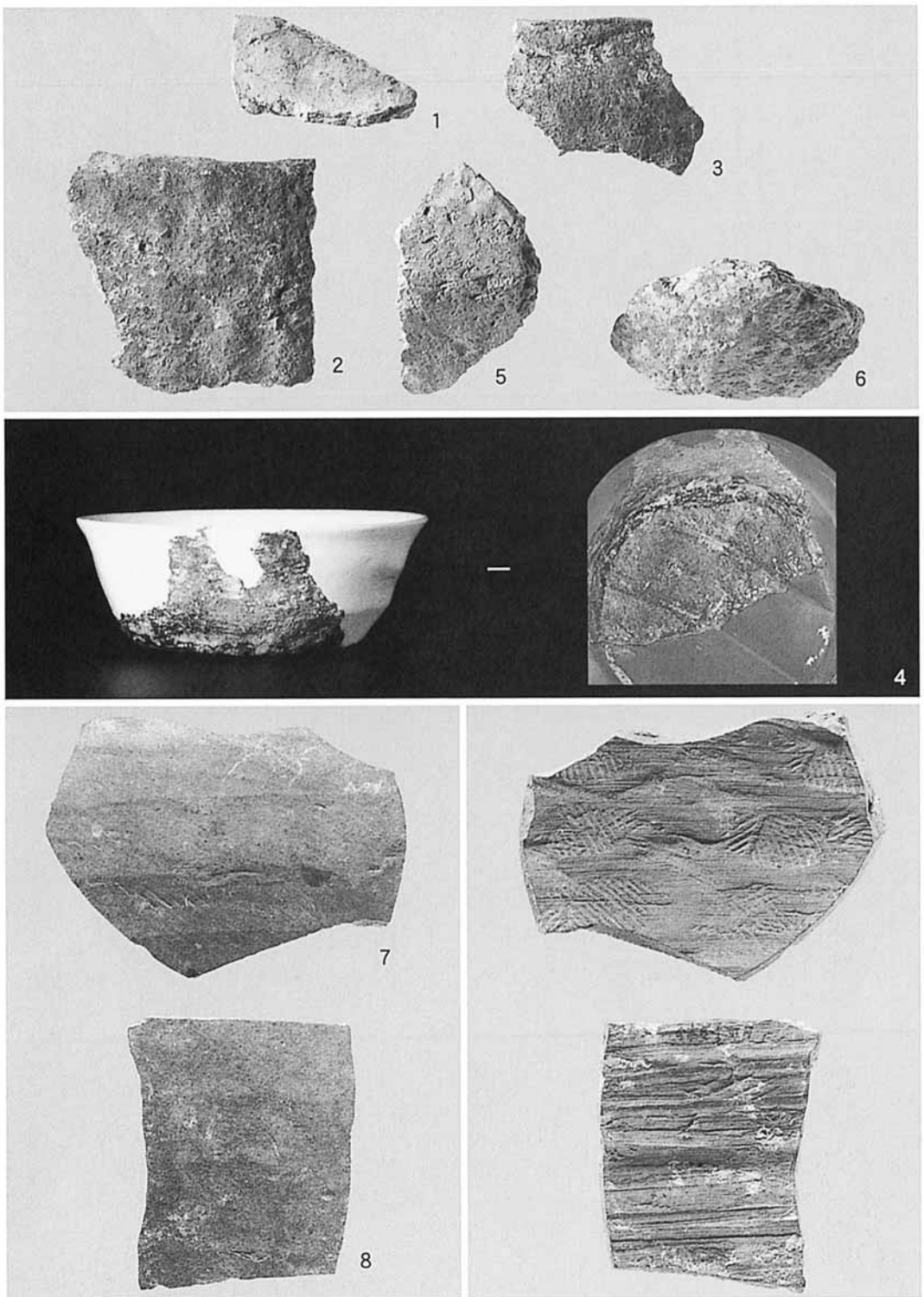
挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第31図 PL.46 1	土器Ⅱ	甕b	口縁部	18.6 － －	内にぶい橙 外橙	泥質。	内外面ともナデ、外面にはわずかに接合痕が表出する。器種は壺になる可能性あり。	B-2	Ⅵ
第31図 PL.46 2	土器Ⅱ	甕c	口縁部	－ － －	内灰 外灰	泥質。	外面荒肌状、内面は浅い縦方向の刷毛目。口縁部は外側に肥厚する。	B-1	Ⅵ
第31図 PL.46 3	土器Ⅱ	鉢形	口縁部	15.6 － －	内明赤褐色 外にぶい赤褐色 （上部黒）	泥質。	内外面ともナデだが比較的雑、外は荒肌状で、口唇部は舌状を成す。	B-1	Ⅵ
第31図 PL.46 4	土器Ⅱ	碗	完形	12.1 4.3 7.6	内暗赤褐色 外橙	泥質。	外面ナデ、外底面・胴下半はナデが徹底せず、立ち上がり部は指頭が並ぶが部分的にヘラナデによって光沢を持つ	B-1	Ⅵ
第31図 PL.46 5	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 13.2	内にぶい黄褐 外橙	泥質。	内面ナデ、一部器表面剥落。外面立ち上がり部ヘラナデ？以外は荒肌状。	B-1	Ⅵ
第31図 PL.46 6	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 6.4	内褐灰 外灰	泥質。	内面ナデ、外面雑なナデ、外底面は荒肌状。	B-1	Ⅵ

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 高台	素地	施釉 （釉色） 貫入	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第32図 PL.47 1	青磁	碗	砧系蓮弁	－ －	白色微粒子	淡青色の厚い透明軸を全面施釉したあと、畳付の釉を掻き取っている。	細い鎬蓮弁文 砧系	E-1	Ⅵ
第32図 PL.47 2	青磁	碗	弦文b	18.0 9.2 5.0	灰白色でやや微粒子	灰青色の薄い透明軸を施釉。高台際から畳付までは露胎。	外体面上部に数本の弦文を廻らし、それを3本斜線で区画。外体面は2本線による幅広の蓮弁を描いている。	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 3	青磁	碗	弦文a	19.3 － －	灰白色でやや微粒子	灰青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。（荒い貫入が全面に見られる。）	数本の弦文帯を廻らし、それを3本斜線で区画。内体面は片切り彫りによる文様。	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 4	青磁	碗	弦文a	16.7 約7.0 5.4	灰色でやや粗粒子	灰青色のやや薄い透明釉内底から高台際まで施釉。高台外面から外底まで露胎。	外体面上部に4本の弦文が廻っている。竹節高台。B窯系	E-1	Ⅵ
第32図 PL.47 5	青磁	碗	無文外反	8.1 5.1 5.0	白色微粒子	青緑色のやや薄い透明釉を施釉。高台外面から外底まで露胎。	なし	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 6	青磁	碗	無文外反	14.5 － －	灰色でやや粗粒子	灰青色の薄い透明釉を内・外面に施釉。（荒い貫入が全面に見られる。）	なし 畳付水平	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 7	青磁	皿	口折Ⅱ	5.4 － －	白色微粒子	青緑色のやや薄い透明釉を施釉。畳付から外底まで露胎。	1本線による無鎬蓮弁文。内底に印花が見られるが明瞭でない。	E-1	Ⅵ
第32図 PL.47 8	青磁	盤	折縁	－ － －	灰色でやや粗粒子	灰青色でやや厚い透明釉。（荒い貫入が部分的に見られる。）	内体面に幅1.5cmの箆描きの蓮弁文。外体面に線描きによる蓮弁文。	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 9	青磁	瓶	底部	－ － 4.8	白色微粒子	青緑色の内面は薄い透明釉。外面は厚い透明釉。高台外面下部から外底までは露胎。（荒い貫入が外体面にみられる）	櫛描きと箆描きの文様が見られる。	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 10	白磁	碗	ピロースタイプ	13.8 － －	黄白色堅くやや微粒	灰白色の釉を内底から外面腰部まで施釉（全体に細かい貫入がみられる）	外面下部に圏線が廻る	B-1	Ⅵ
第32図 PL.47 11	白磁	皿	口禿b	9.8 － －	淡黄白色堅くやや微粒	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉（全体に細かい貫入がみられる）	なし	E-1	Ⅵ
第32図 PL.47 12	白磁	皿	口禿b	8.6 2.5 4.7	淡黄白色堅くやや微粒	灰白色の釉を口縁端部を除き全面に施釉（全体に細かい貫入がみられる）	なし	E-1 土留内	Ⅵ

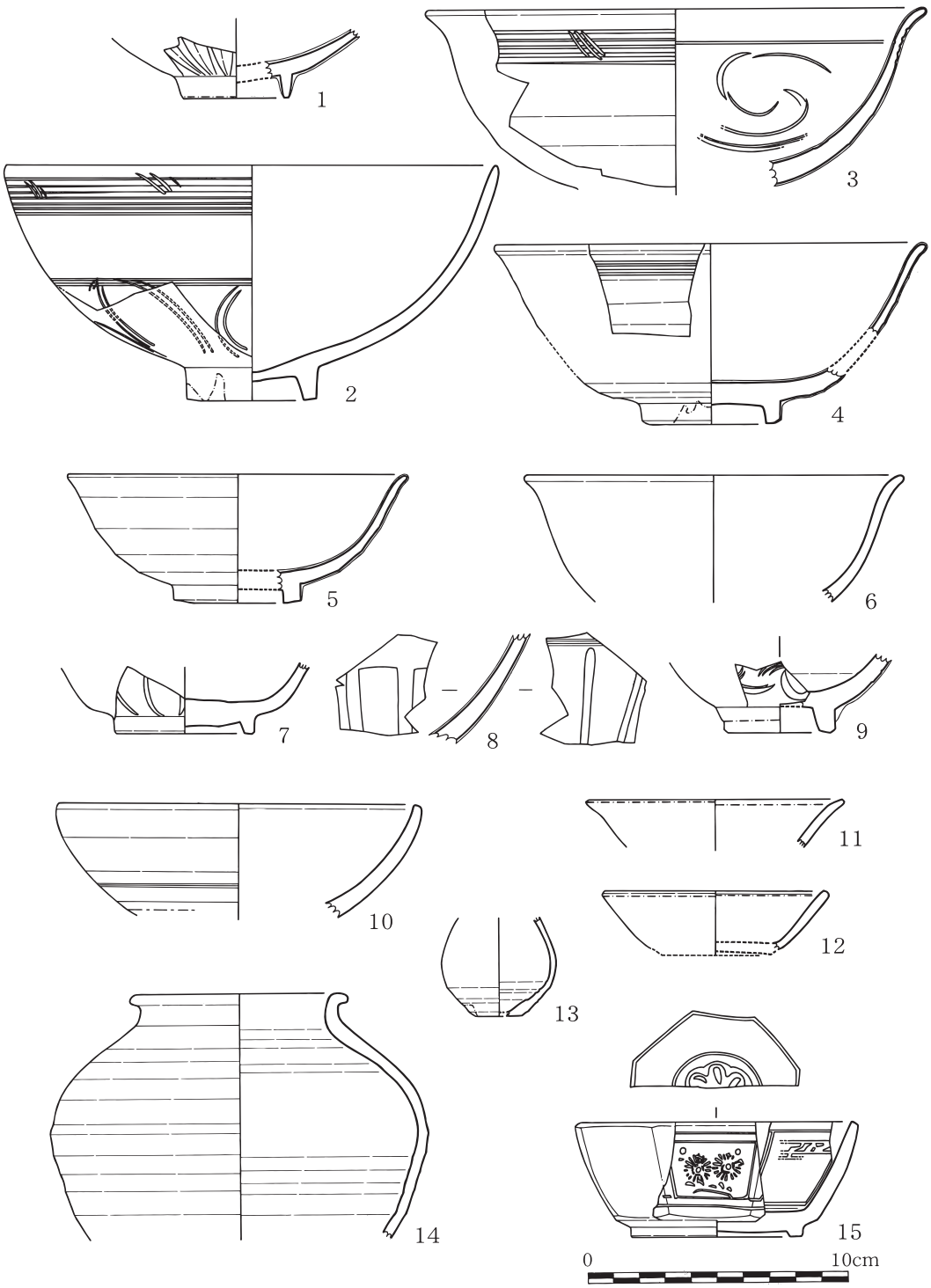
第24表　Ⅵ層　出土陶磁器観察表



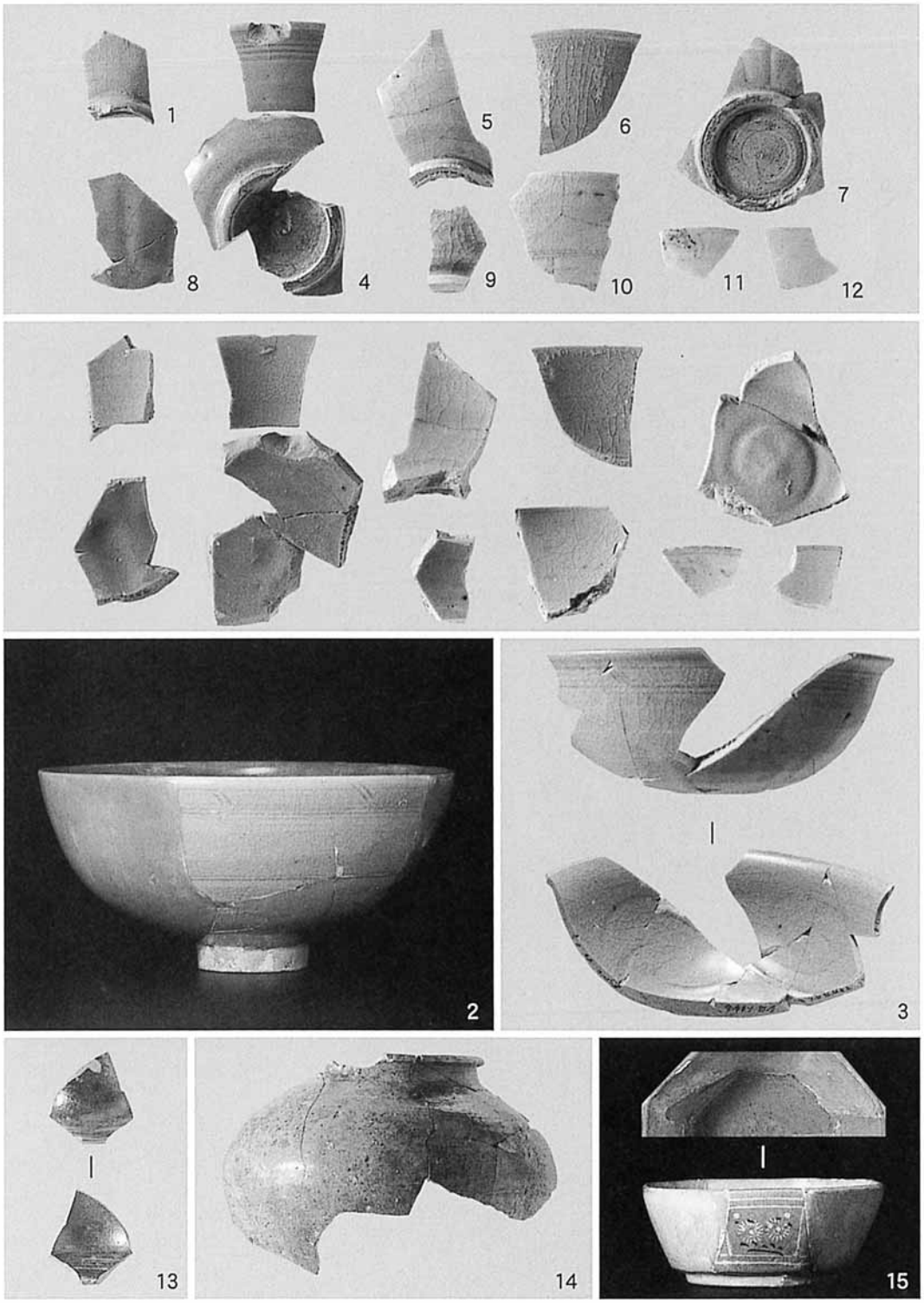
第 31 図 (PL.46)　第Ⅵ層出土土器・カムィヤキ須恵器　1. 土器壺　2. 同鍋　3. 同甕　4. 同碗　5・6. 同底部　7・8. カムィヤキ須恵器胴部



PL.46(第 31 図)　第Ⅵ層出土土器・カムィヤキ須恵器　1. 土器壺　2. 同鍋　3. 同甕
4. 同碗　5・6. 同底部　7・8. カムィヤキ須恵器胴部



第 32 図 (PL.47)　第Ⅵ層出土陶磁器　1～6. 青磁碗　7. 同皿　8. 同盤　9. 同瓶　10. 白磁碗　11・12. 同皿　13・14. 褐釉陶器壺　15. 高麗青磁杯



PL.47(第 32 図)　**第Ⅵ層出土陶磁器**　1 ～ 6. 青磁碗　7. 同皿　8. 同盤　9. 同瓶　10. 白磁碗　11・12. 同皿　13・14. 褐釉陶器壺　15. 高麗青磁杯

⑤　第Ⅴ層出土の陶磁器

主郭第Ⅴ層は中国陶磁器を主体に在地の土器・カムィヤキ須恵器を少量出土。当該期の遺構と目される第２号土坑から一括で青磁碗・皿が出土し注目される。

第２号土坑出土青磁一括（第 33 図）

主郭第Ⅴ層出土陶磁器として第Ⅱ期相当の遺構第２号土坑から検出された青磁碗・皿の一括資料があげられる。出土したのはいずれも青磁で、出土状態は伏せられた状態で碗４つと碗２つが重なりその間に同じように伏せた皿が出土した（PL.23・48）。

碗－第 33 図-1 ～６に図示した碗は口径 16cm 前後、器高 7cm 前後を計る、いずれも腰部に張りがある大振りの外反碗である。施釉は厚みがあり高台脇まで施釉し高台内は露胎にする（無文外反碗ａ）。内面に刻花文を施文するもの（同図-1）、印花文を施すもの（同図-２・3）、十字文を施すもの（同図-4・5）などが見られる。同図-6 の見込み文様は不明瞭で種別は不明。

皿－同図-7 は無鎬蓮弁文皿ａで比較的器高が低く厚い釉を施釉、蓮弁は比較的しっかりとつくる。

包含層出土の陶磁器（第 34 ～ 37 図）

土器（第 34 図-1 ～ 5）

第 34 図-3 は胎土からⅠ群と推測される底部資料である。

壺－同図-2 は壺形ａ種で比較的口縁部を強く外反させる、内面にわずかに刷毛目が残るが丁寧なナデ調整によって調整され均整のとれた器形となる。

鉢－同図-1 内湾させる鍋（鉢）形で口径 24.4cm をはかる。口唇は舌状を成し内外面に指頭を残す。

器種不明－同図-4･5 は底部資料で葉痕を外底面に残す、いずれの器種も碗形と推測される。

カムィヤキ須恵器（第 34 図-6 ～ 11）

壺－第 34 図-6 ～８は壺形土器の口縁部で、６・７は内面が若干凹む壺ｃ、同図-8 は口頸部が直立しナデ肩になる器形で壺ｂに分類される。

器種不明－同図-9 は有文の胴部資料で波状沈文を施す、壺形の胴部と推定される。同図-10・11 は底部資料。

青磁（第 35 図）

碗－第 35 図-1 は鎬蓮弁文碗ａでＡ窯系。同図-2 は外反口縁の弦文帯碗ａでＢ窯系。同図-４は内底が凹む角高台の小碗で箆による細い蓮弁が弁間をもって描かれる。同図-5 は箆彫りの蓮弁文碗で無鎬蓮弁文碗、同図-3 は２叉状の工具による無鎬蓮弁文碗。同図-6 は無文の外反碗でＢ窯系。

皿－同図-7 は口折皿Ⅰ群ａで内体面に幅広単箆による蓮弁文を廻らす。同図-8 ～ 10 は外

体面に比較的鏑の明瞭な蓮弁文を描く、弁の輪郭を２本線で描く。同図-11 は口折皿Ⅰｄで無鏑蓮弁文を細い単篦で描いている。同図-12 は無文の口折皿、口折皿Ⅰ群ｃ。同図-13 は内面有段皿で第Ⅶ層で検出されているもの（第 26 図-15）と類似する。

杯－同図-14 は蓮弁文杯で外体面には線刻蓮弁を、内体面には幅広の篦描き蓮弁を廻らす杯である。同図-15 はべっ甲口杯で口縁部を「くの字」口に屈曲させる特徴がある、底部の形は碁笥底になるものと、小さな高台を持つものの両者が見られる、本資料は後者と考えられる。外体面には弦文と無鏑蓮弁文が廻っている。同図-16 はいわゆる馬上杯（高足杯）である。

白磁（第 36 図）

碗－第 36 図-1 は口禿碗で見込みは凹み、口縁は端反になる、腰下部と高台内、口縁部釉を掻き取り露胎させる口禿碗ｂとした碗で唯一全形の窺える資料である。同図-2 はビロースクタイプ碗ａで、同図-3 ～ 5 はビロースク碗ｂである。同図-6 は幅広の高台に体部が直線的に大きく開く器形で、見込みを輪状に釉を掻き取り外器面腰部まで施釉される（内底無釉碗ｄ）。同図-7・8 は無文外反碗ａで同図-7 は印花文を施す。本層から比較的一定量出土することが確認される。

皿－同図-9・10 は口禿皿で、同図-9 は口縁部、同図-10 は底部の資料全形を伺えない為判別し難いものの口禿皿ａに該当すると考えられる。

瓶－同図-11 は瓶で外面に唐草文を施す。

褐釉陶器（第 37 図）

壺－第 37 図-1・2 両者は同一個体と推定される口縁部（同図-1）・底部（同図-2）資料である。無耳壺の資料で肩部の張りはゆるやかで、底部外面に癒着した痕を残す。同図-6 は四耳壺、同図-7 は長胴壺の底部資料である。同図-3 ～ 5 は茶器類で大海茶入（同図-3）、尻張（同図-4）の茶入壺と推定する。

黒釉陶器（第 37 図）

碗－第 37 図-5 は天目茶碗の底部資料である。

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点 地点	出土地点 層
第33図 PL.48 1	青磁	碗	無文外反碗a	16.2 7.5 6.3	不明	青緑色の厚い釉を内・外面に施釉。(なし) 高台内露胎	内体面を片切彫りによる文様を描き、内底に印花文。	第2号土坑	
第33図 PL.48 2	青磁	碗		15.2 6.3 6.5	不明	青緑色の厚い釉を内・外面に施釉。(なし) 高台内露胎	内底に印花文。	第2号土坑	
第33図 PL.48 3	青磁	碗		16.0 6.7 6.3	不明	青緑色の厚い釉を内・外面 高台内露胎	内底に印花文。	第2号土坑	
第33図 PL.48 4	青磁	碗		15.3 7.2 6.0	不明	青緑色の厚い釉を内・外面に施釉。(なし) 高台内露胎	内底に十字花文。	第2号土坑	
第33図 PL.48 5	青磁	碗		15.6 7.0 6.6	不明	青緑色の厚い釉を内・外面に施釉。(なし) 高台内露胎	内底に十字花文。	第2号土坑	
第33図 PL.48 6	青	碗		14.8 6.6 6.0	不明	青緑色の厚い釉を内・外面 高台内露胎	無文	第2号土坑	
第33図 PL.48 7	青磁	皿	口折皿IIb	11.8 3.7 5.0	不明	青緑色の厚い釉を内・外面に施釉。(なし) 高台内露胎	外体面に連弁文を描く。	第2号土坑	

第25表　第2号土坑出土陶磁器観察表



PL. 48　第2号土坑出土青磁

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径	色調	胎土	調整 備考	出土地点	
								地点	層
第34図 PL.49 1	土器Ⅱ	浅鉢	口縁部	24.4 － －	内にぶい黄褐 外褐灰	泥質。	内外面ともナデが雑で荒肌状を成す。口唇の作りは断面舌状、波状を成す。	E-1	V 0-10
第34図 PL.49 2	土器Ⅱ	壺a	口縁部	12.8 － －	内にぶい橙 外浅黄橙	泥質。	内外ともナデ調整、口唇部断面舌状。	E-1	V 20-30
第34図 PL.49 3	土器Ⅰ	不明	底部	－ － 8.6	内にぶい橙 外橙	泥質。	内外面とも丁寧なナデ、外底面は雑なナデ、くびれは小さい。	D-1	V
第34図 PL.49 4	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 5.2	内明赤褐 外明赤褐	泥質。	内面は丁寧なナデ、外面は雑な調整で、外底面は葉脈痕を残す。	E-1	V 50-40
第34図 PL.49 5	土器Ⅱ	不明	底部	－ － 5.2	内にぶいあか褐色 外にぶいあか褐色	泥質。	内面は丁寧なナデ、これに対して外面は雑。	D-1	V
第34図 PL.49 6	須恵器	壺c	口縁部	22.0 － －	内灰 外灰	微粒子。透明鉱物、褐色粒を少量含む。焼成良好。	内外とも丁寧なナデ、口縁内面に凹み有り。	B-2	V
第34図 PL.49 7	須恵器	壺c	口縁部	14.6 － －	内暗灰 外暗灰	微粒子。白色粒を少量含む。	内外面ともタタキをナデ消す。頸部に縦線が並ぶ。口縁内面凹む。	B-1 E-2	V V
第34図 PL.49 8	須恵器	壺b	口縁部	14.2 － －	内灰 外灰	微粒子。白色粒を少量含む。焼成良好。	内外ともナデ、肩部内面には接合痕が表出する。	(A)-1 B-1	V V
第34図 PL.49 9	須恵器	不明	胴部	－ － －	内灰 外灰	微粒子。白色粒を少量含む。	内面はタタキを凹線状痕で消され、外面は丁寧なナデ調整を施す。波状文が数条めぐる。	(A)-1 F-2 北石沿い	Ⅶ (客土) V Ⅶ 0-5
第34図 PL.49 10	須恵器	不明	底部	－ － 16.0	内暗灰 外暗灰	微粒子。白色粒を少量含む。	内面は荒いタタキをナデ消し、外底面はヘラによるナデ、立ち上がり部はケズリ(同図-8と同一個体？)	B-1 B-1	Ⅵ土留内 V
第34図 PL.49 11	須恵器	不明	底部	－ － 21.0	内暗灰 外暗灰	微粒子。白色粒を少量含む。	内面は荒いタタキをナデ消し、外底面はヘラによるナデ、立ち上がり部はケズリに近い。	B-1 B-1	Ⅳ Ⅵ

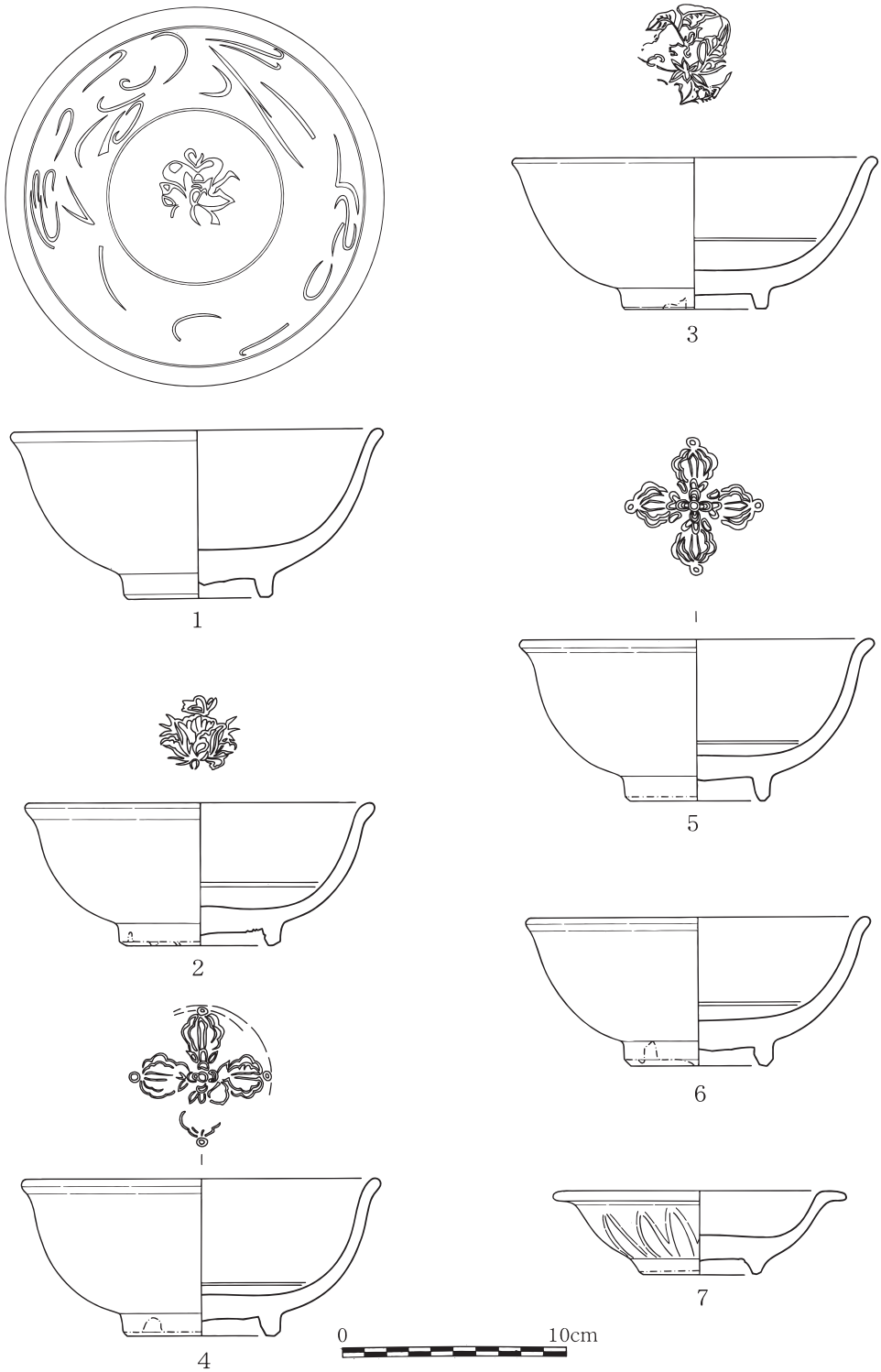
第26表　第Ⅴ層　出土陶磁器観察表(1)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第35図 PL.50 1	青磁	碗	鎬蓮弁	－ － －	白色微粒子	緑青色のやや厚い透明釉を内・外に施釉。(なし)	鎬蓮弁の輪郭を幅広の箆で描いている。	C-1	V
第35図 PL.50 2	青磁	碗	弦文a	12.2 － －	灰色でやや粗粒子	灰青色のやや薄い失透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入が全面に見られる)	４本の弦文を口縁直下に廻らす。内体面上部に１本の圏線B窯系	C-1	V
第35図 PL.50 3	青磁	碗	無鎬蓮弁	13.0 － －	白色微粒子	黄青色のやや薄い透明 釉を内・外面に施釉。(外面荒い貫入。内面細かい貫入)	単箆による蓮弁文。	C-1	V
第35図 PL.50 4	青磁	碗	無鎬蓮弁文a	10.0 4.4 3.1	白色微粒子	黄青色のやや厚い透明釉を内底から高台外面まで施釉。墨付から外底までは露胎。(なし)	片切り彫りによる。蓮弁文。高台が小さく畳付水平内底が凹む。	B-3	V
第35図 PL.50 5	青磁	碗		12.0 5.0 4.0	白色微粒子	灰緑色のやや厚い失透釉を内底から高台外面まで施釉。畳付から内底まで露胎。(細かい貫入が全面に見られる。)	単箆による蓮弁文。畳付水平。	E-2	V
第35図 PL.50 6	青磁	碗	無文外反	14.3 － －	灰白色でやや微粒	青緑色の薄い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入と細かい貫入が全体に見られる。)	無文、B窯系。	基壇の下 E-2	V
第35図 PL.50 7	青磁	皿	口折Ia	10.3 3.4 3.9	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を全面に施釉したあと、畳付の釉を掻き取っている。(荒い貫入が全面に見られる。)	内体面に幅広の単箆による蓮弁文。E-2 Ⅸ層だが、撹乱層であること同一個体がD-1であることを考慮して本層で報告する。	D-2 B-1	V V
第35図 PL.50 8	青磁	皿	口折Ib	12.2 － －	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入が全面に見られる。)	細い鎬蓮弁の輪郭を２本線で描いている。	E-1	V
第35図 PL.50 9	青磁	皿		11.6 － －	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(細かい貫入が全面に見られる。)	細い鎬蓮弁の輪郭を２本線で描いている。	E-3	V
第35図 PL.50 10	青磁	皿		－ － 6.2	灰白色でやや微粒子	黄青色の厚い透明釉を全面施釉したあと、外底釉を蛇の目掻き取りをしている。(なし)	細い鎬蓮弁の輪郭を２本線で描いている。内底に双魚文貼付。	基壇の下 E-2	V
第35図 PL.50 11	青磁	皿	口折Id	12.4 － －	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(細い貫入が内面に見られる	細い単箆による無鎬蓮弁文。	C-1	V
第35図 PL.50 12	青磁	皿	口折Ic	11.6 － －	灰色でやや粗粒子	灰青色のやや厚い透明釉を内・外に施釉。内外面に施釉。(荒い貫入が全面に見られる。)	内底に陽圏線が１本廻っている。B窯系	B-1	V
第35図 PL.50 13	青磁	皿	内面有段	10.5	白色微粒子	緑青色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入が部分的にみられる。)	内面有段に１本の陰圏線を廻らし、その上に唐草文様。	A-1	V
第35図 PL.50 14	青磁	杯	蓮弁文b	10.3 約3.5 約6.5	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(なし)	内体面に幅広蓮弁を、外体面に線彫で２段に区分し蓮弁を廻らす。	C-2	V
第35図 PL.50 15	青磁	杯	べっ甲口	12.0	白色微粒子	青緑色の厚い透明釉を内・外面に施釉。(荒い貫入が全面に見られる)	肩部に３本の弦文を廻らし、その下に肉厚の蓮弁を廻らす。弁の輪郭を単箆で描いている。	C-3 D-2	V
第35図 PL.50 16	青磁	杯	馬上杯	7.8 8.2 3.5	灰褐色でやや微粒子	茶青色のやや厚い透明釉を全面施釉したあと畳付の釉を掻き取っている。(細かい貫入が全面に見られる。)	なし　B-1 Ⅱ 65～70、B-1 Ⅳ	B-1	Ⅱ下 V

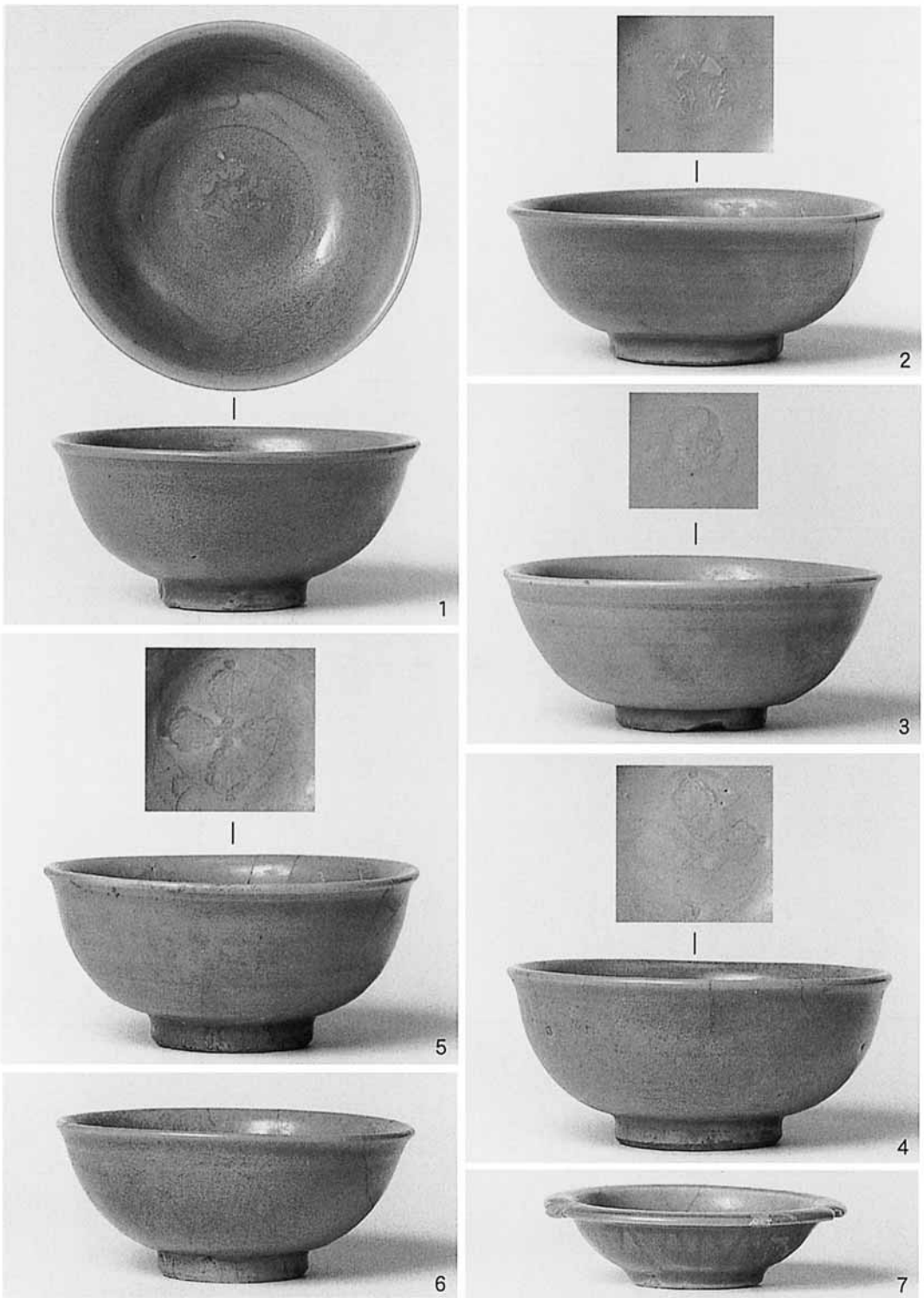
第27表　第Ⅴ層　出土陶磁器観察表(2)

挿図番号 図版番号 枝番号	分類	器種	型式	口径 器高 底径	素地	釉色 施釉 (貫入)	文様 備考	出土地点	
								地点	層
第36図 PL.51 1	白磁	碗	口禿b	15.0 6.4 5.1	白色堅緻	淡緑灰色の釉を施釉口縁端部と外面胴部下位から下は露胎（なし）	内底に陰圏線を一条廻らす B1-Ⅱ下、Ⅳ、V、C1-Ⅳ、V	B-1 C-1	Ⅱ下 V
第36図 PL.51 2	白磁	碗	ピロースクタイプa	14.6 － －	淡灰白色堅くやや粗粒気泡有り	灰白色の釉を施釉（なし）	内面上部には陰圏線が一条廻り下部には櫛目による櫛描文を施す	C-2	V
第36図 PL.51 3	白磁	碗	ピロースクタイプb	17.0 6.1 5.0	白色堅緻気泡多し	淡灰白色の釉を内底から外面胴部下位まで施釉（なし）	無文	C-1	V
第36図 PL.51 4	白磁	碗		15.6 5.8 5.6	淡灰白色堅くやや粗粒気泡あり	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（なし）	無文	－	V
第36図 PL.51 5	白磁	碗		15.5 6.5 5.8	淡灰白色堅くやや粗粒気泡あり	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（なし）	無文	(A)-1 C-3	V V
第36図 PL.51 6	白磁	碗	今帰仁	18.3 6.5 7.6	灰色堅緻	灰色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉内底の釉は蛇の目に掻き取る（部分的に細い貫入がみられる）	内底には目跡がみられる	B-3	V
第36図 PL.51 7	白磁	碗	無文外反碗a	17.2 7.1 5.9	灰白色堅くやや微粒子	灰白色の釉を内底から外面胴部中位まで施釉（前面に貫入がみられる）	内底に陰圏線を一条廻らし、その中に印花文を施す	C-1 D-1	Ⅳ V
第36図 PL.51 8	白磁	碗		17.5 6.6 5.5	淡黄白色堅くやや微粒	淡緑灰色の釉を内底から外面胴中位まで施釉（全面に貫入がみられる）	内底に陰圏線を廻らし、その中に印花文を施す	B-1 C-1	Ⅱ～ V
第36図 PL.51 9	白磁	皿	口禿	10.0 － －	灰白色堅くやや微粒	灰白色の釉を施釉口縁端部は露胎（なし）	無文	B-1	V
第36図 PL.51 10	白磁	皿	口禿	－ － 6.2	黄白色堅くやや微粒気泡有り	灰白色の釉を施釉外底面の施釉は不均等（全面に細かい貫入がみられる）	無文	E-2	V
第36図 PL.51 11	白磁	瓶		－ － －	淡黄白色堅くやや粗粒気泡多し	灰白色の釉を施釉（全面に細かい貫入がみられる）	外面に唐草文を施す	C-3	V
第37図 PL.52 1	褐釉	壺		13.9 － －	淡灰褐色でやや粗粒	淡黒褐色釉を内、外面に施釉	なし	C-1 B-1	V
第37図 PL.52 2	褐釉	壺		－ － 16.8	〃	〃	なし	B-1	V
第37図 PL.52 3	褐釉	壺		7.4 約8.2 約5.7	紫黒色で微粒子。水簸された素地	黒褐色釉を施釉	なし 大海茶入	B-3	V
第37図 PL.52 4	褐釉	壺		2.4 － －	〃	黒褐色釉を内面頸部から外面にかけて施釉	なし 茶入	C-1	V
第37図 PL.52 5	黒釉	碗		－ － 4.0	灰褐色でやや微粒	黒色の厚い釉を施釉	なし 天目茶碗	B-1	V
第37図 PL.52 6	褐釉	壺		12.0 － －	灰褐色でやや粗粒	灰褐色を内、外面に施釉薬	なし	B-1 C-1	V
第37図 PL.52 7	褐釉	壺		－ － 5.6	紫黒褐色で微粒子	淡黒褐色釉を内、外面に施釉。外底のみ露胎	なし	D-3 E-2	V Ⅸ

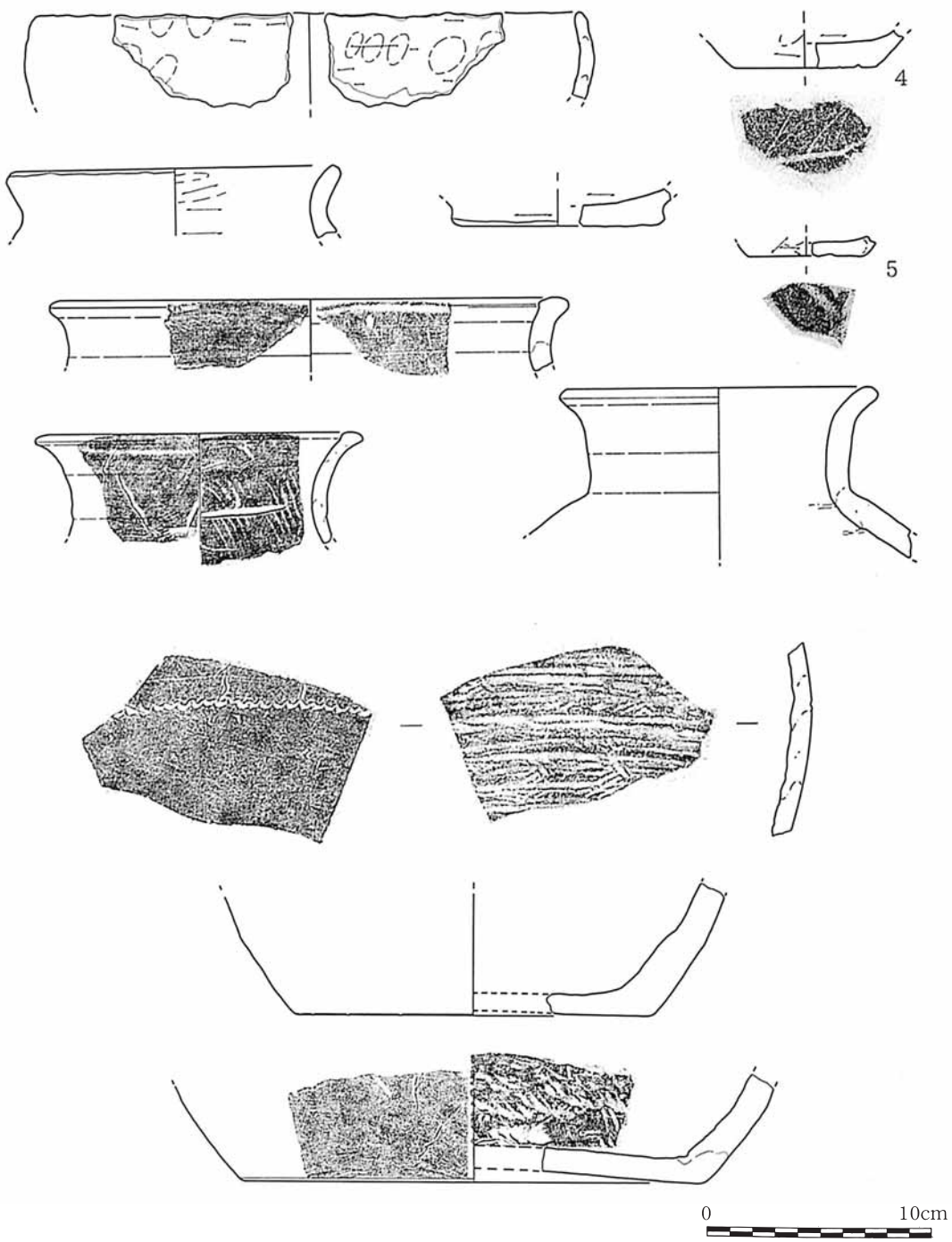
第28表　第Ⅴ層　出土陶磁器観察表(3)



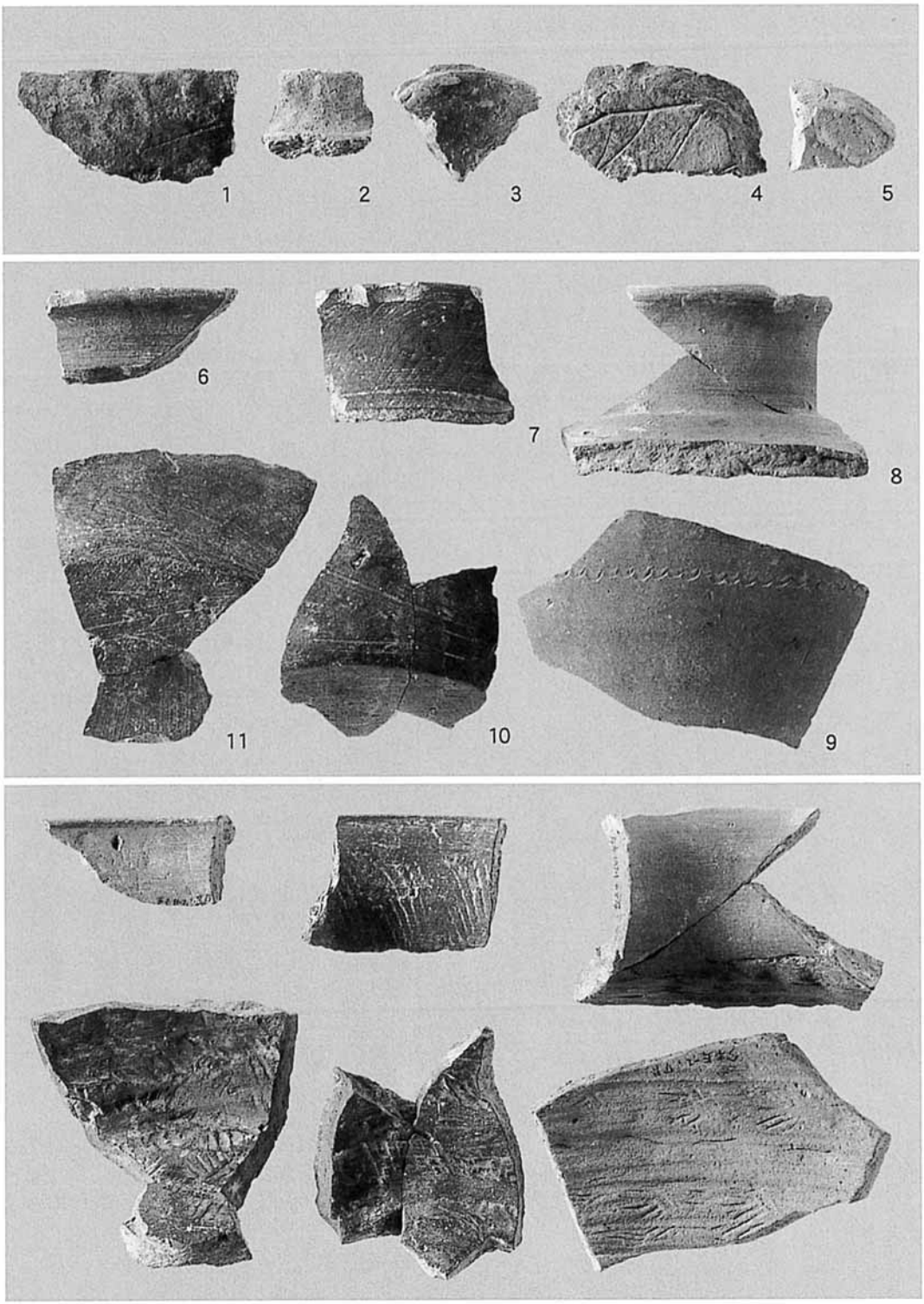
第 33 図 (PL.48)　第 2 号土坑出土青磁
1 ～ 6. 碗　7. 皿



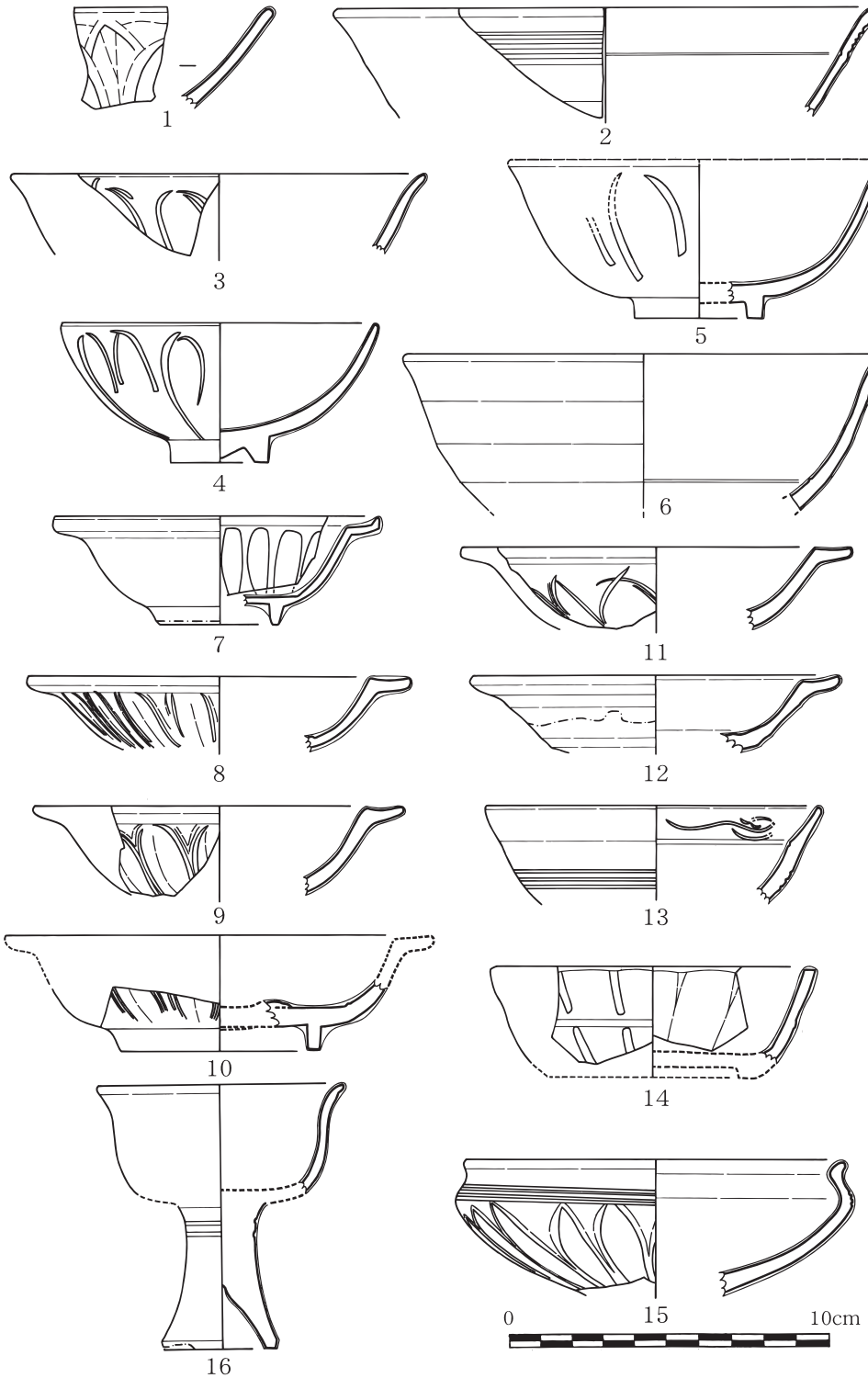
PL.48(第 33 図)　第 2 号土坑出土青磁
1 ～ 6. 碗　7. 皿



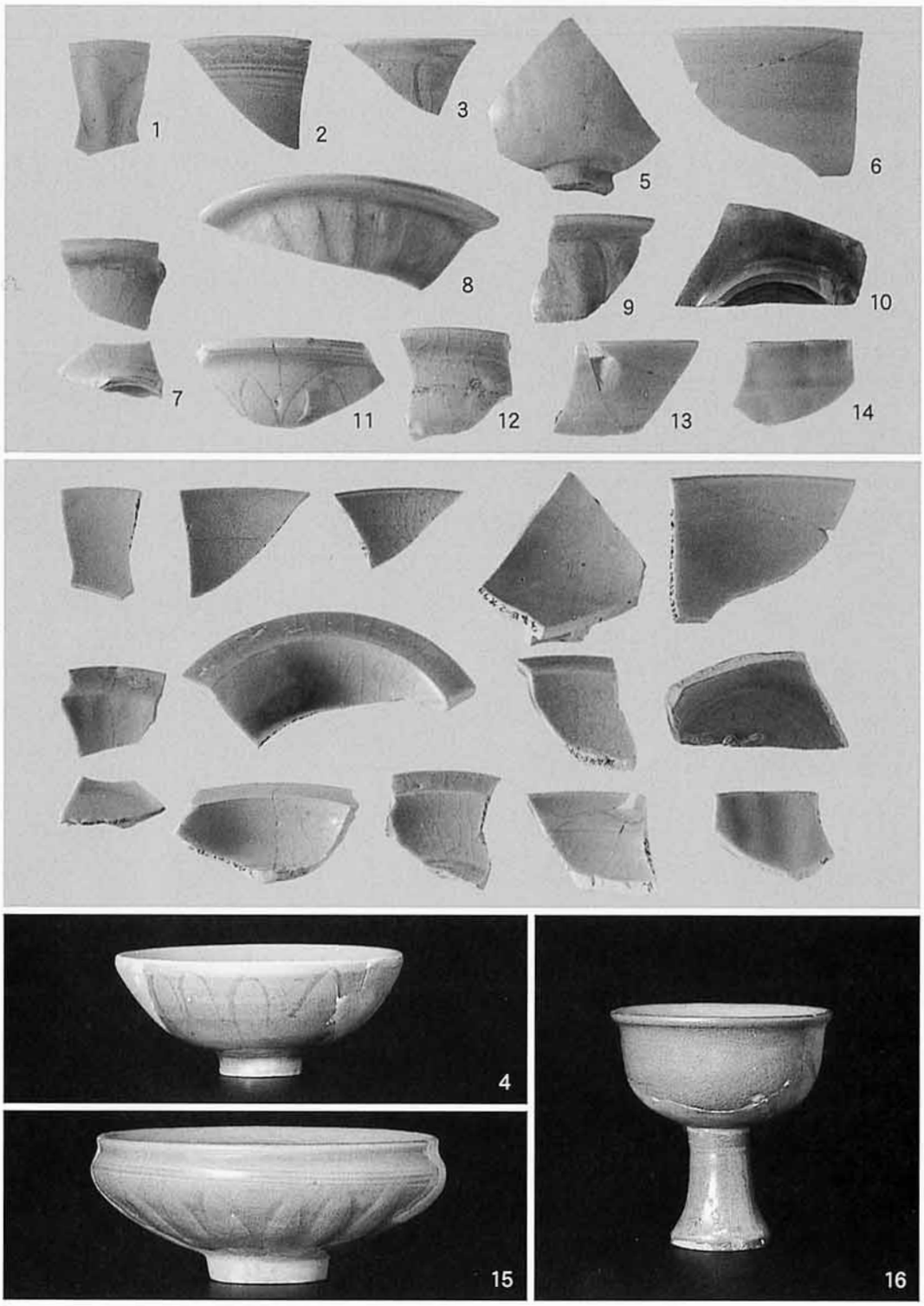
第 34 図 (PL.49)　第Ⅴ層出土土器・カムィヤキ須恵器　1. 土器鍋　2. 同壺　3 ～ 4. 同底部　6 ～ 8. カムィヤキ須恵器壺　9. 同有文胴部　10・11. 同底部



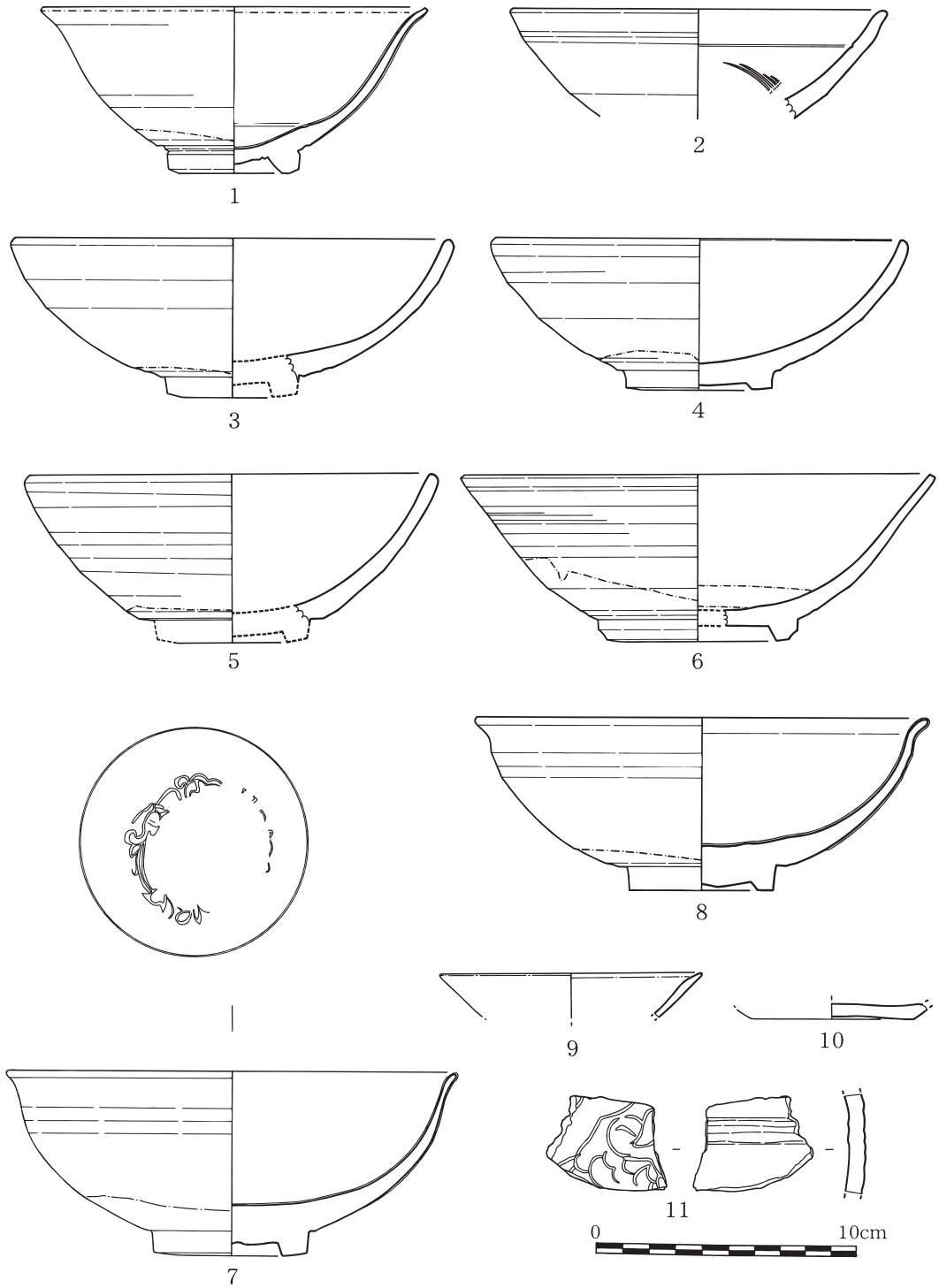
PL.49（第 34 図）　第Ⅴ層出土土器・カムィヤキ須恵器　1. 土器鍋　2. 同壺　3 ～ 4. 同底部　6 ～ 8. カムィヤキ須恵器壺　9. 同有文胴部　10・11. 同底部



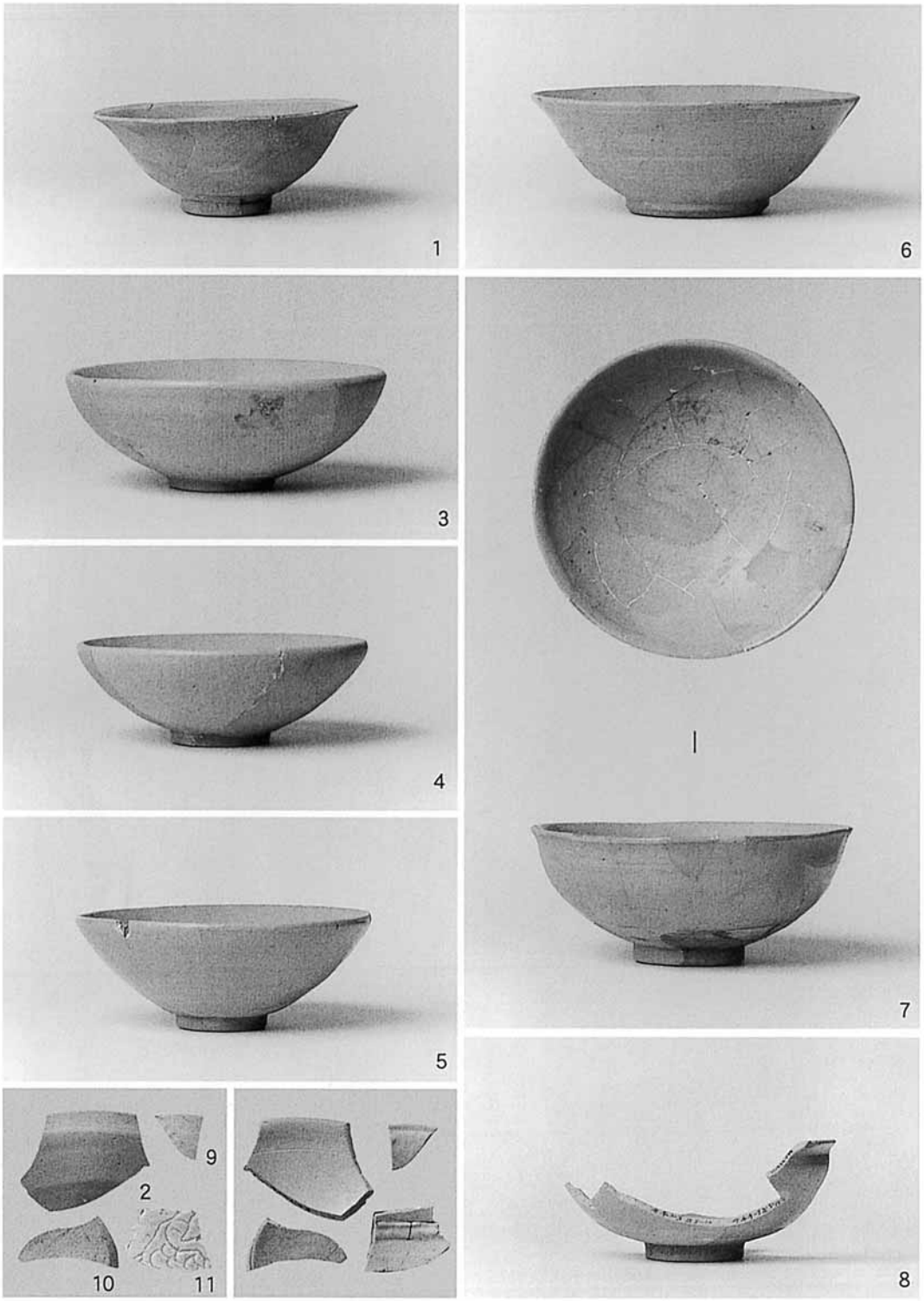
第 35 図 (PL.50)　第Ⅴ層出土青磁
1 ～ 6. 碗　7 ～ 13. 皿　14・15. 鉢　16. 杯



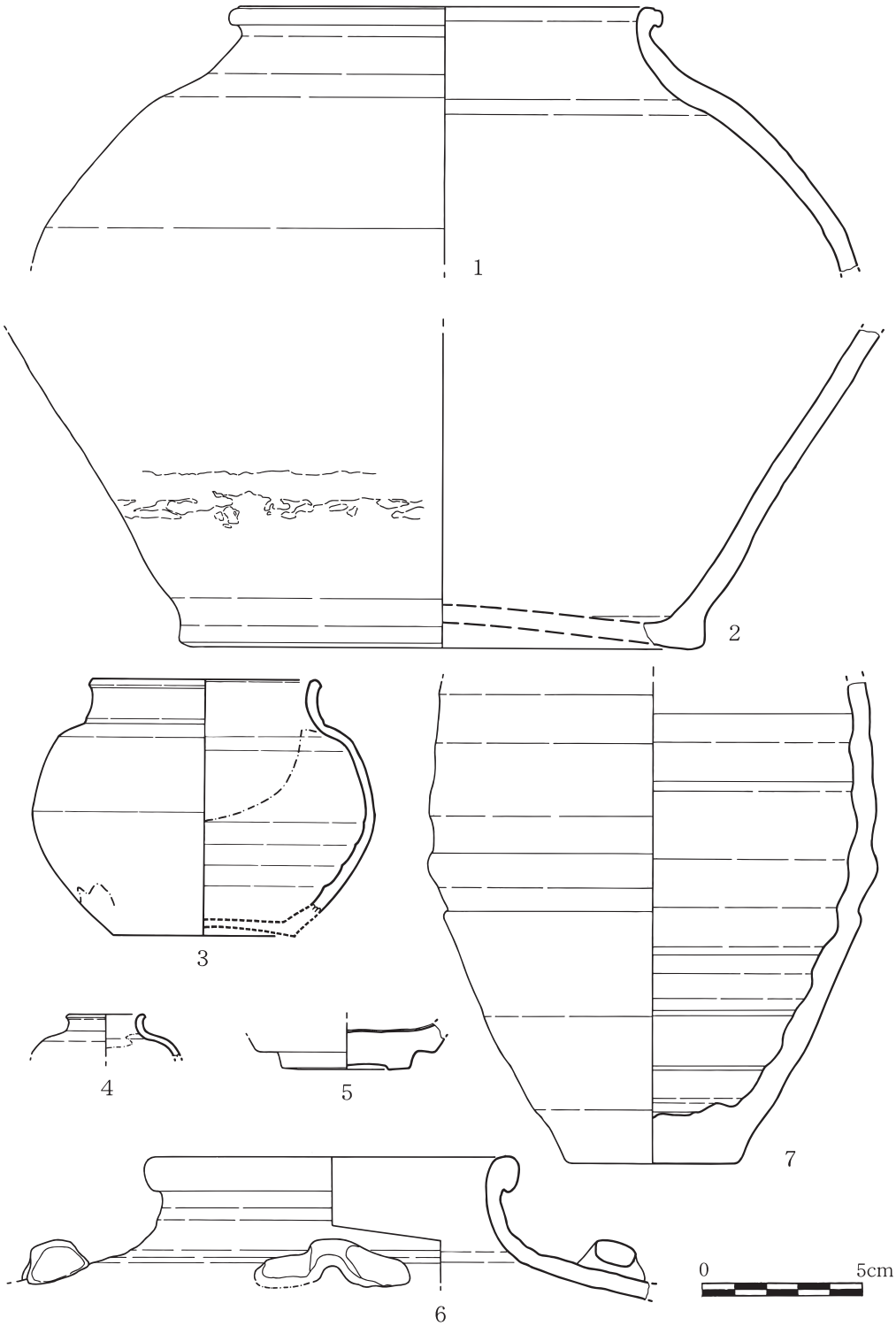
PL.50(第 35 図)　第Ⅴ層出土青磁
1 ～ 6. 碗　7 ～ 13. 皿　14・15. 鉢　16. 杯



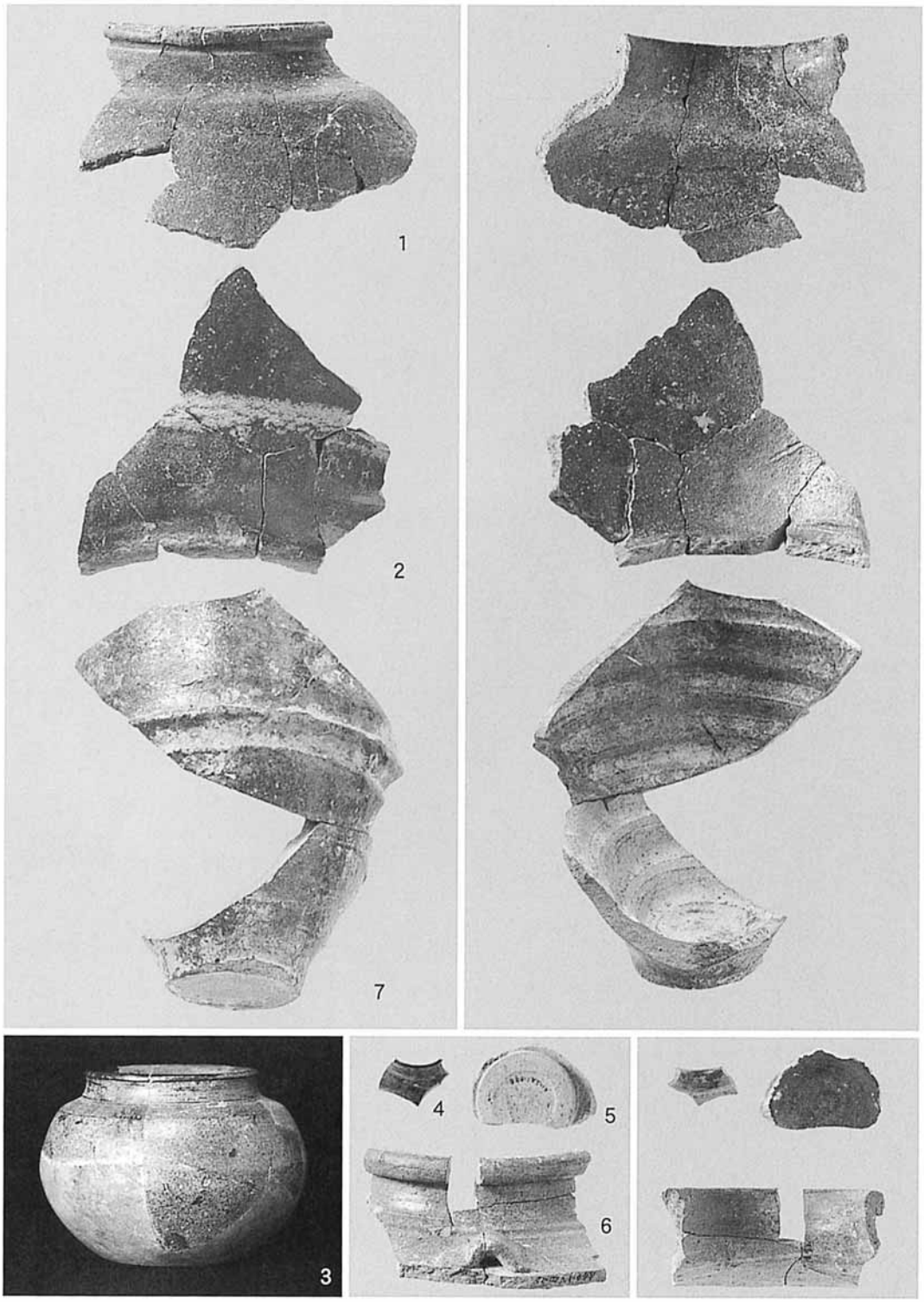
第 36 図 (PL.51)　第Ⅴ層出土白磁
1 ～ 8. 碗　9・10. 皿　11. 瓶



PL.51(第 36 図)　第Ⅴ層出土白磁
1～8.碗　9・10.皿　11.瓶



第 37 図 (PL.52)　第 V 層出土褐釉陶器
1・2・7・6. 褐釉壺　3・4. 茶入壺　5. 黒釉碗



PL.52(第 37 図)　第 V 層出土褐釉陶器
1・2・7・6. 褐釉壺　3・4. 茶入壺　5. 黒釉碗